今日のソ連邦

1978
4
2.15.



ソ連軍創立60周年に寄せて

モイセーエフ・バレエ来日

カフカズに獲物を追って(上)

今日のソ連邦

第4号　1978年2月15日

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

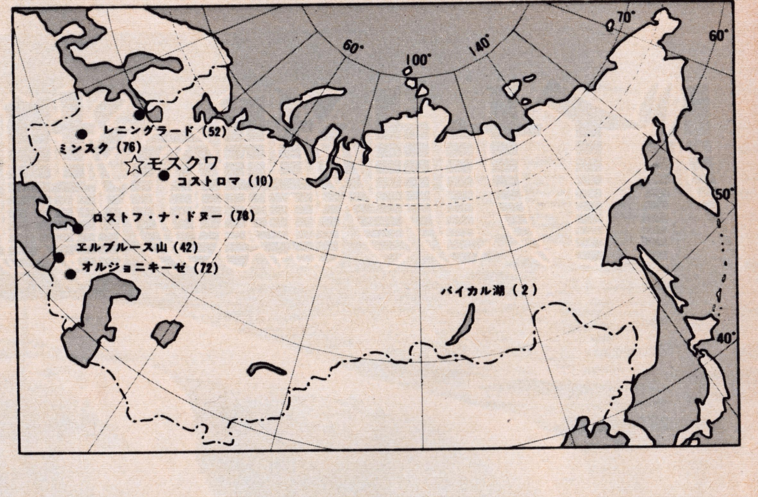
本誌を入手するには

下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料……1200円
1年分送料……2100円

同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2—1—1　電話(583)4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3—9—13
郵便番号141　電話(03)447—3536(代表)
振替口座東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

緊急レポート

バイカル湖の湖底を探る

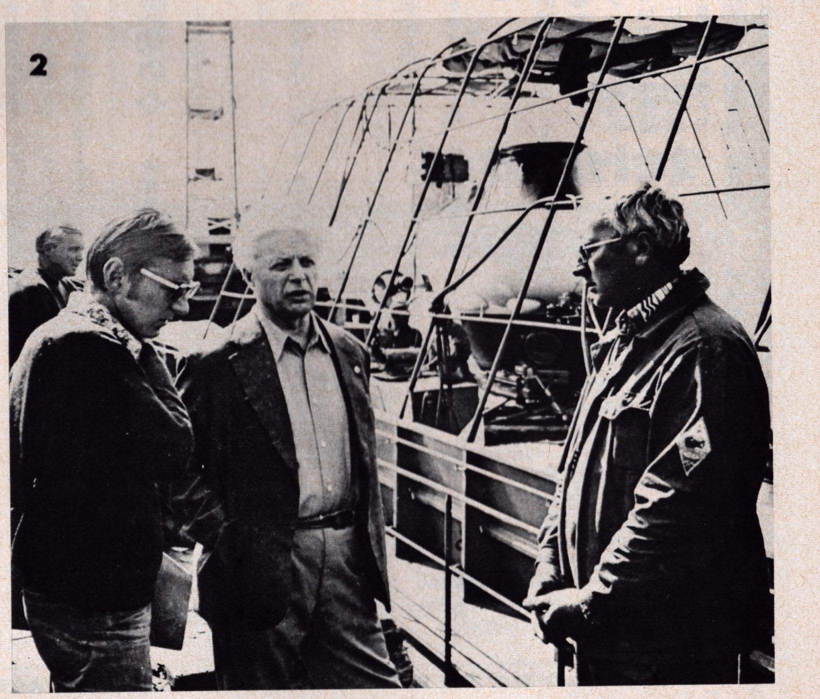
ミハイル・ラストルチュク

カメラ　Y・ルニコフ



1

世界一深い湖――バイカル湖で約2ヵ月にわたりソ連科学アカデミー総合調査隊が作業を行った。この調査隊には、潜水装置〝バイシス〟を2機使って湖底に下りるグループも参加していた。この小潜水艇は、1620mというバイカル湖の最深地点でも活動できる。記者はバイシス2号の乗組員とともに潜水に加わることを許可された。

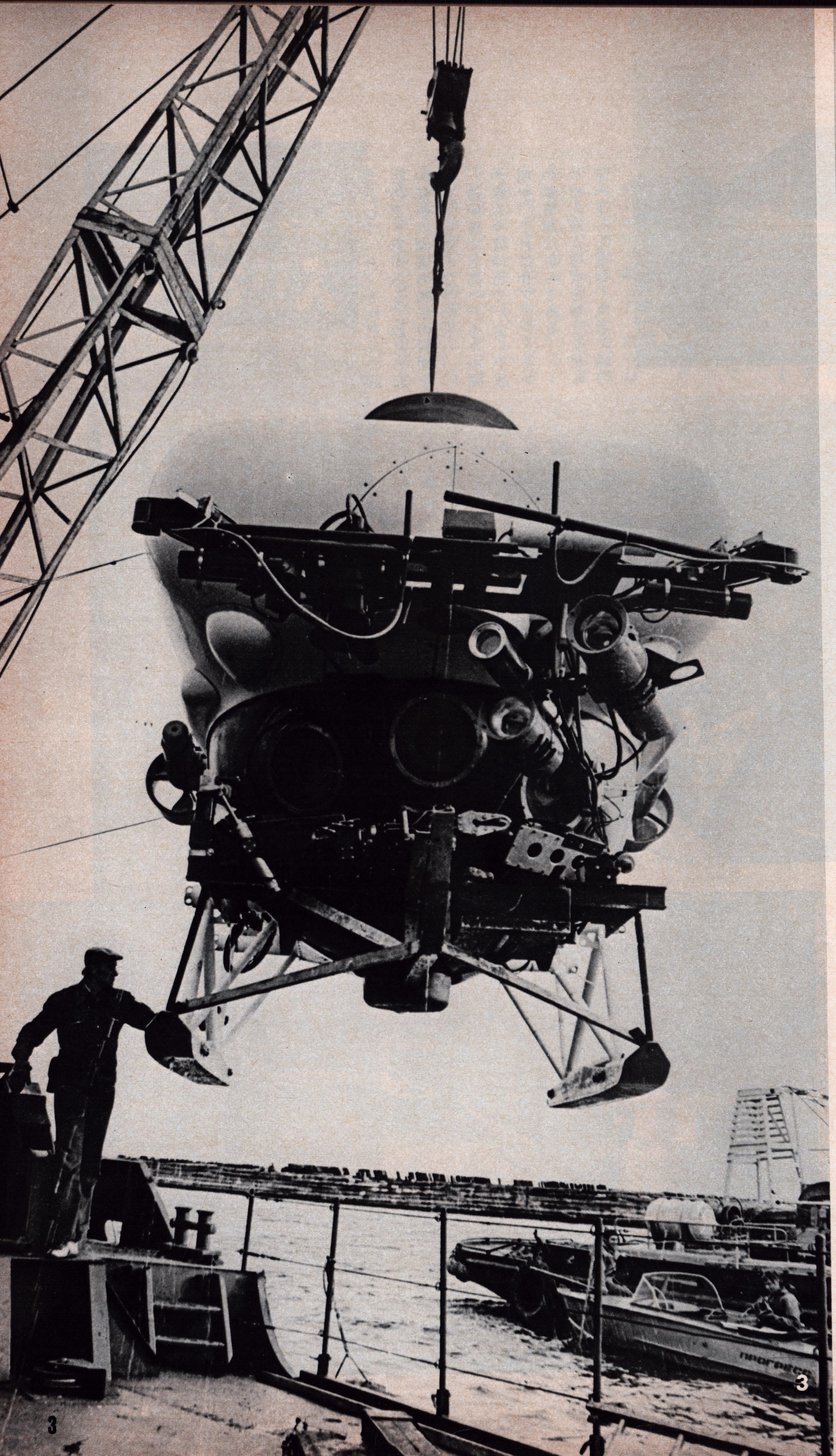


2

1 冬のバイカル湖岸

2 潜水調査の結果を話し合う科学者たち。左からE・ミルリン調査隊長、A・モーニン・ソ連科学アカデミー海洋学研究所長、Y・カリン主任技師。

3 潜水艇を水面に下ろす。



3



…早朝、われわれはセーターとウール地の上下を着、厚い毛糸のくつ下をはいた。湖の底は寒い。潜水艇のがんじょうな球状の室内は直径が2mあるが、かなりきゅうくつだ。計器板に囲まれているため、副操縦士とわたしは身をよじってそれぞれ小さい長いすに横にならなくてはならず、艇長はわれわれの間に立てひざをしている。それぞれの前にのぞき窓がある。われわれの任務は湖底の峡谷の斜面を調査することだった。

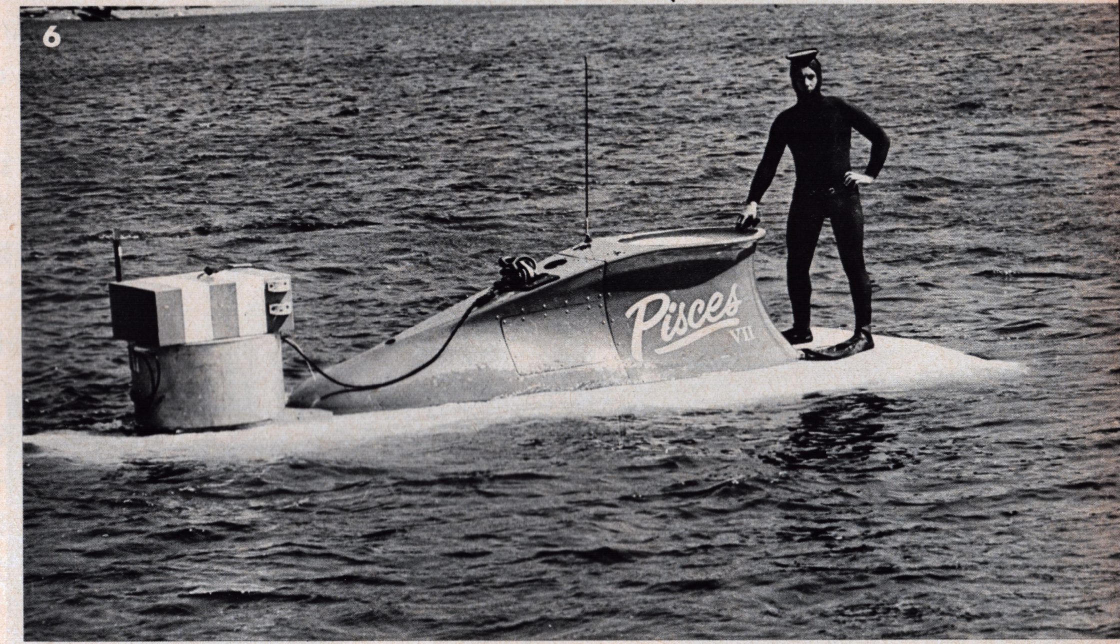
透明度で名高いバイカル湖の水も今は緑色で、全く不透明だ。これは今プランクトンの繁殖期だからである。

だんだん速度を増しながら下へ下へと進む。丸窓の緑の光が急速に色濃くなって行く。20m、30m…　ガラスびんのような暗緑色をした窓ガラスがまっ黒になっていき、われわれはサーチライトのスイッチを入れる。前方に灰色の光が射し、その光の中で微細なプランクトンや小えびや小魚が踊っている。

水深約50mより深い所の水は、常に水晶のような透明度を保っているようだ。しばらくして湖底が近づいてくるのが見え始めた。ふわりと着地する。水深は四二五m。あたりは緑色の闇に続く黄色い沈泥。

パイシスは軸を中心にして方向転換した。今われわれには砕石の山の頂上が見えるが、





4　バイカル湖の学術調査船ベレシチャーギン号
5　潜水中の艇と無線で連絡。左からA・ニキーチン主任技師とA・ポドラジャンスキー潜水班長
6　潜水開始直前の〝パイシス〟

その背後はまっ黒な深淵だ。レーダーに黄色い線が走って、左前方、われわれの上に岩壁が迫っていることを知らせている。艇長は迅速に方向転換し、さらに深く、四八〇mまで降りる。岩壁にすれすれまで接近する。岩壁はチョコレートケーキの切り口に似ており、白から暗褐色の岩層を成している。地質学者のアブラモフがこの岩を綿密に観察し、メモを取っている。

砕石の山を越えた。峡谷はさらに下方の寒々とした闇の中へと伸びている。斜面は黄色い粘土におおわれているが、ところどころは多孔性や層状の粘土になっている。もっと下に進んだところで、アブラモフの希望で一時停止し、写真を取り、マニピュレータの黄色い手を使って岩片を切り取り、特殊な箱に入れる。

われわれはもう水深六一〇mの所にいる。室内は寒く、じめじめして、壁は汗をかき出した。このあたりの水温はわずかに3度。――窓ガラスの外は相変わらずの真っ暗闇、ライトの明かりが射すだけだ。さらに下り続ける。深度計の針は六七〇mを指している。現在地は峡谷の一番底だ。ここは石がなく、平らでどろどろしており、灰黄色である。地図によれば、このように平らでわずかに傾斜した水底をつたって、一四〇〇mまで下りられるはずだ。

水上から浮上命令が出た。こうしてわれわれは、今まで人間の目に触れることがなかったバイカル湖底の冷たい神秘の世界をあとにした…

学者たちはもう長い間、このシベリアの湖の出生の秘密を解き明かし、未来への鍵を見つけ出そうとしている。今回の調査隊の特徴は、最新機器を使用したことよりもむしろ、海洋底調査法を適用した点にある。

海洋底調査法が使われたのは、バイカル湖断層帯が世界の海洋底を走る、海嶺と呼ばれる巨大な地殻の割れ目（リフト帯）と同じものだ、との最新学説に依ったからだ。このいわゆるリフト帯は、地球の上層が乗っている巨大なプレート（岩盤）群の継ぎ目と接している。こういうプレートによって地球の表面は七、八つに分かれている。学者の見解では、互いに動いている大洋プレートと大陸プレートがぶつかる場所に割れ目（海嶺）ができるのであって、言い換えればプレートの運動が最も顕著に現われるのはこの割れ目だ、ということになる。

海嶺系にかんする学術的な資料は、ソ連と米国の学者が中心となってかなり大量に集められている。従って現在では海洋専門の地球物理学者や地質学者は海嶺系の特徴をはっきりとつかんでいる。また陸上専門の学者たちの手元には東シベリアの地質構造にかんする少なからぬデータが集まっている。そして今、海洋地質学と伝統的地質学の接点に世界一深い湖の真の姿が現れようとしているのである。

学者たちはバイカル・リフトが広がりつつあることを示す証拠を少なからず集めている。湖底の温泉や頻発する地震もその証拠だ。地震は震度10（改正メルカリ震度階）に達することもある。

潜水調査は、生物学にも貴重な資料をもたらした。海綿動物は湖水表面付近だけでなく、湖底にも住んでいることが発見されたのだ。海綿動物の〝食生活〟が水をろ過しており、それが湖の自己浄化作用になっている。

人間が初めてバイカル湖底を訪れた。見るものすべてが新しく、珍しい。だが、本当の発見はこれからだ。地質学的にも生物学的にもまだまだ未知のバイカル湖底の研究は、たった今始まったばかりなのだ。

☆　☆　☆

✻ **トピックス**

超硬金属を加工する装置

モスクワの南 200kmにあるツーラ工業大学の研究員たちはこのほど、超硬度の金属と合金でできた部品の寸法を電気化学的に加工する技術と装置を開発した。この装置は、生産性と作業の精密さで海外の類似装置よりも優れている。最も長時間を必要とする作業でも、20分間で楽に済ませることができる。

装置は次のように作動する――電場を持った電極が、加工される部品に接触するまで近づけられる。それから0.25―0.05mmだけ電極を後退させ、1秒間そのままにしておく――この瞬間に衝撃電流が流れる。電解液で処理すると、この電流の作用を受けた部分の金属層が溶解する。加工される部品と電極のすき間が小さければ小さいほど、取り除かれる金属の層は厚くなる。部品が必要な寸法になるまでこのオペレーションが繰り返される。

日本に供給されるソ連木材

V・タラネンコ

九三〇〇万立方mを納入ずみ

在日ソ連通商代表部で聞いたところによると、一九五四年から一九七七年までの間に九三〇〇万立方mという巨大な量のソ連木材が日本に納入されている。

ソ連の対日輸出を特徴づける統計上の数字を検討してみると、木材輸出はすでにずっと以前から、輸出品目のなかで第一位を占めており、それは年間貿易高の25—30%に当たる。昨年だけでも、八八〇万立方mのシベリア材が日本の港で陸揚げされている。

ところで、遠くはなれたシベリアに、どれくらいの森林があるのだろうか。わが国の森林面積は七億六九〇〇万haで、世界の森林の1/3を占めている。ソ連の木材蓄積量は八〇〇億立方m以上で、世界第1位。これは、世界の木材蓄積量の約50%になる。これだけの蓄積量のうちから、伐採されているのは毎年約一億立方m。伐採は全国で行われているが、現在ではソ連欧州部の北部地域には、未開発の森林は残っていない。したがって新しい森林の開発はシベリアと極東ですすめられている。

現在わが国では、全木材蓄積量の69%にあたる五五〇億立方mが、伐採を必要としている。

言うまでもなく、木材はウラルから日本までは運ばれていない。あまりにも高くつきすぎるからだ。日本向け輸出にあてられる木材は、東シベリアと極東で調材されている。ソ連の全木材資源の2/3がこの地域に集中している。極東には樹齢一〇〇—一二〇年の木が多く、これが全林地の約80%を占めている。樹木の約50%がカラマツ、17%がエゾマツとトドマツ、5%がシベリアベニマツとアカマツである。

極東に生育している針葉樹材は、良質で木目が美しい点でとくにすぐれている。シベリアベニマツの木目はとくに美しい。カラマツはその質において特別の位置を占めている。それは湿気にたいする抵抗力が強い。このため、水工設備や住宅建設用製材に広く使用されている。シベリア産の数多くの広葉樹系の木材、とくにトネリコ、カシなどは寄せ木細工、合板、建設部品などのすばらしい材料とされている。

巨大な木材蓄積量があるにもかかわらず、われわれは木材を伐採するだけではなく、新しい植林も行っている。

わが国では、都市や居住地点の周囲や、河川、鉄道、自動車道路に沿った地区では、伐木が行われていない。

長年にわたって、他に輸送手段のない地域ではとくに、木材は伐採地点から積み替え地点まで、川を利用して浮送されていた。しかし、「転ばぬ先の杖」ということわざもある。川による木材の浮送は最も安上がりの方法であるが、それは魚の繁殖を妨げる。この問題は、世界の海洋の魚資源の縮小ならびに多数の国によるいわゆる経済水域の設定（このためにわが国は漁獲高の半分以上——五五七〇万tを失った）との関連において解決されねばならない。いまやますます多くの魚が、国内の湖や川で養殖されるようになるだろう。このため木材の浮送は、一〇〇〇近くの川（総延長三万km以上）で廃止されている。一九六五年から一九七三年までの9年間に、木材のばら浮送の量は三八〇〇万立方m減少した。



雪のタイガでの伐採作業。カムチャツカ産のカラマツ材は日本で需要が大きい。



伐採・搬出作業はすべて機械化されている（イルクーツク州ブラーツク地区で）。

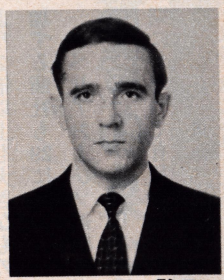
木材を大切にするもう一つの方向としてあげられるのは、木材加工の屑を板紙、紙、木質パネル、包装材料の製造に広く利用することである。これにより木材の不合理な伐採の量を少なくすることができる。この点でかなり興味深い数字をここに引用しておきたい。たとえば、1tの段ボールを生産するのに20立方mの用材が必要であるが、同量のそれを5立方mの低質の木質繊維で作ることもできるのである。この問題を解決する方向で作業することにより、はやくも現在の5ヵ年計画の末期には、過度の調材量を減らし、結局において10万haの森林を伐採から守ることができるようになる。

だれがソ連木材を国際市場に提供しているのだろうか。わが国の木材輸出の発展にたずさわっているのは、一九二六年10月23日に創設されたエクスポルトレス（全ソ木材輸出公団）である。同公団は現在、70ヵ国以上と貿易しており、その貿易相手は約九〇〇の外国商社である。

日本への木材輸出

駐日ソ連通商代表部のレオニード・ネドセコ・木材部長に、木材の対日輸出について語ってもらった。

「日本への木材の定期的な供給は一九五四年に始まった。この年、ラザレフ岬港（ハバロフスク地方）から二五〇〇立方mのエゾマツ・トドマツの原木を積んだ最初の船が日本へ向かった。ソ日両国が地理的に近いことが、日本への木材供給の増大を刺激する要因になっている。ここでは、木材の価格の中で大きな割合を占める輸送費が大幅に節約されるからである」



L・ネドセコ・駐日ソ連通商代表部木材部長

この要因だけが日本への木材輸出の拡大に決定的な影響を与えているのか、それとも、他にも原因があるのか？

「もちろん、これだけが理由ではない。日本の実業界は木材の質、とくにシベリア産のエゾマツ、カラマツ、アカマツ、ベニマツの質を高く評価している。その一部は木造住宅の構造材として使われ、他の一部は内装材として使われている。右下の表に見られる、日本への木材輸出の急激な伸びは、いま述べたことの裏付けとなるだろう。

その他の数字も注目に価する。一九七六年に、わが国は日本のパートナーに八一六万八〇〇〇立方mの木材を供給したが、これは日本の木材輸入総量の18・1%を占めた。このような指数は、ソ連の木材輸出関係者、日本の輸入業者の団体——全国北洋材協同組合連合会の共同の努力によって得られたものである。

年度	供給量（単位千立方m）
1954	2.5
1965	2616.3
1970	6994.8
1975	7872
1977	8800

日本のバイヤーは、オリガ湾、プラストゥン、ルドナヤ・プリスタニの諸港から供給される木材の質を正当に評価した。プリモーリエ（沿海）地方のこれらの場所では、かつて人間が踏み込んだことのない未開のタイガで木材調達が行われている。

サハリン島からの木材の供給も、すでに伝統的になった。日本の規格に従って供給されるエゾマツ・トドマツの原木は、北海道で大きな需要がある。

チクシ湾から供給される木材はとくに良質で、その樹齢は一〇〇—一二〇年を下らない。これらの樹木は寒冷地で成育したため、年輪が緻密で、従って強度が高く、木目が美しい。このよ

うな木材は、良質の製品をつくるのに適している」

どんなパートナーがこの貿易に参加しているか？

「日本への輸出を遂行する仕事には、数百の木材調達企業がたずさわっている。これらの企業は、ある場合には、製品を鉄道で四〇〇〇—四五〇〇kmも離れた極東の諸港へ供給している。

木材製品の輸出に参加しているのは、イルクーツク州、クラスノヤルスク地方、アムール州、ハバロフスク地方、プリモーリエ（沿海）地方、カムチャツカ、サハリンその他の木材・紙パルプ工業の諸企業である。日本への輸出用木材の積み出しは、ソ連極東の21の港を通じて行われている。これは、木材積み出しの、文字通り〝海の門〟である。

ウラジオストク、ナホトカ、ワニノの諸港は、日本のパートナーによく知られている。極東諸港の貨物処理能力は、ソ連最大級の港——ウランゲル湾内のウォストーチヌイ港の完成とともに拡大される。

アムール川下流地方の諸港（マゴ、ラザレフ岬、デ・カストリ、ニコラエフスク・ナ・アムーレ）はその能力を増大している。

戦後、全ソ木材輸出公団は、日本の多数の中小商社と用材供給契約を結んだ。現在日本の50以上の会社がこの公団の貿易パートナーであり、その契約高は五〇〇〇立方mから七五万立方mまでの間を上下している」

最近の木材貿易にはどんな新しい形態があるか？

「一九六八年7月29日に、極東木材資源開発用の設備、機械、資材その他の商品を日本からソ連へ供給し、ソ連から日本へ木材を供給することにかんする基本契約が締結された。

ソ連側からは全ソ木材輸出公団が、日本側からは特別に創設された会社——KS産業が、この契約に調印した。

設備の購入のために、KS産業は総額一億三三〇〇万ドル、期限5年の銀行クレジットを提供した。

機械設備の支払いのために、全ソ木材輸出公団は5年間（一九六九—一九七三年）にわたって、七六〇〇万立方mの木材を日本へ供給した。

木材にかんする第1次基本契約の遂行には、日本の13の会社が参加したが、これはソ連と日本のあいだの最初のコンペンセーション方式による取引きであり、その成功的な実施は、他の諸分野における協力の前例になった。

第2の協力プロジェクトは、一九七一年12月の工業チップにかんする基本契約の調印によって開始された。この契約の期限は10年（一九七二—一九八一年）。日本側は機械設備の購入のために総額四五〇〇万ドル、期限6年の商社クレジットをソ連側に提供し、ソ連側は10年にわたって、日本のパルプ産業のために、約八〇〇万立方mのチップと四七〇〇万立方mの広葉樹材を供給することになった。

第1次の木材基本契約の遂行によって十分な経験を蓄積した両国は、このような形態の互恵的協力を続けることが必要であるという結論に達し、一九七四年7月30日、木材と設備の供給にかんする第2次基本契約を東京で締結した。この契約は、一九七五年から一九七八年までのあいだに、総額五億五〇〇〇万ドルの日本製機械設備その他の商品をソ連へ提供し、一九七五年から一九七九年にわたって、ソ連産の一七五〇万立方mの用材と九〇〇万立方mの製材を日本へ供給するというものであった。このように、第2次基本契約は、その規模において第1次基本契約より2倍以上も大きなものであり、参加する商社も29にふえた。

シベリアおよびソ連極東の木材資源開発におけるソ連と日本の協力は、長期にわたって有利な展望を持っている。なぜなら、東シベリアとソ連極東だけでも、ソ連の森林面積の63%が集中しており、その木材資源量は四五〇億立方m（全世界の木材資源量の25%）もあるからである。

現在の協力形態が、ソ日両国の貿易経済関係に長期的計画性の要素を持ち込み、その不断の発展を促進することができるということも、この形態の長所である。いまや、第3次基本契約について考えるべきときである」



雪の道を日本へ向けて搬出されるシベリアの木材

日本側当事者は語る（電話インタビュー）

昨年は二三万立方mを輸入

社団法人北海道日ソ貿易協会理事長
株式会社日ソ貿易取締役社長
財団法人北海道日ソ友好文化会館理事長
柴野 安三郎 氏

わが社は、一九七三年にソ連の木材輸出公団から三万立方mの木材、同時に全ソ輸出入事務所「ダリイントルグ」から二万立方mの木材を輸入することから出発しました。昨年は木材輸出公団から一四万立方m、その他ダリイントルグや全ソ消費協同組合中央連合会「ツェントロソユーズ」等からのものを含めると合計約二三万立方mの木材を輸入するまでになりました。

北海道では、膨大な国有林や道有林がありますが、自然保護という点から5年ほど前から伐採計画が縮小されております。その縮小された分を、社団法人北海道日ソ貿易協会の直属商社である「日ソ貿易」が輸入し、全道の木材の協同組合を通じて道内の製材業者に供給することになりました。

北海道では、日本全体とくらべ、エゾマツ、トドマツが非常に好まれています。そこでこれをソ連側に対して期待しているわけです。ソ連材は、年輪と年輪の間がつまっているので、材質が良い。

日ソ間の経済関係は、拡大してゆくでしょう。特にわが社としては、北海道ととりわけ東部シベリア地域との経済関係をさらに強化するよう努力したいと思います。具体的には、ソ連の第10次5ヵ年計画の諸計画と北海道の地域開発、経済計画とをどのように具体的に結びつけて行くか、という点で相互に研究し、努力する必要があります。そのための中心的な仕事を、「日ソ貿易」の母体である社団法人北海道日ソ貿易協会において、強力に推進して行きたいと考えています。

特にここで強調しておきたいのは、経済関係をより強力に発展させるためには、政治的関係と友好関係を強力にしなければならず、またその反対もしかりです。貿易や経済が友好や政治に無関係であるという考え方や進め方では良くないと考えています。

材質の良いシベリア産木材

福士木材株式会社（新潟市）
代表取締役社長
福士 五郎 氏

わが社は50年前に設立されました。ソ連との貿易関係は先代より続いていますが、正式には一九六一年から始まり、現在におよんでおります。この間ソ連側関係機関とは、非常に親しくさせていただいています。

私たちは、シベリア産木材に大変満足しています。シベリア産木材の材質は、住宅用の構造材として非常に適しており、日本で広く利用されています。

昨年度のソ連からの木材輸入実績は、一八万tでした。今後はいっそう拡大されることでしょう。また人事の交流を深め、日ソ間の関係を密接にする必要を痛感いたします。

ソ連材の利用を重視

松本木材株式会社（境港市）
取締役社長
松本 功 氏

境港では戦後日ソ貿易が再開されてから2年目に木材業者の協同組合がソ連産木材の輸入を始めましたが、わが社として直接、商社を通じて取引を始めたのは一九六七年からです。

私どもの会社は、年によって違いますが、三万—五万立方mの木材をソ連から商社を通じて買い付けをしています。

ソ連木材の用途は、買い付けを始めた当初は、主として鉄筋コンクリート建築の仮設材として使っていましたが、一九七一年ごろから一般用材とか梱包用材にも使うようになり、現在では住宅建築用材としても使うようになりました。

日本では木材を非常に必要としているので、ソ連は対岸ということもあり、ソ連木材を多く使っています。今後はナホトカなどの港が非常に近いということもあり、ソ連木材の利用を重視してゆきたいと考えています。

個性を育てる幼稚園

アダ・バスキナ
カメラ　A・ルイスキン



“みんな、よくかけていますよ！”▶



ここなら、いろいろな遊びができる。

ソ連の保育・幼稚園児の数は約120万人で、就学前児童のうち３人に１人が保育所か幼稚園に通っている勘定になる。これらの就学前児童施設にはだれでも入れるし、経費の80%が国庫負担なので、親の負担分はわずか20%（１ヵ月12ルーブル程度）ですむ。

大きな工場、商店、官庁などには付属の幼稚園がたくさんある。

朝の７—８時に親が子どもを幼稚園に送りとどけると、子どもたちは３度の食事をし、食後の昼寝をして、夕方５—６時までをそこで過ごす。５日間ずっと預けておいて週休の２日間だけ子どもを家へ連れて帰る方式の幼稚園もある。

ソ連の親たちが学校へあがる前の子どもたちを積極的に集団保育に預けている理由は何か？　この記事は、そういう疑問に答えている。

なぜ、子どもを集団保育に預けるのか？――ソ連のヨーロッパ部の中央に位置する人口二五万人余りのコストロマ市の社会学者たちが六つの工場でこの調査をしたところ、次のような結果が出た。回答中、経済的理由は最下位（せいぜい5％）だった。言い換えれば、親たちは、幼稚園に子どもを預ければ、経費の大半を国が負担して、家におくよりお金がかからないということをまったく当然のこととして受けとめているわけだ。「みんなが働いているので家で子どもの面倒をみる者がいない」というのが48％。残りは、集団保育の方が家庭保育よりも良い、という意見だ。

知能か情緒か？

人格の発達はいったい何から始まるのだろう。明らかに知識からだ。知識を吸収する



交通規則のお勉強







下　きょうのお客さんはママやパパたち。

上　幼稚園では動物をかわいがることも教える。

には長いプロセスがかかる。だから幼稚園のカリキュラムにも、数をかぞえる、文字を読む、上手に話す、自然と親しむ、といった教育的要素が含まれている。これらの勉強は学校へ入学する準備だ。

では、就学前教育を活用してぎっしり詰まった学校のカリキュラムを軽減してはいけないだろうか？ なにしろ現代っ子は昔の子どもより発達が早い。幼児の知能の発達を就学前に強化してはいけないだろうか？ この質問をソ連教育学アカデミー就学前教育研究所長のアレクサンドル・ザポロジェツ・アカデミー会員にぶつけてみた。かれの答えはこうだ。

「私は幼児の教育内容の強化には断固反対です。外国の教育者の中には就学前の児童に高等数学、化学、物理の初歩を教えようと提案している人もいますが、私は百害あって一利なしだと考えます。人間の自然な発達段階を勝手に跳び越してはならないのです。この幼児期には周囲の世界を感覚的にとらえる能力が集中的に発達しますからね。幼児の思考は具体的なイメージに富み、生き生きとして、鮮やかです。この段階を跳び越して直ちに抽象的思考を幼児におしつけたりしてごらんなさい、想像力が伸びなくなってしまいます」

しかし他方、就学前教育研究所の学者たちが作成する幼稚園のカリキュラムも、科学の発展とともに変化する。遊びながら学び、学びながら遊ぶ――これが就学前教育の基本的方法である。

幼稚園へは2歳から入れる。そして、年少組（2―4歳）では、一日に30分ずつ二回の授業が行われ、年中組（4―5歳）年長組（5―6歳）の各グループでは、三―四回の授業が行われる。

それぞれのグループが、そのグループの部屋、つまり自分の〝活動圏〟を持っている。幼稚園には、ミニ教室があって、そこには腰掛け付き机、黒板、遊戯具、テープレコーダー、スライド投影機など、本物の教室になくてはならないものがすべて備えられている。広くて低い窓のしきいの上には、その教室の〝生物学実験所〟がある。冬にはここで、ねぎ、にんじん、トマトなどの種が育てられ、春になると、苗が幼稚園の菜園に移植される。数多くの花が咲き、みんながいっしょにその世話をする。ここにはまた、小魚、ハリネズミ、カメ、シロネズミなどがいる小動物園、小さい画家や彫刻家たちの豆アトリエなどもある。

やわらかいじゅうたんが敷かれた遊戯室。子どもたちは、いろいろな遊びをつうじて、描くこと、かたどること、自分の手で作ること、踊ること、歌うこと、詩を読むことなどを習い、なかには数学の基礎的知識を学ぶコースに入るものさえいる。要するに課題は、幼児の知性と感情のいずれをも調和的に発展させることにある。

集団主義者を育て上げる

私には友人がある。ことし5歳のアリョーシャの両親である。このパパとママは息子にたくさんのことを教えている。母語のロシア語、音楽、それに水泳も教えている。祖父母が同居している。どちらも年金生活者である。それでも子どもは幼稚園に通わせるべきだ、ということに家族会議で決まった。なぜなら幼稚園には家庭にないもの、つまり子どもの集団があるからだ。

そして集団が教育する。集団は利己主義、貪欲、甘えとたたかう。たたかうといっても、もちろん〝目的意識〟を持っているわけではない。欲が深く、意地の悪い子とは遊ばないのである。

しかし、集団のなかに道徳的微小風土を作り出すことを子どもたちに任せきることは、はたして正しいだろうか？ そのようなことをすれば、勝ちを制するのは、最も力のあるもので、最も善良なものではないにきまっているではないか。

ソ連の就学前教育の権威ワレンチナ・ネチャーエワ教授はこう考えている。「集団は、子どもたちが家庭から携えてくる高い道徳的水準を維持しなければなりません。このためには、教師は子どもたちが善良で誠実で同情心の深い子どもに倣うように事を行わねばなりません。教師は子どもたちの注意を仲間の性格と性向の最も良い面に向けさせ、遊びのなかでも子どもたちに順番に主役をつとめさせます。どの子にも、自分は追い越さ

れ、〝見捨てられている〟と感じさせてはなりません。集団主義者が育て上げられるふん囲気が、子どものグループのなかに、このようにして形成されるのです」

家庭のように

子どもの個性の発展に両親の愛情ほど良い影響を与えるものはないという点では、現代のすべての心理学者、教育学者、小児科医の意見が一致している。

モスクワ国立大学心理学部長アレクセイ・レオンチエフ教授は「子どもは3―4歳で基本的な精神的機能のすべてを身につける」と確信している。「精神的機能」とは、なによりもまず、愛し、共同で体験し、他人のことに心を配る能力のことである。そしてこのような能力は感情の反映として、感情にたいする答えとして生まれるのである。

子どもは、大人の情緒的気分にたいして敏感である。もしも幼稚園に、子どもにとって必要な情緒的ふん囲気がつくり出されておらず、両親とともに家にいるときのような優しい、思いやりのあるふん囲気がなかったならば、集団的形態の教育の構想がどんなにりっぱなものであったとしても、子どもがこのような形態の教育に心からなじむことを期待できるだろうか。

教育者の教育

知的教育、道徳教育、情緒教育……幼稚園では、だれがこのような教育をするのだろうか？ われわれが自分の子どもを託する相手はだれだろうか？

それはまず老練な教育家である。彼女はかならずしも専門の教育を身につけているとはかぎらないが、天賦の高い教育的直観にめぐまれている。

しかしその数は減っている。その後を埋めているのが、教育中等専門学校と教育大学就学前教育学部出身の若い娘たちである。国内には現在、四〇八の教育中等専門学校があるにすぎない。これらの学校では約三〇万人の学生が学んでいる。かれらは経験豊かな教育者の指導を受けながら、幼児教育の実習を行っている。学生たちは児童生理学や児童心理学を学んでいる。かれらは一般教養をはじめ、美学、体育、音楽などの教育を受けている… そしてほぼ必要なだけの専門家が、幼稚園教師の免状を取得している。

幼稚園で働くことは面白いことだろうか？ 面白い、と私は思う。幼児教育こそは、婦人の最も自然的な要求である。人間の教育――これこそ創造の最高の現れではなかろうか。

幼稚園はたしかに、家庭に代わるものでもなければ、そうしようと努めているものでもない。しかし幼稚園は、親たちにとって最も複雑な仕事――人間を全面的に、調和的に発展するように育て上げるという仕事の負担をますます軽くしているのである。

トピックス

100ヘクタールの自然博物館

シベリア東南部のブリャート自治共和国に、ソ連で初めての総合的な民族学博物館ともいえる保護区が創設されている。保護区があるのは、同共和国の首都ウランウデから数kmのところ。

1980年に完成が予定される面積100haのこの博物館では、建築学的、考古学的対象と自然の対象がうまく統一されている。1980年の完成を待たず、現在すでに、風光明美なこの地を訪れる数多くのツーリストたちは、古代の画家が描いた岩絵、ブリャート人の古い遊牧テント、エベンク族の移動住居などを見ることができる。18haの土地では、200種類を超えるこの地方の動物が、できるだけ自然に近い条件のもとで生息する。訪問客が不安をおぼえることなくこれらの動物を観察することができるようにと、特別の観察台が建設され、ここからシベリアのタイガ（針葉樹林）やステップ（大草原）の動物を心ゆくまで観察することができる。植物区には、この地方の樹木、低木、草、花、漿果などが移植されている。

マイカーか、公共交通か？

ソ連のモータリゼーション計画

ユーリー・トロフィーモフ

国連の資料によれば、22年後の紀元二〇〇〇年には、地球人口の90％が都市に住むようになる。この予測をそのまま信じないとしても、どんな事態が想像できるだろうか。

通勤に片道45分、などというのは、都市の住民にとってはすでに当たりまえのことになっている。だが、問題は通勤の距離にあるのではない。この往復1時間半を、もし毎日歩くのなら、それは大いに結構なことである。だが、どこを歩けばいいのか？

通りを歩けば、自動車の騒音で頭がおかしくなる。大通りでは、呼吸さえ困難になる。特に地方から出て来た人なら、特に臆病や虚弱でなくても、病気になってしまう。都市へ着いたとたんに、家へ逃げ帰るだろう。

たいてい、すべての原因は自動車である。騒音——然り。交通渋滞——然り。大気汚染——然り。だが、現代のこの乗り物はそのピカピカの車体に、それを生み出した人類の失敗と成果だけを反映しているのだろうか？ 問題をもっと興味深いものにするため、どのような条件のもとでなら自動車は、害よりも多くの益をもたらすか考えてみよう。

マイカーは繁栄の象徴か？

先の第9次5ヵ年計画期中（一九七一―七五）に、ソ連の乗用車生産台数は4倍にふえ、初めてトラックやバスの生産台数を上回った。マイカーの購入台数は、一九七〇年の7倍にふえた。モスクワでは向こう20年間に、マイカー所有者の数は住民一〇〇〇人当たり二〇〇人の水準にまでふえることが予想されている。ソ連にはすでに、その水準に達している都市もある。

当然のことながら、都市におけるマイカーの比重はどの程度が限度か、という問題が起こる。経験によれば、同じ人数の乗客を運ぶのに、マイカーは公共交通機関の10―15倍の道路面積を必要とし、10倍の駐車スペースを必要とすることが知られている。

はたして、よその失敗をくり返す必要があるだろうか？ 交通事故（その50％はマイカー族が起こしている）の増加、交通渋滞、騒音等々。まして、この分野ではソ連にも独自の経験があるのだ。

ソ連のモータリゼーションの概要は、基本的にはすでに一九二〇年代にできていた。すでにこのとき、公共交通機関が乗客輸送システムの基本であり、マイカーは補助的なものにすぎない、ということが決まっていたのである。

このような理論は、むしろ実践上の経験から得られたといえる。一九二〇年代に、わが国の公共交通機関は（マイカーは言うに及ばず）発展の緒についたばかりだった。当時の外国の評論家たちは悪意をこめて書いた——ロシアは見えすいた貧困が理由でバスに軍配を上げている、ボリシェビキの理論はマイカーを持つことのできない者にとって都合がいい、しかるにヨーロッパは、快適な乗り物で、各人がそれぞれ自分のリムジンで未来へ乗り込むだろう、と。

ソ連型モータリゼーション

半世紀後、「都市は多くの問題を解決する手段として、公共交通機関に目を向けている」。これは『USニューズ・アンド・ワールドレポート』誌の記事である。なんと、すでに50年もまえに率先して自動車化した国の雑誌の記事である。このように、自動車イコール個人の繁栄という解釈は、必ずしも先見の明あるものではなかったのである。

一九二四年に生産されたソ連の最初の10台の自動車は、トラックだった。15年後、ソ連はトラックの生産台数でヨーロッパ第1位、世界中でも米国に首位を譲るだけにまでなった。他の国々は、マイカー用の乗用車の生産あるいは輸入をもって、その自動車化プランを始めた。ソ連は公共交通機関に重点を置いていた。

結果は明らかになった。強大なトラックやバスの生産力を持つことによって（バスの生産台数においては、ソ連は長年世界第1位を占めている）特別な努力なしに、合理的な台数の乗用車生産にスイッチを切り換えられたのである。

ソ連型のモータリゼーションは、独自の成果をあげている。現在、便利で安価な公共交通機関が、マイカーの発展を確実に調整している。マイカーはソ連全国でやっと五〇〇万台を上回る程度である。その普及の水準は、他の工業発展国よりも著しく低い。

その代わり、タクシーは一ルーブルで5km、快速に、何のトラブルもなくわれわれを運んでくれる。

ソ連国民の62％は都市に住んでおり、人口五〇万―一〇〇万の都市は29、一〇〇万以上の都市は15もある。人口八〇〇万のモスクワは、交通問題から見ても、ソ連の未来都市のモデルだと言えよう。

モスクワでは、一日平均一五〇〇万人が交通機関を利用している。このうちの80％は公共交通機関の利用者で、この数の中にはマイカー族も含まれている。これは決して不思議ではない。市街地では、その方が速いし、安いし、安全だからである。

減少する交通事故

最近の5年間で、モスクワの自動車数は1/3増加したが、交通事故は逆に1/3減少した。

その原因は、とりわけ、国家自動車監督局が道路で行っている厳しい規制に求めるべきだろう。国際運転免許証を持つすべてのドライバーは、ソ連国家自動車監督局の要求がきわめて厳しいと、異口同音に語る。ソ連では、自分の運転技能を改めて証明しなければならないからだ。プロの運転手は出発するまえに、必ず健康チェックを受けなければならない。アルコールの匂いがするようなら、即刻運転を禁止される。

とはいえ、わが国の交通業務がうまく行われている理由はほかにもある。

たとえば、土地の（したがって道路の）社会的所有やすべての都市設備の社会化など、制度の優位性も指摘しなければならない。これによって多くの問題がはぶかれているばかりでなく、少なからぬ資金も節約されているのである。

モスクワ市内では一九七一年から一九七五年までに、六〇〇万平方mの道路が舗装し直され、新たに数十の橋や陸橋やインターチェンジが建設された。一九七五年末から今日までに、さらに二つの橋、11の陸橋、五つのインターチェンジ、60km以上の道路が開通した。モダンな舗装道路を建設するには、1km当たり数百万ルーブルかかるが、安全を考えれば決して高くはない。

この10年間、モスクワの地下50mほどのところを北西から南東に貫く自動車道の完成が計画されている。それぞれ2車線のこの2本のトンネルの中を、自動車は時速一五〇kmで、ノンストップで走る。

運転手が自動車や歩行者との衝突を避けられるようなレーダー装置の開発に資金が出されている。技術発展の今日の水準は、道路と自動車を一つのメカニズムに統一し、偶然性の要素をゼロにすることを可能にしている。もちろん、交通機関や道路の社会的所有のもとでは、それはいっそう簡単に、安価に実行できる。

歩行者とクルマの共存

とはいえ、名高い〝交通戦争〟にあっては、いまのところもっとも確実であり、かつもっとも危険な要素は、機械ではなくて人間である。一九七六年に、モスクワのもっとも賑やかな、もっとも整備された通りの一つ——レニングラード街道で事故に遭った一六二人の歩行者のうち89人が、運転手がまったく予想できなかったような場所で輪禍に遭っているのである。

交通業務のあらゆる努力にもかかわらず、ソ連では毎年数百件の大事故が起きている。死亡事故は、一日平均2件。国家道路監督局の専門家たちは、何よりもまず教育の欠如を指摘する。したがって彼らは、住民にたいする全面的な交通教育のために努力している。そして周知のように、あらゆる教育は、幼いときから始めるにこしたことはない。

ソ連では一六〇の都市に、児童のための特別な自動車公園——ミニ・サイズではあるがすべての交通設備をそなえた道路や交差点のある広場やおもちゃの自動車教習所が設置されている。子どもたちは説教は嫌いだが、ここでは喜んで〝実習〟する。はじめはペダルを踏む自動車に、やがては本物の自動車に乗って学ぶのである。

幼児はまず、交通規則に通じた歩行者、交通整理員となり、やがて、交通規則に通じた運転手へと成長する。

一九七八年に、ソ連は発達した大工業国の中でただひとり、積極的に自動車の増産をつづけており、しかも都市の大気を汚さず、交通の渋滞もきたしていない。

ソ連の市長たちは、人間と自動車の宣戦布告なき戦争を平和的に終結し、自動車には高速道路を、歩行者には静かさと、広さと、きれいな空気を分け与える手段を知っている。

トピックス

山で見つかった大ザメ

トルクメン共和国の西コペトダグ山脈の支脈で羊の群れを追っていた人が奇妙なものに出会った。それは鋭いぎざぎざの歯のついた小さな骨だった。同じような〝のこぎり歯〟は付近の山地の海抜一〇〇〇mのところでも発見された。

学者はこの〝拾得物〟が体長約30mの有史前の大ザメの歯であることを突き止めた。固いエナメル質で守られていたので、この丈夫な歯は持ち主が死んだあと二五〇〇万年もその唯一の形見として残っていたわけである。大ザメはどのようにしてこのトルクメン山中にやってきたのか？ 恐らく数千万年前、この地域は深さ数千mの海底だったのだろう。

特集 ソ連軍創立60周年に寄せて

平和と社会主義を守る軍隊

ソ連邦元帥 アレクサンドル・ワシレフスキー



アレクサンドル・ワシレフスキー（一八九五—一九七七）はソ連の著名な軍司令官。一九一八年、志願して赤軍に入隊。第二次世界大戦時にはソ連軍参謀総長、ソ連軍最高司令部のメンバーとして活躍、一連の戦線を指揮した。ソ連邦英雄の名誉を2回授与されている。一九七七年12月5日死去。この文はその少し前に書かれた。

1

一九七八年2月23日、ソ連軍は創立60周年を迎える。私のソ連軍勤務も60年続いたことになる。私の脳裏にはごくささいなことまで焼きついて残っている。人民がつくり出した最初の赤軍部隊の初陣の様子や、この軍が新しい条件に応じて再編成されていった過程などが……

西側の一部の軍事専門家の頭を今でも悩ませている難問がある。〝大勝利〟のうちに東進を開始したヒトラー軍がなぜ壊滅的敗北を喫したか？という疑問である。

一九四一—一九四二年当時を思い出してみよう。一九〇個師団をソ連国境に集結させたヒトラー侵略軍は、不意打ちと有利な装備（欧州のほとんどすべての被占領地域の経済はすでにドイツに奉仕していた）を利用して、前進に前進を重ねた。一九四一年秋までにドイツ軍はモスクワ、レニングラードに接近し、ベロルシア、バルト三国、ウクライナの大半を占領した。翌四二年にもソ連軍は苦戦を強いられた。ヒトラー軍はボルガ川に接近し、ザカフカズへの突入をはかった。

ベルリンでは、ソ連がヒトラー総統の軍門にくだるのは、時間の問題だと見て、がいせん気分にひたっていた。しかし、ソ連国民は最も困難な局面においても、自己の正義の事業の勝利を確信していた。ソ連軍はまず戦略上の主導権を敵から奪い、スターリングラードとクールスクにおける決戦でヒトラーの先鋭師団を撃破し、ソ独戦線だけでなく、第二次世界大戦全体の戦局の根本的転換をかちとった。ドイツ軍の退却が始まった。ソ連軍は自国領土から最後の侵略者を追い出すと、欧州諸国民をファシズムから解放するたたかいをただちに開始した。

ソ連軍がファシズム・ドイツに勝てたのは、ヒトラーとその将軍たちがミスを犯し、東部戦線の指導に失敗したからだという説がある。ドイツ軍の対ソ戦における〝奇跡〟を西側の歴史家はこう説明しているわけだが、見当違いもはなはだしい。肝心な点は、社会主義国家の軍隊の性格がこの時期に最もあざやかにあらわれたことにある。

ソ連軍は人民の精神力を吸収している。ソ連軍の目的は勤労者の祖国を守ること、革命の成果を守ることである。この理念は大衆のヒロイズムをはぐくんだ。モスクワ、スターリングラード、クールスク、その他の激戦地で私が見たのは、兵隊服を着たふつう

の市民、つまり労働者と農民が最も勇敢にたたかった姿である。

ソ連軍と人民との切っても切れない強い結びつきが対ファシズム戦の時期にあざやかにあらわれた。前線と銃後は一体となった。数百の工場が短期間に東部地域へ疎開し、兵器の生産に取り組んだ。

ソ連軍は国際主義者の軍隊であり、他の国民の苦痛と喜びを膚身に感じている。だからこそ、ソ連の兵士は一九四四年に侵略軍をソ連領土から撃退しただけでなく、さらにヒトラーの支配下にあった欧州諸国民の救援に向かったのである。解放戦はソ連軍に新たな犠牲を強いた。ポーランドの解放にさいしてだけでも、六〇万以上のソ連軍将兵が戦死している。

ソ連軍のもう一つの特質は同盟軍の義務に忠実であること、戦闘的な同志的態度をとっていることである。対ファシズム戦争においてわれわれは米国、イギリス、その他の反ヒトラー連合国と行動をともにした。ソ連軍は連合国の要請に応じて、同盟軍の状態を楽にするために、何度か攻撃作戦を実施して敵軍をくぎづけにした。

ところが、30年以上たった今、『アメリカーナ百科事典』は、ソ連は、「連合軍の上陸（欧州第二戦線の展開のこと—筆者）を容易にする意向を表明せずに、間接的にヒトラーを助けた」と書いている。奇妙なことだ。

ここで論争しようとは思わないが、一つの証言をあげておきたい。ヒトラー軍のG・グーデリアン将軍の証言である。当時の事情に精通していた彼は、一九四四年の冬と春、つまり連合軍のノルマンジー上陸直前のソ連軍の攻撃についてこう書いている——冬の厳しい激戦はドイツ陸軍司令部の注意をくぎづけにしていたので、春には連合軍の上陸が予想されていたにもかかわらず、西部戦線に兵力を投入することなど問題外とされていた、と。さらに追加すれば、このソ連軍の攻撃の時期にドイツ国防軍司令部は40個師団と4個旅団を西部戦線から東部戦線に移すことを余儀なくされたのである。

いずれにしても、歴史的真実をゆがめた説も、ファシズムにたいして偉大な勝利を収めたソビエト国民とその軍の功績の意義を低めることはできない。ソ連憲法は次のように書いている——「この勝利はソ連邦の権威と国際的地位を強化し、全世界における社会主義、民族解放、民主主義、平和の諸勢力の成長にとって新たな好ましい可能性を開いた」

2

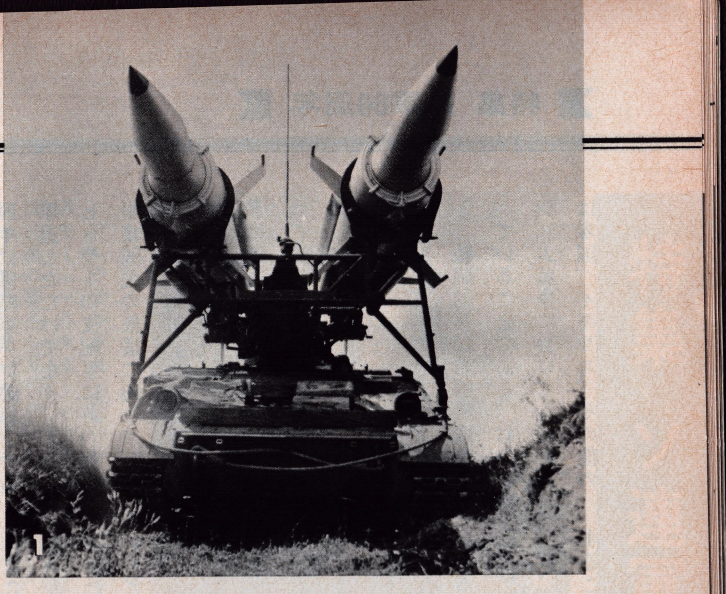
ソビエト国民はほぼ33年の間平和に暮らしてきた。しかし、ソビエト国民は建設にはげみながらも、ヒトラーのできなかったことをやろうとしている人間がまだいることを忘れてはいない。われわれはまだ強い盾を必要としており、ソビエト国民の平和な労働を守る軍隊を必要としている。

ソ連軍はどこをとっても、現代の要請にこたえるものとなっている。信頼できる人々が兵器をあつかっている。今日の将兵は文化水準・教育水準の高い人びとだ。統計数字がこのことをあざやかに示している。ソ連軍将兵の80%が高等あるいは中等教育の修了者である。彼らは軍事技術をさらに高めている。ソ連軍の最近の演習を見たすべての人がこのことを確信した。テレビのおかげで、これらの演習を何百万の人が見ることができた。

われわれの敵はソ連軍の威力の増大にたいするソビエト国家とソ連共産党の配慮をソ連の〝侵略性〟のしるしだと騒いでいる。事実をゆがめ、片寄った見方をさせるために、〝ソ連の脅威〟という作り話が宣伝されている。

ソ連の指導者が何度も言明してきたとおり、ソ連は兵力と軍備の削減をつねに支持してきた。ソ連の平和愛好は社会主義国家の性格そのものから発する首尾一貫した路線である。全欧安保協力会議の最終文書に書かれている国際関係の10原則が新しいソ連憲法に盛りこまれ、国の最高の法律の一部となったが、このこともソ連が平和を愛していることを裏書きしている。

ソ連軍はワルシャワ条約に加盟している社会主義諸国の軍隊とともに平和と社会主義の防衛についている。この同盟は目的と任務の一致、イデオロギーの共通性という強固な基礎にもとづいている。ワルシャワ条約について次のことを指摘しておきたい。西側では社会主義諸国が毎年軍事力を増強していると書いているが、これは事実ではない。ソ連と他のワルシャワ条約諸国はここ数年軍隊を増強していない。兵員はまったく変わっていないのである。



1

カルパート大演習

ステパン・フェドセーエフ
カメラ　L・ヤクーチン

昨年の夏、ソ連軍は、ウクライナ西部で「カルパート」というコード・ネームの軍事演習を行った。以下はノーボスチ通信社軍事評論員ステパン・フェドセーエフの現地レポートである。

われわれが演習地に到着したのは、ちょうど「南軍」が攻撃中の時で、川まで出た「南軍」が「北軍」のがん強な抵抗を撃破、強行渡河して「敵」を追撃し始めていた。「北軍」の砲兵隊と飛行隊は反撃を続け、予備隊も投入された。

大雨のあと、車やタンクでぐちゃぐちゃになった道路はまだ乾いていなかった。防御陣地に近いところほど、つい今しがたまで続いていた戦闘のあとが生々しい。火薬で焼けた白樺、砲弾や爆弾の跡、撃破され燃え尽きた戦車。いかにも戦争の感じだ。

それでもこれはゲームである。しかし、全く真剣なゲームだ。ここでは敵と損害だけが仮想のもので、川もその他の障害も、防御構築物、最新機器、決定しなければならない軍事的課題も、すべて本物だ。このような状況のもとでの指揮官たちの決定は、能率的で間違いのないものでなくてはならないし、兵士たちも即刻行動に移らなくてはならない。戦闘は容赦なく進んで行く。

近代戦はふつう、非常にダイナミックかつ迅速な性格を帯びており、あらゆる手段で戦われるものだ。肉体的、

1　所定の地点で待機するミサイル発射装置

2　戦車と歩兵による「南軍」の攻撃

3　全欧安保協力会議最終文書の規定にもとづき、ソ連はこの演習に12ヵ国の軍事専門家を招いた。

4　イタリアのジョバンニ・バリジ大佐

5　ソ連人記者団に演習の印象を語るスイス軍参謀本部議長ウイルヘルム・マルク大佐



2





4



5

心理的負担があまりにも大きいため、訓練を受けた者でなければ何もできない。

われわれが観戦しているやぐらの真上の空で爆音がとどろいている。戦闘機グループに護衛され、隊を組んだ超音速爆撃機が、次々と低空飛行していく。パイロットたちは巧みに対高射砲演習を遂行し、正確に的を射て行く。そこへ「南軍」の戦車が出てきた。戦闘は防御陣地の奥深くへ移って行く。と、突然「北軍」の攻撃用ヘリコプターが森の中から現れ、「南軍」の両翼を攻撃する。われわれのいる観戦台からは、戦車の前の土が舞い上がり、火を噴いたのが見えた(「北軍」は爆破によって対戦車壕をつくったのだ)。火中に戦車を進め、守り抜くためには能力だけでなく、勇気が必要だ。炎ばかりは演習用ではない。

演習は、軍隊の戦闘能力を試験するものだ。演習場の兵士、指揮官、司令部は、いわば軍人としての日ごろの勤務について活動報告をするようなものであり、最新の兵器、戦闘機器の使用能力を見せ、近代戦での戦いぶりや、積極果敢な防衛・攻撃能力を示さねばならない。演習場では、軍隊の戦闘技能の重要要素——勝利達成のために心を合わせて行動すること——に磨きをかける。

軍事記者である私は、数多くの演習の場に立ち会ったが、そのたびに思うことは、軍隊の行動は完璧の域に達している、ということだった。しかし、今回の演習を見れば、だれしも、戦闘訓練も新時代に入った、この新演習が軍事訓練を一歩前進させたと思わずに













6 防御陣地の奥深くで行われている戦闘を観戦するドイツ連邦共和国の代表アウグスト・フォーゲル代将

7 訪問先の車載歩兵大隊で貴賓感想帳に印象を書き込むフランス軍参謀本部のルイ・ジャン・ジャール・アンツ大佐

8 飛行小隊長エブゲニー・グゼンコ一等飛行士

9 演習を終え、基地に帰還した飛行士たち。

10 出動する攻撃用ヘリコプター

11 部下とともに「敵」の移動を監視する偵察小隊長ビクトル・オリンツェフ中尉（左端）

はいられまい。

司会部のざわめきやたくさんの通信機の出す発信音の中で、地図の上に身を傾ける将校や攻撃中の兵士の興奮した顔を見たら、これが演習だということを思わず忘れてしまうだろう。将軍から一兵卒まで、だれもが興奮に包まれている。戦闘は激しくしつようになっている。それも当然だ。真の兵士は、仮想ですら死ぬのをいやがる。

攻撃、反撃、強行渡河、遭遇戦といった「カルパート」大演習の模様は、オーストリア、イタリア、フランス、西ドイツ、スイスなどの各国から来た人々が見ていた。ソ連が外国の軍事代表団を演習場に招いたのは、これが三回目だ。

イタリアから参加したジョバンニ・バリジ大佐は次のように語った。

「政府を代表して申し述べさせていただきたい。この演習に世界各国から観戦者が招待されたことは、ヘルシンキ会議の基本条項の内容と精神に完全に合致するものであります。演習参加者一人ひとりがすばらしく行動し、訓練、規律のレベルの高さと、義務感を示してくれました。どこの国の指揮官であろうと、そのような部下の行動を喜ばぬ者はなかろう、と思われます」



住民から兵士たちに歓迎のしるしの〝パンと塩〟が贈られる。

軍事力と社会主義社会

哲学博士　ドミトリー・ボルコゴノフ

人類は今日、未来を楽天的に眺められる根拠をもっている。ソ連や他の社会主義国、地球上のすべての進歩的な人々は、緊張から緩和と互恵的協力への周知の転換を達成するのに成功した。これは、なによりもまず、国際舞台における力関係の、社会主義と平和に有利な変化によって可能となった。

しかし軍国主義は、簡単に陣地を開け渡そうとはしていない。軍備拡張のはずみ車は回転を弱めようとはしない。毎年地球上では、約三五〇〇億ドルという想像を絶する金額が、軍備に支出されている（今、半飢餓状態にある五億人の人々を養うために、八〇億ドルあれば十分なのである）。人類の生活から戦争の危険を完全に除去するという崇高な目的は、いまのところ達成されていない。平和勢力は、これを無視するわけにはゆかない。武器の山が積もり、多数の軍隊が戦闘準備を整え、敵対的な軍事・政治同盟がつくられている――これが現実である。軍人は、どの国家でも珍しい存在ではない。しかし彼らの役割、その社会的機能は、もちろん、現存の政治システムや国家および社会の体制に完全に従属している。

あらゆる軍隊の本質は、生産様式、社会関係の性格、支配的なイデオロギーによって規定される。軍隊は、必然的に国家の、現存する社会システムの独特な〝レプリカ〟（写し）にならざるをえない。

軍隊の機能は、軍隊の階級的本質から出てくる。換言すれば、軍隊の体質的な行為は、一定の政治的目的の達成をめざすものである。

社会主義の軍事力は、社会主義革命の成果を守る武器として生まれた。ソビエト国家の創立者V・I・レーニンは次のように強調している。「……およそ革命というものは、それがみずからをまもることができるときにはじめて、いくらかの価値があるものである……」（レーニン全集日本語版、第28巻一二六ページ）。革命運動における軍事問題の過小評価あるいは軍事力の弱さは、革命運動を不可避的に敗北に導いた。社会主義の防衛は、それがいかなる形態で行われたか――平和的にか非平和的にか――にかかわらず、社会主義革命の一般法則である。

一九一七年の10月革命の後に、軍事力はふたつの機能――対外的な機能と対内的な機能をはたすようになった。対外的な機能とは、外からの帝国主義的侵略に対する防御であり、対内的な機能とは、社会的不平等を復活させようとする搾取階級の反革命である。内戦（一九一八―一九二〇年）を終えたソビエト国家は、対内的にごくまれにしか軍事力を行使しなかった。一九二〇年代末までには、最後の反革命暴動が鎮圧され、白衛軍や種々の反革命分子の残党が壊滅された。こうして、ソビエト軍事力の対内的機能は完全になくなった。強固な社会的政治的統一の国である今日のソ連には、階級的な対立はなく、軍隊を向ける必要のある社会的勢力は存在しない。

今日、ソ連の軍事力の主要な課題のひとつは、社会主義国家の安全を確実に保障することであり、人民の建設的勤労のために良好な外的条件をつくり出すことである。軍隊は、決して無いとは言い切れない侵略者の攻撃を撃退すべく、絶えず準備しながら、ソ連憲法に規定されたこの課題を遂行している。

社会主義世界体制が確立してからは、ソ連の軍事力は、兄弟諸国の軍隊と協力しながら、社会主義共同体全体の安全を確保している。20年以上も前に、軍事・政治同盟であるワルシャワ条約が生まれた。この条約は、政治、経済、イデオロギーの諸分野においてばかりでなく、軍事の面においても、社会主義兄弟諸国の努力を結合し、協調させている。防御的なワルシャワ条約は、反ソ的な目的でNATOを結成した西側資本主義諸国家の軍事的準備に対するやむを得ぬ対応として設立された、ということを想起する必要がある。

ソビエト軍事力の特徴を語るのに、それが諸国民の国際的安全の強力な要因であり、新しい戦争の防止の強力な要因であることを強調しないなら、不完全であろう。第2次世界大戦後、帝国主義は30以上の局地戦争や武力紛争を起こし、世界を何度か大規模な戦争のぼっ発の危険にさらしたが、社会主義体制の威力と決意に出合い、退却せざるを得なかった。ここに社会主義軍事力が今日担っている社会的役割が、特に明らかに現れている。極めて独特な状況ができあがりつつある。階級社会の全歴史を通じてもっぱら戦争の道具であった軍隊は、社会主義のもとでは客観的に戦争防止の道具となり、平和維持のもっとも重要な手段のひとつになりつつあるのである。

名誉と喜びの兵役

ミハイル・コレネフスキー

1年に2回——晩春と秋に——ソ連の各地では、友人や親戚が陽気な仲間となって、ギターやアコーデオンやバヤン（ロシアの大型アコーデオン）、はては完全なアマチュア・オーケストラの伴奏に合わせて、歌と踊りで盛大に新兵を軍務に送り出す風景を見ることができる。

新兵を送り出すこと——これはつねに、それぞれの家族の出来事であるばかりでなく、村ぐるみ、アパートぐるみ、団地ぐるみの規模での出来事でもある。新兵は普通、居住地から新兵の集合場所まで見送られる。地区軍事委員部の建物がしばしばその集合場所になる。集合の前夜には、全国各地の多数の集会や盛大なパーティーで、教師や労働集団、社会の団体の指導者が、2週間の有給休暇が与えられている新兵に、はなむけの言葉を述べる。

兵役は満18歳に達したソ連のすべての男子市民にとっての義務である。健康状態によって兵役を免除された者や大学の昼間部の学生は例外とされる（後者は大学の授業で軍事訓練を受ける）。その他の学校の学生には通常、教育期間が終了するまで、召集が猶予される。

長い別離に先立つあらゆる儀式がそうであるように、軍務に送り出すこともまた、多少は物悲しいものだ。陸軍に徴兵されれば2年間、海軍に徴兵されれば3年間、家を離れなければならないからだ。とはいえ、やはりこの〝儀式〟では、お祭り気分が勝っている。

私は本誌の読者のみなさんに、新兵自身も、その家族や友人も、この日を祭日として祝っているということを信じてもらうのが容易でないことを知っている。ソ連市民の兵役の義務にかんする規定は、事情をよく知らない人には、たんなる強制だとしか思われないだろうからである。

詳しく説明してみよう。

なによりもまず、ソ連軍兵士はソビエト国家ではきわめて名誉ある身分の一つであるということを指摘しなければならない。むかしから兵士は、国民の間で名誉と尊敬に包まれていた。民間伝承は兵士に忠誠、信頼性、明敏さ、機知、機敏、肉体的持久力、手腕、それにもちろんユーモアといった魅力的な特徴と能力を与えていた。

ファシストから祖国を身を挺して守り、社会主義的獲得物を擁護したソビエト兵士にたいする感謝の念は、すべてのソ連人の心に深く残っている。兵役の義務と、多民族国家ソ連に住むすべての民族にとってのその〝普遍性〟とが、陸海軍を真に国民的なものにしている。

しかし兵士の役割は、外部からのありうべき侵略の企図から国を確実に守ることにあるだけではない。軍はしばしばソ連国民経済に、大きな直接の援助を与えている。

作物は、豊かに実り、天候は取り入れを急がせている——このような時に、近くに駐屯している兵士は農民の仕事を手伝う。

地震、山火事その他、人々の生活や国民経済を危険にさらすような災害が起こったとすると、真っ先に住民の援助に駆け付けるのは軍隊である。

戦争のなごりである砲弾、爆弾、地雷の不発弾を、ソ連の工兵が平和時にどれほど無事に処理したことだろう！ このような危険な〝発見物〟については、今日でもまだソ連の新聞で報道される。

兵士たちの困難な仕事にたいするソ連国民の感謝の気持ちは、多くの小説、戯曲、映画にも反映されている。何の報酬も期待せずに、戦時と平時を問わず活動している、兵士外套を着た都市や農村の普通の若者がその主人公である。これらの作品は他方では、兵士になる準備をしている者や、兵士が名誉ある職務だと幼児から理解しはじめている者の世界観の形成に、大きな影響を与えている。

だから一九三六年の旧憲法にも、一九七七年10月に採択された新憲法にも、「ソ連邦軍隊内で軍務に服することはソビエト市民の名誉ある義務である」とうたわれているのである。

この問題のいま一つの面を取りあげてみよう。だれでも自分の息子を、しっかりした、大胆で敏しょうな、肉体的にもよく発育し鍛えられた人間に育てたいと思っている。しかしすべての親が、家庭環境のもとでのみ息子をそのように育てることができるとはかぎらない。軍務は家庭教育の欠陥を〝補正〟する。なぜなら、規律と厳しい肉体的鍛錬は、兵士の務めの切り離しがたい一部分だからである。若者が軍務を終えてから何になろうとも、どんな専門を選ぼうとも、軍隊教育はかれに大いに役立つだろう。

ついでに、職業の選択についても述べよう。軍務の少なからぬ特典は、〝市民生活〟に役立ちうる専門職種の一つを、2、3年で身につけることができる点にある。事実上ソ連軍におけるすべての専門は、程度の差こそあれ、無線電子工学、自動化技術、遠隔操作技術、機械や装置の制御と関係している。

兵役終了後に大学に入学することを希望している者のために、軍隊には予備講習会もある。そのほかにも、兵役を終えた者には、大学入学にあたって、普通教育学校卒業生よりも顕著な法的特典が与えられている。

軍隊勤務は、昨日までの生徒からのん気さとだらしなさのなごりを取り除き、精神の集中した、意志の堅固な人間に変える。怠け者を規律に慣らし、勤勉にさせ、才能ある青年にはその能力の発展を助ける。なぜなら、ソ連の軍隊では、アマチュア芸術活動やスポーツが奨励されているからである。軍務を勤め上げた者は、通常、よりまじめに学び、働き、自分の行動にいっそう責任をもつ。

若い兵士の精神生活についても忘れてはならない。下級将校——小隊長や中隊長の圧倒的多数は高等教育を修了しているが、これら将校との毎日の交際は兵士に少なからぬものを与えている。余暇には、兵士のために観劇や博物館見学が組織され、定期的に劇映画が上映される。作家、俳優、ジャーナリスト、さまざまな職業の代表者が、兵士たちを訪問し、自分の仕事について語る。

多くの兵士は外出許可をもらった時あるいは優秀な勤務の報奨として休暇をもらった時には、自主的に映画館や劇場や博物館に行く。兵士には、小遣いが支給される。そのほか、兵士は多くの文化施設を無料で、あるいは割引料金で利用することができる。

部隊の指揮官は新兵の元の企業やかれの両親と緊密な連絡をとっている。企業や社会団体の指導者は自分の所の出身者の勤務ぶりや、どんな専門を習得したかに関心を持ち、かれが成功を収めていれば、その成功を誇る。両親にしても、息子が務めている部隊の指揮官から息子の成功を評価した知らせを受け取るのはうれしいことなのだ。

ソビエト兵士とは、言葉の完全な意味において、〝国家的人間〟である。なぜなら人民国家の利益を守っており、国家からは身分を完全に保障されているからだ。ソビエト兵士の高い士気は、志願兵にたいする高い給与に基づいているのではなく、陸海軍は全国民に真に愛されている子どもであり、国民の利益と獲得物を自分のものとして守っているという事実の、深い認識に基づいている。

だから徴兵も、悲しい出来事というよりもむしろ、盛大な、喜ばしい出来事なのだろう。

敵軍機で帰還した飛行士

——大祖国戦争中のエピソードから——

若い飛行士アレクセイ・スタホフ（第1空軍）が勤務していた飛行中隊はその日、〝待ち伏せ〟をしていた。午後、地上誘導無線局からの警報で中隊は空に舞い上がった。メッサーシュミット機が飛来したのだ。短時間の空中戦で、メッサーシュミットは去った。そこへ新しい命令が届いた。敵爆撃機の大編隊を捕捉し、いかなることがあっても重要目標への飛行を阻止せよ、という命令だった。

爆撃機を捕捉したときは、すでにこの目標のすぐそばで、敵編隊は爆弾投下の寸前だった。考えている時間はなかった。スタホフは前方へ突っこみ、敵先頭機に体当たり攻撃をかけ、敵の攻撃隊形を混乱させた。

スタホフ機も破損した。着陸は無理だった。パラシュートで降下するには低すぎた。そこでスタホフは愛機を地上近くまで誘導し、高度約10mのところで操縦席から跳び降りた。

かれは奇跡的に助かった。敵軍地域だったので、5、6日、森の中に隠れていた。さまよい歩くうちに、やがて敵の前線飛行場に出くわした。

飛行場の外れにフォッケウルフ機が駐機していた。その操縦席では整備士が仕事をしていた。飛行の準備をしているらしい。スタホフは慎重にその場所へ近づいた。すきを見て、翼の上に跳び乗り、驚いている整備士を拳銃の握りでなぐり倒した。整備士をひきずり出してカバーをかけ、すぐに操縦席に座った。

スタホフはこの型の飛行機のことを少し知っていた。味方の連隊飛行場には以前からフォッケウルフ機が止まっていた。これは進んで投降したドイツ軍兵士が乗ってきたものだった。スタホフもその操縦席に座って、装置をいじくり回したことがあったのだ。それでもやはり、これは試験のようなものだった。どんな小さなミスでも命にかかわる。スタホフは必死に記憶をたどりながら、フォッケウルフの始動装置を思い出そうとした。

そして、ようやくエンジンがかかった。スタホフの話によると、これは実に下手くそな離陸だったそうだ。味方の飛行場では、撃墜される危険を冒しながら、スタホフは2回目の進入で辛うじて飛行機を着陸させることができた。

除隊した兵士の進路

ボリス・スクボルツォフ

除隊した兵士は再び建設場に戻ってきた。



「除隊した兵士はどうするか、とおっしゃるんですね」モスクワ市バーブシキン区の軍事委員アナトリー・トカレンコ中佐は私の質問を繰り返した。「それはすべて、除隊する兵士がどういうプランを持っているかによって決まります。勉強したいと思っている者は学校へ入ればよいし、働きたいと思っている者は就職すればいいのです。選択の幅は広い。どんな仕事でも見つかります」

予備役除隊者の就職あっせんは、一般兵役法にもとづいて人民代議員地方ソビエト執行委員会、企業、施設、機関、コルホーズの指導者が担当している。ソビエト執行委員会と各機関の代表者たちは、除隊して戻ってきた兵士や軍曹に一ヵ月以内に仕事を保障する義務を負っている。

兵役に就く前に働いていた者は、元の企業、施設、機関に就職する権利を持っている。もし、除隊者が徴兵前に占めていたポストに他の人が就いている場合には、職種と経験に見合った別の仕事が提供される。この仕事は除隊者の利害（とくに賃金面で）を侵害

するものであってはいけない。トカレンコ中佐は語る。

「私の記憶では、この軍事委員部ではこの問題にかんして一度もトラブルはなかったと思います。いや、一回だけありました。もっとも、ずいぶん昔のことで、名前も思い出せんが、ある除隊した兵士がわれわれに援助を求めてきたのです。徴兵前に彼は余り大きくない工場で働いていました。元の職場へ復帰しようとしたのですが、工場長は以前のポストはふさがっているし、他のポストには採用できないと言って断わったのです。われわれはこの問題に介入することにしました。その結果、彼は復職し、工場長は法律違反で上部機関からけん責処分を受けました。

しかし、このようなことはごく例外的なことです。わが国ではいたるところで働き手を求めています。求人申し込みのファイルをお見せしましょう」

トカレンコ中佐は除隊者の登録事務をしている部屋へ記者を案内した。ちょうど、長身の軍曹がふくれ上がった大きなファイルをのぞき込んでいた。

「予備役軍曹のカルポフであります」と彼は名乗った。

彼の見ていたファイルにはバーブシキン区はもちろん、モスクワの他の区の企業、施設、機関からの求人申し込みが詰まっていた。求められている職種はコックから電算機のプログラマーまでと実に広範囲で多種多様。

「何を選んだのですか？」と聞いてみた。

「ぼくは中等学校を卒業してすぐ入隊しました。無線関係の部隊に配属され、二年間で無線機器整備士の職種を身に付けました。これからの生活でもこの職種が役立つと思います」

「どういう方針で仕事を選びますか？」

「まず、家の近くを望みます。それから若い人が多く、賃金もそう悪くないところがいいですね…」

「あなたの軍隊仲間は、どんなところへ行きましたか？」

「バイカル＝アムール鉄道の工事場へ行った者もいますし、ソ連欧州部の中央にある非黒土地帯開発事業に参加した者もいます。大学進学をめざしている者もいます」

…私はこれまで取材旅行でシベリアの建設現場や中央アジアのカラクム砂漠、北部の炭鉱、グルジアのぶどう園など各地を回っている。そして、どこへ行っても、つい最近除隊したばかりの若者たちに会った。正しい姿勢、規律正しさ、ねばりと根気強さですぐそれと分かる。軍隊で鍛えられた若者は、国民経済の分野で容易に仕事を見つけている。

これは彼らに法律で保証されていることであり、ソビエト社会の全生活様式によって確保されていることである。

トピックス

ハバロフスクに豪華ホテル完成

アムール川沿いの高台に『インツーリスト』ハバロフスク支社の16階建てのホテルが建設された。デラックス・ルーム、1人用と2人用の客室、レストラン、バー、宴会場などの設備があり、遊歩場と日光浴室のある屋上からはハバロフスクの町とその周辺の美しい景色を眺望できる。この新しいホテルの建設で、ハバロフスクはこれまでの1倍半のツーリストを受け入れられるようになる。

極東の森林調査

ソ連科学アカデミー極東センターの太平洋地理研究所は、膨大な良質の木材源に恵まれているプリモーリエ（沿海）地方の植物の成長条件を評価する大がかりな調査をしている。同研究所では、調査によって得られた大量の資料をもとに、この地方の植物の成長状態を評価した貴重な地図を作成した。なお、この作業に従事した地理学者は、ソ連極東南部のこの地方の降水量は今後20－30年は比較的少ないと予想している。

イデオロギー問題

勤労者の国際的友愛

歴史学博士候補　ユーリー・オガニシャン

国際主義の必要性

前世紀の末、ロシア・プロレタリアートの指導者V・I・レーニンは、全世界の労働者にとっての国際主義の必要性は労働者が共通の敵を持っていることによって呼び起こされたと書いた。「資本の支配は国際的である。まさにこのために、万国の労働者の解放闘争は、労働者が国際資本にたいして共同して闘争するときにはじめて成功しうるのである」（レーニン全集、日本語版、第2巻、91ページ）。

過去数十年間に世界革命運動に本質的な変化が起こったことは当然である。しかし事態の進展は、このレーニンの結論を否定しなかっただけでなく、それを確証した。この全期間にわたって勤労者も資本も、その社会的本性と、相変わらず敵対的な相互関係の本質を変えなかった。それどころか、この敵対関係はさらにいっそう先鋭化し、対立しているそれぞれの側にとって自分たちの国際的団結を強化する必要性をもたらした。

世界的な諸事件の進展にたいする社会主義諸国の影響がますます強まり、深まっていることは、いまやだれも否定しようとしないだろう。社会主義と共産主義の建設をめざす闘争で強まったこれらの国の共産党の同盟は、中国の現在の指導者の分裂活動にもかかわらず、帝国主義と反動に反対するすべての闘士への大きな援助となっており、資本主義諸国の労働運動や民族解放運動への支援となっている。

資本主義世界における共産党の影響の増大、反帝国主義行動計画の成功的な遂行のために努力を結集しようとのこれらの共産党の志向、共産党間の接触と連絡の拡大——これもまたわれわれが生きている時代の指標の一つである。

他方、〝共同市場〟、国際的部門別合同、通貨・金融協定、強力な多国籍独占体——これが今日、資本の国際的統合の機構である。ベルリンで開かれた欧州共産党会議（一九七六年）は、帝国主義が革命勢力に対する闘争で国際的な共同行動の例を少なからず示していると強調した。搾取制度が脅威にさらされている所で、民族的、社会的解放勢力、民主主義勢力が闘争の過程で勝利を収めている所で、帝国主義は反撃を整えようとのあらゆる試みを企てている。

その実例はたくさんある。NATOの最近の理事会の議事日程には、国際問題における世界社会主義の進出を阻止するために、NATO加盟各国の戦略を調整する問題が相変わらず上っている。ランブイエ（フランス）、プエルトリコ、ロンドンで開かれた先進資本主義諸国首脳会議もまた例として挙げることができる。そこでは世界における革命過程の抑止を目的としたこれら諸国の共同行動が合意を見た。

このように客観的な諸条件は、共産主義者やすべての革命部隊に人類の社会的進歩の事業における国際主義の放棄のためのなんらの根拠も与えていない。レーニンが古典的な明快さをもって表現したその本質は相変わらず変わっていない。「実際の国際主義は一つしか、ただ一つしかない。すなわち、自国内の革命運動と革命闘争とを発展させるために献身的に活動すること、例外なくすべての国でこれと同じ闘争、これと同じ方針を支持し、ただそれだけを支持すること（宣伝によって、共感によって、物質的援助によって）である」（レーニン全集、日本語版、第24巻、59ページ）

革命闘争の実践そのものから生まれてくるこのような国際主義の本質の理解は、マルクス・レーニン主義者にとって特徴的である。ソ連の共産主義者はプロレタリア国際主義の諸原則に忠実であることをその第25回党大会（一九七六年）で改めて確証した。この大会でL・I・ブレジネフ・ソ連共産党中央委員会書記長は強調した——「われわれは、プロレタリア国際主義を拒否することは、共産党および一般に労働運動から、試験ずみの強力な武器を奪うことにほかならないと考える」

国際連帯の諸原則は、ソ連では新ソ連憲法で法的効力をかちとった。新憲法は、民族解放と社会的進歩をめざす諸国民の闘争の支援を国家の対外政策の基本方向の一つと宣言している。

国際主義はつねに発展している

マルクス・レーニン主義者はプロレタリア国際主義を歪曲しようという企図には反撃を加えるが、かれらがこのように行動するのは教条主義からではなく、ぜがひでも〝古い〟形態の連帯を確保することを望んでいるからではけっしてない。かれらは、それなしには労働者階級の獲得物が考えられない国際主義の本質そのものを擁護しているのである。そのさい共産主義者は、国際主義の発展、その実現の新しい形態と方法の探求の必要性を否定しないだけでなく、反対に、一貫して主張している。

このような態度は、国際主義そのものの発展の歴史的論理を反映している。国際主義が何か凝固した不変のものであったことは一度もないのである。19世紀の中ごろマルクスとエンゲルスによって宣言された「万国のプロレタリア、団結せよ！」のスローガンは、すべての国の労働者階級の利益の共通性、すべての民族の労働者の団結をめざして闘うプロレタリア革命家の決意を表明した。その後各国に革命的労働者党が生まれた時に、国際主義はこれらの党の相互関係の基礎やそのイデオロギーと政策の主要な諸原則の一つになったし、また今日もそうなっている。「国際主義は各国共産党の主要な特徴である」と、共産主義者のベルリン会議でベルリングエル・イタリア共産党書記長は述べた。マクレナン英国共産党書記長は国際連帯を「共産主義者の基本原則」として特徴づけた。

一九一七年の10月社会主義革命の勝利もまた、他の諸国の労働者の支持なしには不可能だったろう。

社会主義世界体制の形成は、勤労者の国際的連帯の内容を深め、拡大した。社会主義諸国の圧倒的多数の間に存在する関係は、プロレタリア国際主義のいっそうの豊富化である。なぜなら労働者階級とその党の国際的統一だけでなく、経済、イデオロギー、政治のすべての分野におけるこれらの国の国民、国家、政府の全面的な兄弟的協力をも含んでいるからである。それとともに、社会主義的連帯は、さまざまな特徴を持つと同時に、全体としてのプロレタリア国際主義から不可分であり、その有機的な部分であり、その継続である。

国際主義が諸国民の革命闘争における民族的要因の役割を否定しないだけでなく、反対に、その要因の厳密な考慮、諸国民の民族的伝統、人々の愛国感情にたいする慎重な態度を前提としていることを強調したい。国際共産主義運動のすべての綱領的文書の中で強調しているように、勤労者の国際的責務と民族的責任は切り離せないものである。

国際連帯の力

国際主義の役割の増大は、今日では社会生活の多くの分野で明らかになり、さまざまな形で現れている。

われわれがすでに述べたように、国際連帯の形態は諸国間のあらゆる種類の協力におよんでいるが、この協力の威力と能力はいまや社会主義共同体諸国によって実際に示されている。たとえば、一九七一—一九七五年だけで経済相互援助会議（西側での通称コメコン）の加盟諸国の国民所得は、EC諸国ではわずか12％の伸びにすぎなかったのに、全体で36％伸びた。同じ期間に経済相互援助会議加盟諸国の工業は資本主義諸国の4倍の成長率を示した。

現在国際主義の思想はアジア、アフリカ、ラテンアメリカの諸国民の社会的発展にますます大きな影響を与えている。このような影響の主要な方向の一つは、解放された諸国民と社会主義諸国、国際労働運動・共産主義運動との交流の拡大である。これらの交流は発展途上国による完全な独立の達成を助けている。交流はベトナム、ラオス、アンゴラ、その他の国の愛国者の勝利の決定的要因の一つであった。

国際主義の行動のいま一つの重要な分野は、平和、緊張緩和を守る闘争である。勤労者の国際連帯が強固であればあるほど、平和の事業はますます強まる。マルクスはすでにこれを予見した——「各国の労働者階級の団結は、結局は諸国民間の戦争を不可能なものにするにちがいない」

その解決のために国際的努力を必要とする現代の他のグローバルな問題も挙げることができる。これは、経済的に後れている諸国の生産力発展にいっそう広い、現実的な見通しを開くような新経済体制を世界に創設することであり、環境の確実な、有効な保護、原料、エネルギー、その他の資源の合理的な利用であり、宇宙開発であり、数億人の飢餓、貧困、文盲の一掃である。

このような課題の解決の重要性は不可避的に増大する。これに平行して、歴史の全原動力であるすべての進歩的な階級の国際連帯の歴史的要求と現実的な意義が高まるだろう。

トピックス

アルマアタに新しいバス駅

カザフ共和国の首都アルマアタで新しいバス駅が建設されている。駅は毎時二五〇〇人の乗客をさばくことができる。駅舎は二段になっており、長距離線ホームと近距離線ホームへ向かう人の流れがぶつからないようになっている。乗客へのサービス施設として、休憩室、電話室、ロッカー室、レストランなども建設される。

クリミアに太陽観測センター

ソ連科学アカデミーの新しい太陽観測センターが、クリミア半島の黒海沿岸カラダグ山のふもとに建設されている。太陽を系統的に観測するのがセンターの仕事。レーザーを利用して太陽の立体像を球面スクリーンに映し出すことも計画されている。

国内問題

社会主義競争の本質と目的

『今日のソ連邦』評論員
ミハイル・エフィーモフ

全勤労者への手紙

1月14日、ソ連のすべての中央紙はソ連共産党中央委員会、ソ連政府、労働組合とコムソモール（共産青年同盟）の指導部が国のすべての勤労者に呼びかけた手紙を発表した。手紙はきわめて長文のもので、新聞のおよそ1ページ半を占めた。

これはいったい何事か？　何が起こったのか？

国民へのこのような直接の呼びかけの事実それ自体は、何も異常なものではない。ソ連共産党とソ連政府は、時折われわれの生活のもっとも重要な問題を全国民的討議に持ち出す。このようなことが行われるのは、広範な国民大衆の意見を聴取するためか、またはとくに何かに注意を促すためである。

今回の場合、手紙は、都市と農村の勤労者に一九七八年度の国家計画の遂行と超過遂行をめざす社会主義競争をいっそう広範に展開するよう呼びかけている。

社会主義競争とは？

読者にこの問題の本質をもっと良く理解していただくために、私は多少脱線をしてみたい。

まず、社会主義競争とは何か？

それは、社会主義という新しい社会制度の誕生を告げた巡洋艦オーロラ号の歴史的な砲撃とほとんど同時に生まれた。

かつて経済発展のほとんど唯一の刺激は競争であると考えられていた（一部の者はいまでもそう信じている）。実際、競争は機転、改革への意欲、能率を生む。しかし、同時に資本主義世界での競争は、無政府的な市場のもとでの人々の間の競争と同様に、生産合同間または商業合同間の**闘争**である。しかもこの闘争ではそのうちの一方の勝利はしばしば他方の敗北を、はては零落をも意味する。競争は強者をさらに強くし、弱者をさらに弱くする。社会的交流の形態としての競争は生産用具や生産手段の私有制とともに消える。

社会主義社会では、それに代わって一体何があるのか？　何が社会主義建設の発展を刺激するのか？　この質問にたいする明白な回答はすでに一九一八年1月にレーニンによって与えられている——「社会主義政府が権力についている現在のわれわれの課題は、競争を組織することである」。レーニンの意見によれば社会主義こそが、「競争を消滅させないどころか、反対に、競争を真に**広範に**、真に**大衆的な**規模で利用し、真に勤労者の大多数を、自己の力量を発揮し、能力を伸ばし、才能を表わすことができるような仕事の舞台に引き入れる可能性を初めてつくるのである」

社会主義競争のルール

このように、新しい生産関係は人々の間の社会的交流の新しい形態をも生んでいる。社会主義競争は、あらゆる搾取から解放され、最終目標の達成への共通の関心によって相互に結ばれた働き手の間で初めて可能である。ほぼ60年の間に社会主義競争はその発展の多くの段階を通過した。ソ連国民のすべての世代が社会主義競争に参加してきた。現在約九八〇〇万人がそれに参加していると言えば十分だろう（ソ連の人口が二億六〇〇〇万人であることを思い出していただきたい）。あらゆる競争と同様に、社会主義競争は明確な、厳格なルールに従って行われる。そのうちのいくつかを挙げよう。

自由意思性　競争には希望者だけが参加する。なんらの強制も、義務も、総動員もない。

公開性　競争の進行状況とその結果をすべての参加者に知らせなければならない。非公開性または秘密主義はまったくない。競争の結果は総会で報告される。

結果の比較　競争にはさまざまな職種の労働集団が参加する。だから結果を比較できるような共通の尺度をつくることがきわめて重要である。

物質的・精神的刺激　通常3カ月ごと、半年ごと、時には1年ごとに労働集団と管理部の代表者が共同で総決算をする。優勝者は奨励される。すなわち優勝者には感謝が表明され、賞状が授与され、優秀者の写真が〝表彰板〟に掲げられ、賞与が贈られる。もっとも優れた勤労者たちは通常年末に政府の賞——勲章とメダルの受章候補者に推薦される。

先進的な経験の普及　社会主義競争の核心はまさにこの点にある。本質は、優勝者があれこれの奨励を受けるのにたいし、後れている者が受け取るのは成功した競争相手のすべての〝秘訣〟だということにある。ある企業で導入

された技術や労働組織におけるどんな革新も、全般的な財産とならなければならないし、またそうなっている。この事情こそ、社会主義競争には敗者はいないと言うことを可能にしている。個々の働き手、作業班、職場、工場、工業の一部門全体、それに都市や共和国でさえ、社会主義競争の参加者である。

余力を見出させる競争

以上、社会主義競争とは何かということについて簡単に述べてみた。

私は、なぜソ連共産党中央委員会、ソ連政府、最大の社会団体の指導部がすべての勤労者に社会主義競争の規模を拡大するよう呼びかけることを必要と考えたかということも、わが国の条件のもとでの社会主義競争の意義の重要性によって説明できると思う。

今次5カ年計画の過ぎ去った2年間（一九七六—七七年）に、ソ連は目立って前進した。国民所得は9%増え、工業生産の伸びは10・8%だった。二二〇〇万人が住宅条件を改善した。これは東京クラスの二つの都市の人口である。

しかし、安定した前進にもかかわらず、われわれは現存の困難と誤りに目をつぶっていない。これらについてはこの手紙の中でも述べられている。

たとえば、七五〇〇万人の勤労者は2年間の課題を期限よりも早く、一九七七年11月7日の10月革命60周年までに遂行した。しかし、それとともに、11の企業のうち一つの割合で、販売計画を遂行できなかった企業があり、四〇億ルーブル分の製品がこれらの企業によって供給されなかった。11の企業のうちの10の企業がこの計画を遂行したという事実をもってしても、このような事態にたいするわれわれの大きな心配を吹き飛ばすことができない。なぜならわが国の生産規模では、だれかのほんの少しのやり残しでも、全体としては損失の膨大な数字となって現れるからである。

たとえば、操業休止、無断欠勤または管理部の許可を得た欠勤の結果としてだけで、国は三〇億ルーブル以上の金額の工業製品を受け取らなかった。コルホーズやソフホーズではトラクタの運転休止は労働時間の13%を占めた。取り入れ期にコンバインの6台のうち1台は運転されなかった。

全国ではどれほど膨大な余力が利用されなかったか、容易に想像することができる。

われわれが豊富に持っているすべてのものは、われわれの手によってつくられた。社会主義社会は全国民の労働の基礎の上に打ち立てられている。個人の福祉だけでなく、全国民的富も、結局の所、各人の自分の部署での働きぶりから成り立っているのである。

ごく小さな一個の不良品でも、もっとも罪のない一回のずる休みでも、むだに消費された1KWhの電力でも、これは本質的には国民の財産からの小さな窃盗である。なぜなら国が順調に前進を続けるためには、だれか他の者がこの損失を自分の労働によって補償しなければならないからである。

社会主義社会の条件のもとでは、今日自分の計画を遂行しなかった〝11の企業のうちの一つ〟には零落の恐れも破産の恐れもない。一人の労働者または職員も失業の恐れに直面しない。他の〝10の企業〟がその企業を救い出す。これがわれわれの制度の確固たる法則である。しかしわれわれは社会的労働の損失を最小限にとどめるようにしたい。この点でもっとも有効な手段となりうるのは、ほかならぬ社会主義競争である。社会主義競争によって初めて、それぞれの仕事場、それぞれのデスク、それぞれの工作機械のもとに存在する余力を明るみに出すことができるのである。

この手紙が出現した理由はここにある。

いうまでもなく手紙は非常に広範な反響を呼び起こしたが、この反響はおそらくまだその絶頂からほど遠いと言えよう。現在多くの工場や農場でこの呼びかけの熱心な討議が行われている。勤労者の間には、一九七八年10月7日の新ソ連憲法採択1周年までに5カ年計画の第3年目の計画を遂行しようといった気分がみなぎっている。私は予言者ではないが、ソ連の勤労者が約束を守ることを確信している。

トピックス

機械で樹木を移植

年輪を重ねた古い樹木の移植に威力を発揮する独創的な機械〝クロート〟（もぐら）のテストが行われている。

この機械を考案したのはウクライナ農業アカデミー。特殊カッターが数分間作動すると、〝クロート〟は樹齢20—30年の樹木を、移植に必要な根を残したまま、根の周囲の大きな土の塊ごと引き抜くのである。この方法は公園の改造や都市の再開発にとくに便利である。

クリミアにもマンモスがいた

数十万年前に生息していたと思われるマンモスの骨がクリミア半島で発見された。これは北クリミア運河の建設関係者が工事中に発見したもので、発掘されたきばの長さはそれぞれ二九〇cm、三三〇cmで、年齢50歳くらいのマンモスと分かった。これらの骨はフェオドシア郷土誌博物館で展示される。

ソビエト社会の経費

経済学博士・本誌評論員
ボリス・ラキツキー



使い方の問題

社会の豊かさは何によって決まるのだろうか？　もちろん決定要因は、人口一人当たりの物資や福祉・サービスの生産量だが、別の意味でもう一つ重要なのは、社会がだれのためにその富を使うかということだ。実際、同じ財貨でも、社会のいろいろな階層にたいして大小さまざまの効果を与える違った使い方が可能である。

私有制を原則とする経済の社会では、少数者である生産手段の所有者が社会の富と所得の最大部分を独占することになる。これと違うのが社会主義である。社会主義社会では生産手段が共有だから、社会の富も全勤労者に分配される。

一九七一—七五年の5年間にソ連は一九六五年の対比価格で総額一兆五六三〇億ルーブルの国民所得があった。そして、国がまず第一に考慮したのは消費と蓄積の健全なバランスをとることだった。

この問題の本質はどこにあるのか？　社会主義は、福祉、文化・教育水準の向上や、消費物資の生産増加など、人々の全面的な生活水準向上に努めているのだから、全勤労者に一兆五六三〇億ルーブルを分配すれば、効果は最高になりそうなものだ。が、それではいけない。国民所得の支出は、現在と将来のかかわりも考えねばならないのだ。

これから先あらたに就職する人びとのための工場、畜産場、商店、自動車道路を今のうちにつくる必要がある。勤労者の数は毎年約二〇〇万人ずつ増えている。新しい職場をつくらなければ、失業者が出てしまう。これは社会主義では許されないことだ。そのほかにも、労働条件の改善、労働の軽減、機械化、オートメ化や、人体への悪影響の排除なども考慮しなければならない。これもみな生産への投資を必要とする。

一九七一—七五年の蓄積は国民所得の14・9%、二三三〇億ルーブルだった。これは工場、企業の固定フォンドの拡張や、生産に欠かせない商品・資材ストックの拡充に投資された。

一九七一—七五年の学術研究費は六七〇億ルーブルで、これも投資的性格を持っている。現代科学は生産と密接に結びついているため、直接生産力と呼ばれることもある。科学が技術的進歩のために果たす役割は、ますます増大している。だから学術研究費は未来へかける橋の建設費なのだ。

以上の支出とまったく別なのが八九〇億ルーブル、国民所得の5・7%を占める国防費である。ソ連は、建国後最初の30年間に二つの大きな攻撃をはね返した。その最初の攻撃——一九一八—二〇年の内戦中に行われた外国の軍事干渉では国富の1/4を、第二の攻撃——一九四一—四五年のファシスト・ドイツの侵略では国富の約30%を失った。このため、国防力の強化が死活的に不可欠なこととなった。

ソ連国民は、緊張緩和、軍縮にかんする交渉を歓迎している。それが成果をあげれば、国防費の節約ができる。国防費は少なければ少ないほどいい。が、もちろん別の形の安全保障があれば、の話だ。

国民の直接必要のために

そのほかの支出項目は、みな国民の必要のためにそのまま使われる分と考えていい（学術研究費、国防費のうち、学者、軍人の賃金フォンドも本来こちらへ入れるべきだろう）。これは一九七一—七五年の同じ5年間で一兆一七四〇億ルーブル、国民所得の75・1%だった。

このうち六六六〇億ルーブル、国民所得の42・6%にのぼる最大の支出項目は、生産部門の実質賃金フォンド、言い換えれば、生産にたずさわる労働者、職員、コルホーズ員の家族によって消費される物質的財貨の経費である。ソビエト国家は実質賃金を増やすことに特に配慮している。住民の貨幣賃金の増収に対応して、消費財の供給も伸びている。しかも、全般的な物価水準は事実上安定している。このため、所得の増加分はそのまま、消費される財貨の実質的な伸びとなっている。

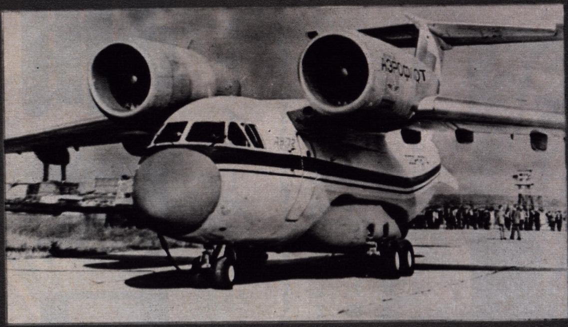
教育、保健を始め、その他、住民の文化生活面の必要と社会的必要を満たすために、三〇一〇億ルーブルが支出された。この中には医師、教師、図書館員、各種サービス機関の従業員などの賃金や、それらの機関の設備維持費、奨学金などが含まれている。ソ連の社会的サービスの成果はめざましいが、今後の改善課題も非常に大きい。ことに重要な課題は、住民にたいする教育、図書館・競技場などのサービスの無料制を維持しながら、サービスの質的な向上をはかることである。

もちろん、サービス機関網のいっそうの拡大も急務となっており、そのために非生産部門への投資額を年々増加している。一九七一—七五年の期間に建設された住宅、学校、病院、文化施設など非生産用の施設は八八〇億ルーブル、国民所得の5・6%を占めた。

さらにもう一つの項目は、高齢退職者、労災身障者、戦争による身障者などの働けない人や、一時的な労働能力喪失者にたいする社会保障で、一一九〇億ルーブルだった。これらのカテゴリーに該当する人々の生活状態は、その社会の人間らしさの尺度と言えよう。労働不能者にたいする配慮は、社会主義社会・国家の果たさねばならない大切な役目の一つだ。

以上、ソ連の国民所得の事実上すべての支出項目を見てきたわけだが、どの項目も目的はただ一つ、全勤労者の福祉の向上ということにつきる。

＊トピックス



期待される新型輸送機ＡＮ−72

オレグ・アントーノフ設計技師長の指導する設計局で新型軽輸送機ＡＮ−72が開発され、目下飛行テストが行われている。

同機の外見は少し変わっている。主翼の上に2基の大型ジェットエンジンがとりつけられているからだ。この大型エンジンのおかげで5ｔのペイロード満載時でも速度を600—700km／ｈにあげることが可能である。またこのエンジン配置により、強力ファンによる砂、ホコリ、氷といった地上からの異物の吸いこみからエンジンを守る結果になっている。

それと同時に余剰揚力も出る。ジェットエンジン・ノズルから噴出するガスの強力な流れが主翼の上面を通過するので、揚力が増加し、離着陸滑走距離が短縮される。このことは、ＡＮ−72が稼動することになっている離着陸区域の諸条件のもとでこの新型機がきわめて手軽に利用できるのに一役買っている。このようなＳＴＯＬ性能は非常に重要だ。なにしろこの飛行機は、コンクリート舗装の飛行場だけでなく、舗装されていない簡易飛行場からも発着しなければならないからだ。乗員は正副操縦士の２名。

貨物室は荷物の積みおろしを楽にする一連の装置をそなえている。貨物室は完全に与圧されているので、高高度で運航することができ、燃料を節約して飛行速度をあげられる。

主翼は極度に機械化され、自動スラット、着陸時の滑走距離を短縮するためのスポイラ、そのほか航空機技術の新機軸をそなえている。

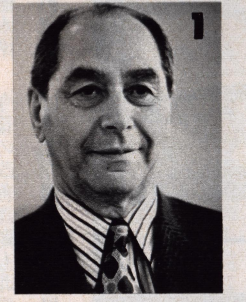
主脚は舗装されていない簡易飛行場での着陸ができるように強化されており、ほとんど４つの独立した台車と言ってもいい。

舞踊は民衆の心

来日するモイセーエフ・バレエの指導者イーゴリ・モイセーエフに聞く

カメラ E・エリン
A・ネベージン

ソ連の著名な舞踊家でソ連邦人民芸術家のイーゴリ・モイセーエフが創設、主宰するソ連国立民族舞踊アンサンブルができてすでに40年。外国ではモイセーエフ・バレエの名で知られるこの舞踊団は、その間に52ヵ国を訪問している。この3月、モイセーエフ・バレエが日本にやって来る。これは三度目の日本公演である。来日に先だって本誌記者がイーゴリ・モイセーエフにインタビューした。



現在、あなたのアンサンブルは世界の大舞踊団の一つとして広く知られています。ところであなたはどのようにしてこのアンサンブルに入ったのですか？ そもそも事の始まりはどんなだったのでしょうか？

私は芸能生活をボリショイ劇場のソリストとして始めました。一九二九年にはバレエ振り付け師になりました。さらに私は民族舞踊を上演するのが何よりも好きでした。私の青年時代の民族芸能に対する愛着も影響したのだと思います。

私と父はカフカズやクリミア、ウクライナ、中央アジアの各地をずいぶん旅行しました。旅行中私はそれぞれの地方の踊りに大へん興味を持ち、踊りを集め、メモを取り、スケッチをしました。こうして積み上げられた印象がはけ口を求めたのでしょう。一九三七年私はソ連民族舞踊アンサンブルの指導を担当するようになりました。最初は労働者クラブで上演していました。当時、このアンサンブルの団員たちは全員がアマチュアの出身でした。人数は約30名ほどで大したことはなく、レパートリーも10ほどの踊りしか持っていませんでした。現在アンサンブルのレパートリーは約三〇〇、団員は一五〇名を数えます。

あなたは民族舞踊の意義をどう理解していますか？

民族舞踊というものは民族のリズミカルな肖像画、無言



1 イーゴリ・モイセーエフ
2 『メキシコ組曲』
3 『クラス・バレエ』
4 『バシキール組曲』
5 『村の悪童たち』
6 『ロシア組曲』
7 公演が終わったあと、舞台で…

の詩、目で見る歌であって、民衆の心がその中に溶け込んでいます。これは民衆が体験した出来事や感情の物語を独創的に生き生きと描き出す、民衆独特の年代記なのです。そして私が民族舞踊を愛するのは、民族舞踊が民衆の感情の深さ、心理、民族性、現実にたいする音楽的感覚のすべてをその中に凝縮させているからです。形象性、内容の点において、私は古典舞踊よりも民族舞踊を買いたいほどです。民族舞踊は、的確で、明瞭で、具体的な〝アドレス〟を持っています。さらに、それぞれの踊りはすべて深い内容と意味を持った完成した作品です。

あなたの舞踊はどのようにして生まれるのですか？

その点では、私たちが自分の踊りのための題材を汲み上げる源泉に、すべてがかかっています。もしそれが民族舞踊芸能の古典的な作品であるならば、つまり、民衆の生活の中で歴史的に作り上げられた踊りであるならば、私たちはそれを磨き上げ、芸術的に発展させます。

私たちのいくつかの踊りは、アンサンブルの中で直接生まれました。それらは多年にわたるソビエト国内、外国旅行の結果として、文学の源流―英雄叙事詩、おとぎ話、文学的遺産や民族衣装の装飾、民間伝承などの研究に基づいて生まれました。一部の踊りは、民謡からテーマのヒントを得て、私たちがそれを舞踊の言葉に翻訳したのです。『ブリバ』の誕生を覚えています。ベロルシア共和国ではじゃがいも（ベロルシア語で〝ブリバ〟）の歌が人気がありました。この歌のテーマはその楽天性、心の底からの快活さで私を引きつけました。そして、ぜひ踊りでそのテーマを表現したいと思ったのです。民衆は出来上がった作品を自分たちの踊りとして受けとってくれました。私は文化会館や、あるいは村のお祭りでこの踊りをどのように踊っているか自分の目で確かめました。これこそ、民衆が芸術作品の中に自分自身を見出したときの、最高の評価と言ってよいでしょう。



8

私たちが制作した最新作の『キルギスの祭り』はモニュメンタルな舞踊組曲です。私はこの作品の新しさに興味があります。というのは、民族芸能のまだ開かれてない一ページに触れなければならなかったからです。昔、キルギスには踊りという踊りがほとんどありませんでした。私は民族的な遊び、儀式、伝統的な競技などの分析から始めました。いつも盛大に行われる天幕（遊牧民の家）張りをもとにしているのが『天幕』（ユルタ）という踊りです。音楽に合わせて楽しげに天幕が張られ、そのあと天幕から登場人物が出てきて、娘たちの叙情的な踊り『チューリップ』を上演します。組曲は『娘を捕まえろ』という曲で終わります。キルギス人にはお祭りのとき、娘たちが馬に乗り、ステップを駆けめぐり、それを若者たちが追いかけて捕まえ、口づけしなければならないという習わしがあります。娘はいろいろと抵抗しますが、しかし、もし若者が口づけのチャンスをつかめなければ、娘は若者をむちで打ちます。口づけだけでなく、娘を自分の鞍に乗り換えさせた者は、このお祭りの英雄になるのです。

このようにしてこの組曲の独特の舞踊の一つ一つを結び付ける一本の筋が生まれました。

一言で言えば、私たちは何世紀にもわたって作り上げられた踊りの構成上の土台はそのままにしながら、生きた伝統をダイナミックに発展させる道を歩んでいます。

あなたは全世界をまわり、様々な芸術に触れていますが、これがどの程度あなたの作品に影響を与えていると思いますか？

私たちの三〇〇のレパートリーのうち、外国のものは50です。他の諸国民の芸能は私たちに独特の創作意欲をかきたててくれます。たとえば、アルゼンチンでは牧童の踊りが、色彩、民族形象の豊かな表現力で私に感動を与えました。こうして私たちの最新作の一つ――『アルゼンチンの牧童』（ガウチョ）が生まれました。また、『キューバ万歳！』の作品を制作するきっかけになったのは、キューバの伝統的なカーニバルです。

私たちの芸術的探求にはまた、『ウエストサイド物語』の舞踊を制作したジェローム・ロビンスのような有能な外国の振り付け師の作品も影響を与えています。

モイセーエフ・バレエ公演日程

3月12日・神奈川県民ホール／3月13日・東京中野サンプラザホール／3月14日・名古屋市民会館／3月15・16日・大阪フェスティバルホール／3月17日・広島郵便貯金会館／3月18日・防府市公会堂／3月20日・福岡市民会館／3月22日・大阪フェスティバルホール／3月24日・新潟県民会館／3月25日・群馬音楽センター／3月26日・神奈川県民ホール／3月27日・東京文化会館／3月28日・千葉県文化会館／3月29日・山形県民会館／3月30日・宮城県民会館／3月31日・岩手県民会館／4月2日・函館市民会館／4月3日・札幌北海道厚生年金会館／4月5日・茨城県立県民文化センター／4月6－7日・東京NHKホール

なお、詳細についてのお問合せは、新芸術家協会（電話03・501・6458）へどうぞ。



9



10

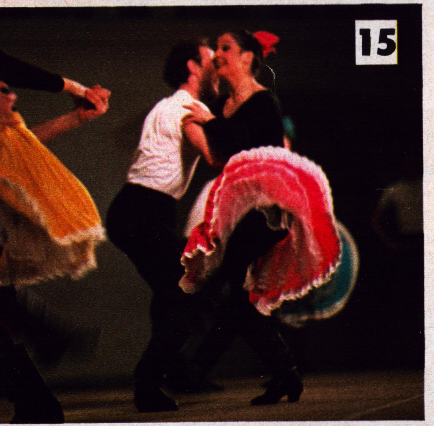
8 リハーサル中のモイセーエフ
9 『モンゴル組曲』
10 『バシキール組曲』



13



14



15



16



17

七〇年代の今日、民族舞踊の人気は以前と比べてどうですか？

以前に劣ることはないと思います。というのは、私たちのどの公演でもほとんど空席がないからです。しかし、私たちはこれまでの成功に甘んじていません。ますます新しい踊りを観客に見せるよう努力しています。

あなたのアンサンブルの人気が少しも衰えない成功の秘密はどこにあるのでしょうか？

私の考えでは主な秘密は、私たちの芸術が生きたものであることです。人工的に創作されたものではなく、まさに生活の中から引き出されたものであるからです。私たちは民族芸能を様式化しているのではなくて、民族芸能を継承しているのです。つまり、私たちは正確に、的確にそのオリジナルを理解し、完全なものに高め、その作品をより高い水準に引き上げるように努めているのです。

☆　☆　☆

11　リハーサルを見守るモイセーエフ

12　ベロルシアの踊り『ブリバ』

13　モンゴルの踊り『ツァム』

14　アラゴン地方の踊り『ホト』

15　『クラス・バレエ』

16　『バシキールの踊り』

17　『メキシコ組曲』のうち『タンゴ』



12

11

カフカズ最高峰を滑る！

ユーリー・ツェーニン
カメラ　R・デニソフ



エルブルース山の山ろく地帯にある
ホテル"チェゲト"



カフカズ最高峰エルブルース山（海抜
5642m）のロープウェー終点ミール駅



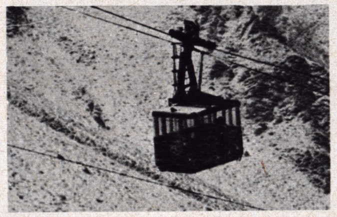
近くのチェゲト山にあるスナック
"アイ"。ここの標高は2400m。

右上　別の角度から見たロープウェーの終点ミール駅。標高3500mの地点にある。

右下　雲のかなたへ行くロープウェー…

エルブルース山一帯の開発計画図









エルブルースの斜面を滑降…

モスクワを飛び立って2時間後、われわれは北カフカズのミネラーリヌイエ・ボーディ空港に到着した。そこからバスで一四〇kmほど、カフカズ山脈のふもとの美しい山並みの中を行くと目的地だ。そのあとは山上へ登るだけだ。

ロープウェーのだいだい色のワゴンがわれわれを高度三〇〇〇mの地点までゆるやかに運んでくれた。ここの接続駅で別のワゴンに乗り換え、ふたたびカフカズ山脈の最高峰エルブルース山（五六四二m）の斜面を上っていく。脇からロープを支えている50mの大きな鉄塔が見え、それと



エルブルースで合宿中のソ連アルペンスキー・ナショナルチーム

出会うたびに、毎秒6mで頂上に近づいているというスピードが実感として感じられる。終点のミール駅は高度三五〇〇mの地点にある。ここにはスナックバーもあり、カフカズの民族料理が味わえる。この休憩所の定員は50名。

われわれが利用した新しいロープウェーの開通により、エルブルース山の万年雪のところまで行けるようになり、長さ数キロというアルペンスキー・コースが利用できるようになった。今後は初心者もベテランも一年中滑ることができる。

エルブルース山一帯のスポーツ・ツーリスト基地を管轄する現地の観光会議議長ヌフ・ベヒロフがわれわれに同行して、案内役になってくれた。かれは合計一五〇〇名収容の3軒のホテルをはじめ、レストラン、スナック、ロープウェーその他の交通機関など手広く面倒な経営を一手に引き受けている。それに今度はこのエルブルース山ロープウェーが追加された。

ベヒロフは次のように説明した。「一年間にエルブルース山一帯を訪れる人は四〇万人近い。冬場は主としてスキー客、夏場はここから峠越えで黒海へぬけるツーリストたちです。その大多数が労働組合のクーポン券利用客だが、諸設備の完備したアザウ、チェゲト、イトコルの3軒のホテルに20日間滞在する一般的な休暇の場合、費用は90ルーブル(約三万六〇〇〇円)です」

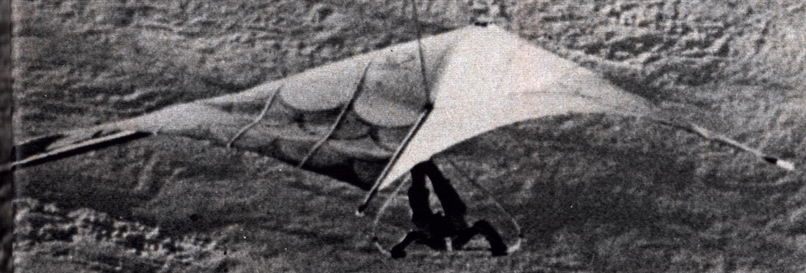
「エルブルース山ロープウェーが開通したことで、保養地としてこの一帯はどう変わるでしょうか？」

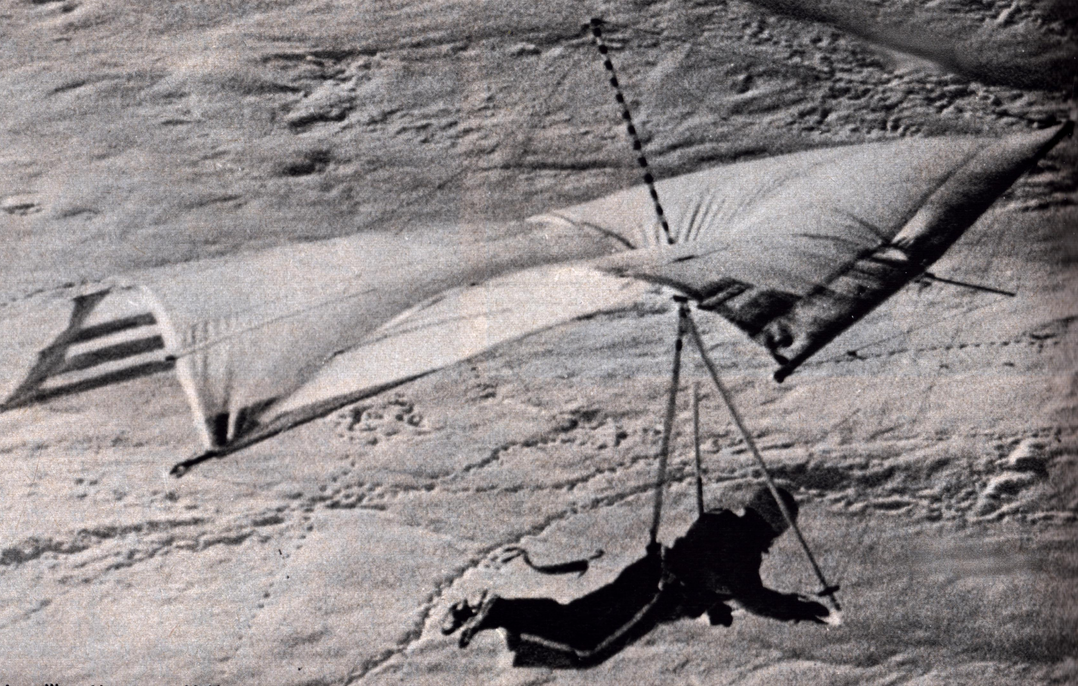
「われわれの施設全体に大きなプラスになります。われわれはエルブルース山の上に年間二〇万人を運ぶ計画ですが、計画通りに行けば20年で建設費を償却できます。しかし、エルブルース山を完全に観光開発するには、まだ多くのカネと手間がかかります。いいスロープがいくつもありますから、ここにもリフト、コース、休憩所を作らなければならない。なにしろエルブルースはスポーツにもってこいの理想的な山ですから……」

強力な雪上車が、さらに上の、一番高いところにあるホテル〝11人小屋〟へ運んでくれる。ここは高度四二〇〇mで、ソ連のアルペンスキー・ナショナルチームが合宿する場所だ。雪質がよく、滑りも上々で選手たちは一日の練習で30—40kmもスピード滑降する。

レオニード・チャガチェフ・コーチは、エルブルースでの合宿がソ連選手の世界アルペンスキー界での躍進に一役買うものと確信している。

ここで断っておかなければならないが、ソ連のアルペンスキーは歴史が浅く、第2次大戦後になってやっと盛んになり始めた。しかし今日ではアルペンスキー熱は大衆化している。リフト、ホテル、コースの整ったスキー場が全国に何十もある。その分布状態は、東はカムチャツカ、サハ





エルブルース山一帯には、ハンググライダー競技に絶好の場所もある。



雪の王国――ロープウェーの終点ミール駅付近の景観。

アルペンスキーのソ連代表選手ガリーナ・ロマノフスカヤ



コースを整備する雪上車



リンから西はカルパート山脈まで、北は北極圏のキーロフスクから南はカフカズ山脈まで、と広い。エルブルース山一帯はその中でも屈指の存在。

新しいロープウェーは、さまざまなスロープ、起伏、長さに富むエルブルース山本体のスキーコース開発の第一歩だ。各種コースが完成すれば、初心者も楽しめるし、スポーツマスターのようなベテランも練習できるし、トップレベルの国際競技会も開催できる。何度もアルペンスキーの世界チャンピオンになったオーストリアのカルル・シュランツ選手は数年前エルブルースに来た時、「エルブルースを開発し、そこにリフトやコースを整備すれば、ヨーロッパのアルペンスキー界全体がみなさんに感謝するようになるでしょう」と語った。

どうぞ、エルブルースへ来てください！ しかしエルブルース山でお目にかかりたいのは、何もヨーロッパのスキーヤーに限ったことではない。

人間と自然

ジェット機で飛んだツルの卵

スタニスラフ・スタリコービチ
カメラ E・ナザロフ
V・フリント



ソデグロヅルは世界の珍鳥。世界中に約400羽しかいないので、絶滅の恐れがある。

シベリアの北東部、ヤクート自治共和国を流れるインジギルカ川の下流部から世界でも最も珍しいツルの一種ソデグロヅルの卵が5個、ソ連の専門家グループの手によってモスクワのシェレメチエボ国際空港に運ばれた。数時間後、これらの卵は国際ツル財団の繁殖センター（米国ウィスコンシン州マジソン市の近郊バラブー）に到着した。

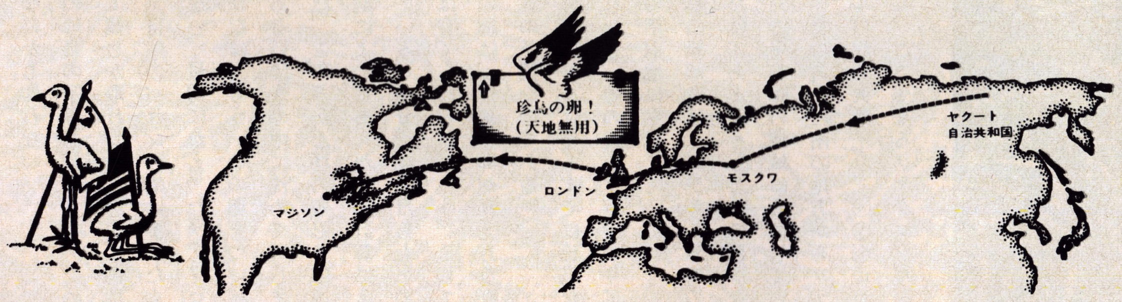
ソデグロヅルの数を昔通りに回復することを最終的な目標とするこの作戦がどのように行われたか、その模様をお伝えしよう。

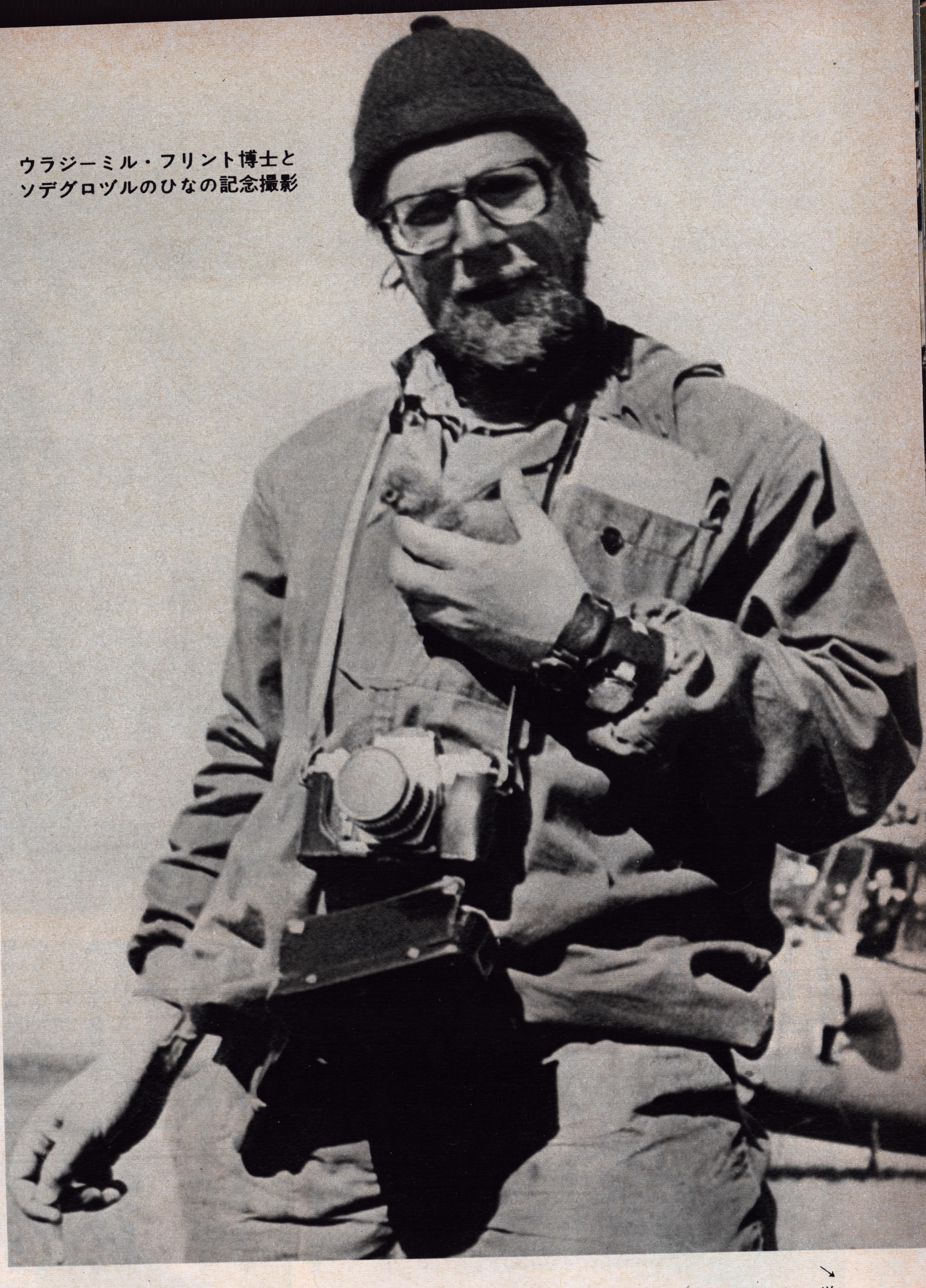
…飛行機は長い間ジグザグ・コースを飛んでいた。突然、操縦室から声が響く――「左手にソデグロヅル！」

飛行機は考えられないような旋回をした。下の、すぐそばを私が生まれて初めて見たソデグロヅル（雌）が一生懸命走っている。あたり一面は浅い沼である。足元からまるでボートのように波が広がる。赤いくちばしをちょうどリレーのバトンのように突き出して走って行く。観察者たちをあざむいたと思ったソデグロヅルは、巣の安全を確信して、軽々と舞い上がった。

飛行機の中はすっかり活気づいた。4番目の巣が見つかったのだ。そしてまったく都合がいいことに、すぐ近くに丘がある。ヘリコプターなら楽々と観察者を降ろすことができる…

ソデグロヅルの卵の“飛行経路”





ウラジーミル・フリント博士と
ソデグロヅルのひなの記念撮影

しかし、4個の巣だけではまだ足りない。あらゆる偶発事故を避けるためには、8個以上の巣を発見しなければならない。卵は割れるかも知れないし、もう腐っているかも知れない。それに↗

↗巣の中には卵が2個ではなくて、1個しかないかも知れない。

この珍鳥の子孫を減らさないために、卵は1個しか取れない。卵を1個取っても、自然のバランスにはまったく影響がない。最初にかえったソデグロヅルのひなは、もう一つの卵をついばんで（あるいは水の中に沈めて）しまうからだ。このきかん坊の残忍さは進化の法則によってあらかじめ計算に入れられている。多分、親鳥たちも2羽のひなは育てられないだろう。そして二つ目の卵は、最初の卵がかえらなかったときの予備なのである。

ソデグロヅルは昔もすでに珍鳥だった。しかし、その代わり、シベリアの多くの沼沢地に生息していた。今ではこの鳥の繁殖地はインジギルカ川の下流部だけである。そしてその数少ない巣は三万平方kmの地域に分散している。ここへ夏のあいだ南の地方からソデグロヅルの数の大半——三〇〇羽が渡ってくる。ここへ来るソデグロヅルがどこで越冬しているのか、科学者たちもまだ知らない。

地球の生物圏全体では約四〇〇羽のソデグロヅルが生存している。このうち子孫をつくるのは、明らかに年間60—70組を上回らないつがいである。

こうして、ソデグロヅルには絶滅の危険が迫っている。国際自然・天然資源保護連盟発行の『レッド・データ・ブック』とソ連の同種の本にソデグロヅルの名前が登録されているのは、そのためである。ソデグロヅルの生命にたいする道義的な責任はわが国にある。鳥の故郷は、その鳥が営巣する場所だからである。

われわれがウィスコンシンに送ることになっている卵から、ひながかえり、成長し、約3年後に卵を生むようになった場合、卵はソ連のものになる。こうして、この鳥のかつての数を回復する〝ソデグロヅル〟計画の実行が始まるのだ。

ソデグロヅルは非常に用心深い鳥で、いわゆる不安要因にはきわめて敏感に反応する。もちろん、不安にもいろいろある。ソデグロヅルは卵をねらうホッキョクギツネやツンドラに住む肉食の鳥たちをくちばしで追い払う力を持



めったに見られない場面——かえったばかりのソデグロヅルのひな。



科学者たちはあらかじめ飛行機で巣を見つけておいてから、ヘリコプターで改めてやってくる。沼沢地のツンドラにはヘリコプターでなければ降りられない

っている。しかし、野生のトナカイにはどうしようもない。もっと悪いのは飼われているトナカイとトナカイ放牧員の連れてくる犬である。こういう大集団が巣のそばを通過すると、おじけづいた鳥たちはトナカイの群れが地平線のかなたに消えてしまうまで自分の巣に戻らない。ソデグロヅルの巣を襲おうと、そういう機会をねらっているのがカモメたちである。

われわれ――生物学博士のウラジーミル・フリント、鳥類学者のアレクサンドル・ソロキン、そして記者はツン



ソデグロヅルの卵はモスクワの空港でフリント博士から国際ツル財団のアンダーソンさんに手渡された。

ドラの上をいたずらに飛んでいたわけではない。地図にはすでに30以上の巣が記入されていた。米国の専門家たちにたいする義務を果たすには、発見した巣の数は十分だった。しかし、卵は抱卵22日目から24日目までの間に採取する必要がある。これよりも早く採取することはできない。胚が十分に発達していないので、ヘリコプターや飛行機の動揺に耐えられない。これは整温器で温度を下げ、生化学的プロセスを遅らせ、発達を抑制しようとしても、同様である。卵を遅く採取することもやはりできない。ひなが途中で殻を破り、死んでしまうか、あるいは反対に輸送騒ぎに疲れ、殻を破ることができないかのどちらかである。

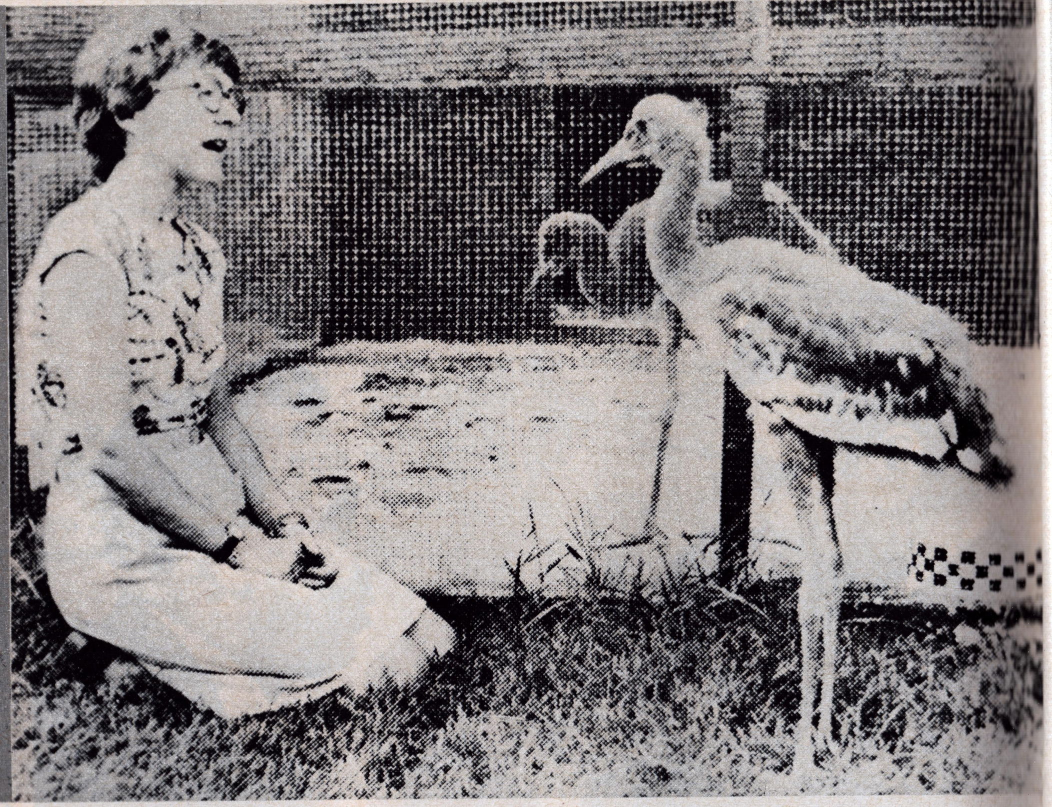
一方、卵はどのようにして届けるのか？　ヘリコプターが巣に向かおうとしているとき、突然、天候が悪化したら？　あるいは天候が以前から悪く、ヘリコプターが観察者を地上に降ろすことが元もと不可能なときは？　飛行機の国内線と国際線の時刻表の連絡は？　どの便の切符を買っておけばいいのか？　当日、飛行機が遅れないだろうか？

モスクワからトランクを受け取った。

このトランクにソデグロヅルの卵を入れ、温めながらユーラシア大陸と大西洋の上を飛ぶのである。トランクの内側には断熱材が張ってあり、6個の穴の彫られた発泡スチロールのケースが収められている。この穴に卵を入れる。内部の温度は32度に保たねばならない。この人工の巣を温めるのは、トランクの中に入れられた温たんぽである。

そして、ソデグロヅルの巣から卵を採取しなければならない6月28日がやって来た。空は鉛色の雲で覆われ、飛行不能だった。ようやく翌日の夜になって、測候所から「明日は風が変わらなければ、飛行日和」と伝えてきた。6月30日、ツンドラの上に雲一つない空が広がった。ヘリコプターで出かける。新しく入るニュースは余り明るくない。すでにいくつかの巣は空になっていた。

さらに数個の巣を回った。ヘリコプターの機長は一見不可能なことをやってのける。機を直接、沼の中に着地させるのだ。沼地に車輪がズブズブ沈む。着陸のテクニックは大したもので、ヘリコプターのプロペラで巻き起こされた強い風が近くの巣の無防備の卵を吹きころがすようなことはなかった。ほ



アンダーソンさんと米国で孵化して50日目の2羽のひなウラジーミルとキータ（米国の雑誌に掲載された写真）

んの10mほどしか離れていないところに着陸したというのに。

卵を採取し、飛び上がったかと思うと、学者たちに頼まれもしないのに、パイロットは再びヘリコプターを下げた。上空からソデグロヅルの赤茶色の弱々しいヒナを発見したのだ。こうして世界最初のソデグロヅルのひなの写真が撮影された。ひなは再び沼の中に放された。

モスクワまでの全行程、卵を入れたトランクの温度はしかるべき水準に保たれた。しかし、1個の卵は死亡した。ひなが殻をつつき始めたが、破れなかったのだ…　しかし、残りの4個はトランクごと、モスクワのシェレメチエボ空港ビルでフリント博士から国際ツル財団のエリザベス・アンダーソンさんに無事手渡された。

一週間後、遠い米国のウィスコンシン州からフリント博士のもとに電報が届いた。

「2羽のひながかえった。2個の卵は無精卵だった。おめでとう」。そしてさらに10日後、もう一通の電報が到着した。「ひなたちは元気に成長している」

こうして、絶滅しかかっている種――ソデグロヅルの再生への道が始まった。

エリセーエフ家の四世代

アナトリー・ミロノフ
カメラ　A・ガラーニン

毎朝、レニングラードのメタリーチェスキー工場の入口で、息子たちと一緒に出勤してくる白髪の男の人を見かけることができる。この人の名はコンスタンチン・エリセーエフ。かれとその家族のことをご紹介しよう。

経歴の始まり

「私の運命は、レニングラードの多くの市民の運命と似通っています」と、エリセーエフは語る。「私は一九二〇年、私のほかにすでに4人の子どもがいた家庭に生まれました。父は農民出身で、一九一七年の10月社会主義大革命の少し前にペトログラード（レニングラードの当時の名称）に出稼ぎに来たのです。そして一九一九年にソビエト政権を守る内戦に出征し、私が生まれてから間もなく戦死しました。

母は一人で5人の子どもを育てなければなりませんでした。何しろ一番上の兄もまだ11歳だったからです。もちろん、何不自由ない生活だったとは言えませんが、衣食には事欠きませんでした。そして子どもたちは全員が学校に上がりました。やがて成長し、働き出しました」

工場勤続30年

普通学校の7年生を修了したあと、コンスタンチン・エリセーエフはレニングラードのエレクトロシーラ工場付属の職業技術学校に入り、ここで仕上げ工の職種を身に付けた。しかし、工場で働くことはほとんどできなかった。一九四一年にファシスト・ドイツとの戦争が始まり、かれも出征したからだ。そして戦争の最後の日まで戦い、一九四五年6月24日の、モスクワの赤の広場における有名ながいせんパレードに参加した。エリセーエフが除隊してレニングラードに帰ってきたのは、一九四六年の秋だった。その年の12月1日に結婚した。花嫁とは戦争前からの古い顔なじみだった。こうしてようやく平和な生活が軌道に乗った。

コンスタンチン・エリセーエフはメタリーチェスキー工場に電気修理工として就職した。当時はこの工場にとって大変な時期だった。半分破壊された工場をきわめて短い期間で復興し、国が必要とする水力発電所用タービンの生産を開始しなければならなかったのだ。

間もなく、エリセーエフは工具職場で変電所の修理をする仕事を任された。ところが、この職場での仕事がすっかり気に入って、ここに熱処理・工具工としてとどまることになる。それからすでに30年。



ソ連共産党中央委員会政治局員、党レニングラード州委員会第一書記グリゴリー・ロマノフから労働赤旗勲章を授与されるコンスタンチン・エリセーエフ（家族アルバムの写真から）



1



2

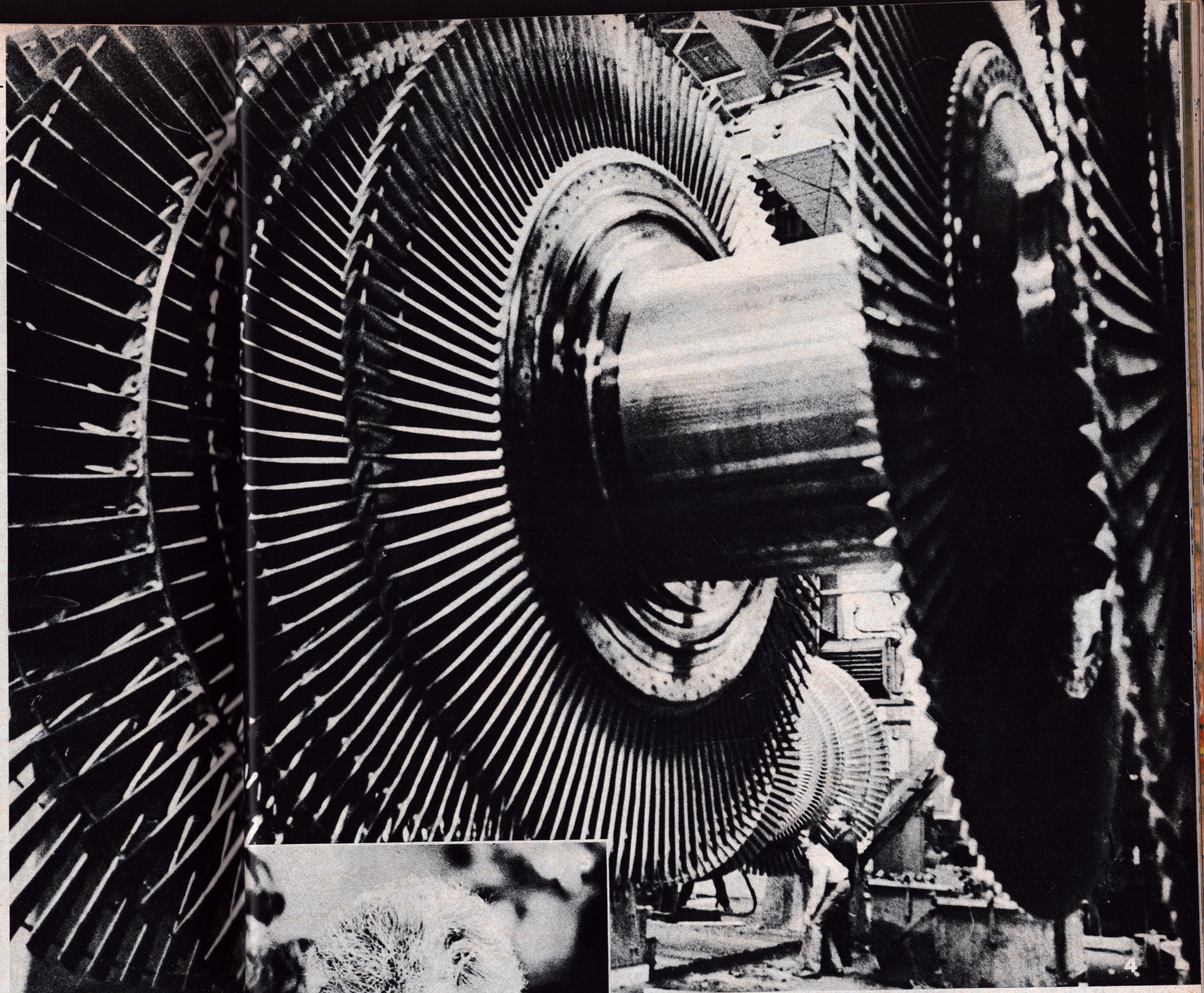


3

1　孫娘に甘えられて……

2　レニングラード・フィルハーモニー大ホールで開かれた交響楽の演奏会に集まったエリセーエフ家第2世代の人々

3　かつて自分も学んだ職業技術学校で





4 エリセーエフが働いているレニングラードのメタリーチェスキー工場では、こういうタービンを製作している。

5 エリセーエフは労働組合の職場オルグもしている。

6 同僚たちと

7 レニングラードのピスカリョフ墓地。ここには大祖国戦争で戦死したエリセーエフの兄も葬られている。

8 エリセーエフの長男アレクサンドルは同じ工場の設計技師

9 次男アナトリーも同じ工場で溶接工として働いている。

エリセーエフはまた、いろいろな社会的な仕事を引き受けている。工場でもさまざまな委任を遂行しなければならなかった。労働組合のオルグをし、工場労働組合委員会のメンバーを勤め、住宅配分委員をした。そして現在は職場の労働組合委員会の議長である。

エリセーエフは工場とその歴史のことを実によく知っている。かれは語った。

「最近、メタリーチェスキー工場が一九二四年に製紙工場のために製作した第1号タービンの回転車が戻ってきました。この回転車は私ひとりでも持ち上げられます。話では、当時このタービンは発注者のところへ荷馬車で運ばれたそうです。このタービンと、数年前、エニセイ川のクラスノヤルスク水力発電所のためにここで製作された世界最大のタービンを比較すると、後者の出力は前者の一三七〇倍にもなります。というわけで、この歳月に工場の製品はまったく一変しました。しかし、大事なのはそのことだけでありません。工場も、工場での労働も、そこで働く人々もまったく別のものになったということです」

エリセーエフは精神的要求をいろいろと持った人間である。自宅には多くの蔵書を持ち、妻と一緒に博物館、美術館を訪れ、クラシック音楽のレコードを収集している。年に数回は必ずレニングラード・フィルハーモニーの大ホールで生の音楽を楽しむ。このホールでは一九四二年8月9日、ヒトラー軍の封鎖という苦難の日々の最中に、カルル・エリアスベルグの指揮でドミト



9



8

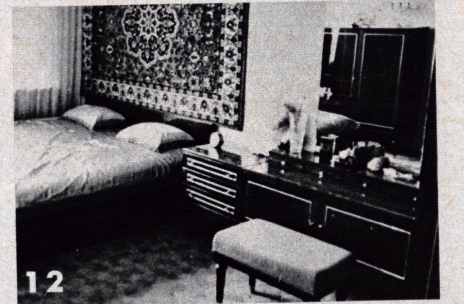


7











10 新しい住宅をもらった長男アレクサンドル夫婦

11 次男のアナトリー夫婦

12 次男のアナトリーの住宅の一部

13 孫たちと散歩するエリセーエフの妻アンナ

14 エリセーエフ一家の勢ぞろい

リー・ショスタコービチの有名な第七交響曲が初演された。ショスタコービチはこの作品を故郷のレニングラードに捧げたのだった。そして、この初演のときのオーケストラ団員の中にはコンスタンチン・エリセーエフの長兄ビクトルがトランペット奏者として加わっていた…

エリセーエフは旅行も好きだ。これまでにベルギーとドイツ民主共和国へ行ったことがある。

子どもと孫と…

エリセーエフ一家はよく全員が顔を合わせる。そういう時はいつまでも会話がはずむ。

私はコンスタンチン・エリセーエフに尋ねた——どうして息子さんたちは同じ工場に勤めるようになったのです？これはあなたがた両親の意向ですか？　エリセーエフは語った。

「私と妻は、息子たちが同じ工場で働いていることを非常に喜んでいます。もちろん、私たちは子どもの人生行路をあらかじめ決めて、子どもがその路線からそれないように監視している親とは違います。その気さえあれば、息子たちは教師にも、医師にも、音楽家にもなれたでしょう。何しろ、勉強の機会はいくらでもあったのですから。しかし、長男のアレクサンドルは新型タービンを開発する設計技師に、次男のアナトリーは溶接工に、つまりタービンを現場で製作する人間の一人になったのです。息子たちの全人生は、メタリーチェスキー工場と結び付いています。最初は工場の保育所、それから工場の労働組合が主催するピオネール・キャンプ、工場の文化宮殿に付属する児童クラブ。そしてアナトリーは中等専門学校の生産実習をメタリーチェスキー工場で行い、アレクサンドルも工場付設の夜間大学を卒業したのです…」

今ではコンスタンチン・エリセーエフの二人の息子たちもそれぞれ家庭を持っている。どの家族も工場から提供された快適な住宅に住んでいる。そして孫たちがもう工場付属の幼稚園と保育所に行き始めた。すべては同じように繰り返されるのである……



ソ連の視点

死をもたらす中性子爆弾

中性子爆弾の生産を開始し、西欧へこれを配備するという米国の計画に反対する世論の大衆運動が世界各国で展開されている。核軍拡競争のいっそうの拡大をめざす反動層のこの計画をもし失敗に終わらせることができなければ、人類は重大な脅威にさらされることになるだろう。これについて、医学と核物理学の分野で著名なソ連の二人の学者の意見を紹介しよう。

"人道的"殺害か、人道主義の殺害か？

ソ連科学アカデミー会員
ボリス・ペトロフスキー

私は医師および学者として、中性子兵器の生産開始にかんするペンタゴンの計画に憤慨しないわけにはいかない。

中性子爆弾は人類に何をもたらすか？　この新型爆弾は"きれいな"、"人道的"な兵器と呼ばれているが、その使用は恐るべき結果をもたらす危険がある。

中性子爆弾が"通常"核兵器と根本的にちがっているのは、その主な威力が重篤な放射能症を引き起こす中性子放射であることにある。放射能症の苦しみと結果は残念ながら、動物実験からだけではなく、広島、長崎への野蛮な爆撃の結果からも知られている。気分は悪くなり、血液中の白血球の数は急激に減り、生命に不可欠な白血球細胞の源である骨髄がおかされる。生体は事実上伝染病にたいして無防備となる。内臓障害が進行し、出血が起こる……

ペンタゴンの戦略家は中性子爆弾の主要な"長所"を人人の戦闘力を急激に奪うことのうちに見ている。大量の照射のもとで中性子は直接神経系に、何よりも脳に破滅的な影響を与える。中性子照射の不可避的な結果は、方向感覚の急速な喪失、一定の目的をめざすごく単純な行動が遂行できなくなること、意識の喪失、けいれん、ショックである。どんな治療も被爆者を問死から救うことができない。

"人道主義者"は、中性子爆弾の助けを借りて「都市を防衛している敵をせん滅し、しかも棚の中の食器をこわさずにすます」ことができると主張している。だが実際はまったく事情が違う。

中性子爆弾の爆発は爆心地から半径一km以内にいる人々に死をともなう放射能症を呼び起こすほか、約二〇〇mの距離にある建物を完全に破壊する。破壊力も、火災も、物質的、文化的財貨の破壊も同じである。

致死的障害の半径が一km以内にとどまり、破壊と火災が二〇〇mにとどまるということが、原則的な意義をもっているのであろうか？　第2次世界大戦時代の投下用爆弾は周囲数十mの範囲ですべてを破壊したにすぎない。しかし、この戦争が平和な住民にどれだけの悲劇をもたらしたことか！

どんな戦争も戦闘手段の行使を戦場だけにとどめてはおかなかった。平和な住民がつねにそれに苦しんできたのである。戦闘手段が改良されればされるほど、それは人々にいっそう大きな苦しみをもたらしてきた。だから、戦車縦隊が中性子爆弾の爆発によって撃破されているのに、そこから2、3km離れた所にいる"平和な家族がのんびりとお茶を飲んでいる"状況を現実のものとして想像することなどまったくできない。

ペンタゴンは、中性子爆弾の爆発は地域の放射能汚染をほとんど伴わないから、"きれいなもの"であると主張している。しかし、それはちがう。中性子放射線は長時間維持されるだけでなく、爆発後しばらくの間犠牲者に医療を施すのを困難にする。このように、無傷で残る物質的、文化的財貨は、事実上放射線源に変わる。

中性子放射線は、運よく致死半径の外にいる者をも容赦しない。実際、中性子爆弾の爆発時には、そこから1・5km以上離れたところにいる無防備の人々の多くは生き残る。中性子の作用は一見認められない。しかし、一定の結果は避けられない。そのうちでもっとも特徴的なものは、寿命の短縮、ガン発生のおそれ、眼の水晶体の混濁とその結果としての失明である。高レベルの放射線は、とくに妊婦にとって危険である。新生児の死亡率、肉体的、精神的に欠陥のあるこどもを生む恐れが著しくふえる。その他、遺伝機構の損傷により照射を浴びた人々の子孫には先天性奇形がはるかに多く見られるだろう。

中性子爆弾が爆発すれば、幾百万人の死、重篤な疾患が人々に襲いかかるだろう。それは爆発音がどこでとどろくか——戦場の上空か、平和な都市や農村の上空かにまったく関係ない。

核戦争の導火線

ソ連科学アカデミー会員
モイセイ・マルコフ

中性子爆弾の西欧への配備を支持する人々は、これは防衛に必要な"核のカサ"だと主張している。実際には人口過密な欧州諸国ではこの"カサ"がすぐに"核のひつぎのふた"になりかねない。

中性子爆弾は戦術核兵器だというニセの旅券で世に出されている。その死の照射は短期的にも長期的にも、同じ威力の現有核兵器の10倍もの生物学的損害を引き起こす。中性子が土壌、建物の壁、屋根、構造材などに吸収されると強い二次放射能が生じる。中性子照射ゾーン内ではすべての物体が人命に危険なものとなる。中性子爆弾の展開は各国の査察手段ではチェックできない。さらに、中性子爆弾は核弾頭の数をふやす。

中性子爆弾は核兵器拡散に新たな道を開くものである。この拡散はまさに核兵器のミニチュア化によって容易になり、促進される。核戦争偶発の地理的規模と政治的前提が拡大される。

中性子爆弾は核による世界の破局への導火線である。これを保有許容兵器庫に入れることは、核紛争の可能性にとってまったく新しい状況をつくり出す。主要な点は、以前は核兵器を武力紛争に原則的には使用できないと理解されていたが、それに対立するものとしてその使用もあり得るとの意見が打ち出されたことにある。

これは予想のできないリスクへの歩みであり、世界核戦争の勃発への歩みである。世界は、中性子による死から自らを守らねばならない。

トピックス

女店員が集めた貝がらコレクション

クリミア半島シンフェローポリ市の動物店の女店員S・ポモガエワが長年にわたって集めたこのコレクションは、総点数で 300点を超しており、珍しい貝がら、海の動植物などさまざまなものが含まれている。

コレクションのなかには、重さ200 kgもあり、透かし模様の縁を持つ雪白の貝がら、ときには長さ数百mにも伸びる群体を形成するさんご"しかの角"などがある。また古代、狩猟のときに狩人の角笛の代わりに楽器として利用された貝がらもコレクションに含まれている。

海底から古代ギリシャのツボ

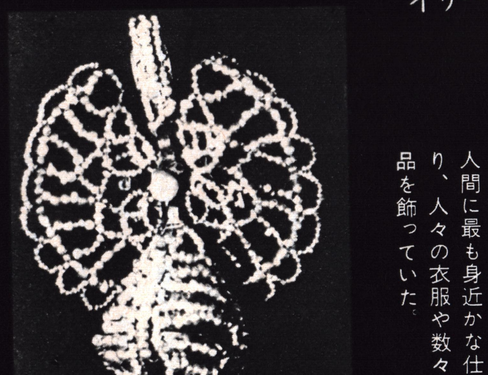
バツーミ市（グルジア共和国）付近の黒海の深さ 120mの海底に紀元前1世紀ごろから沈んでいたアンフォラ（両方にとっ手のついたツボ）が、漁船の網にかかって引き揚げられた。高さ 115cm、容量32ℓのこのツボは、この海岸の古代ギリシャ植民地でぶどう酒やオリーブ油の貯蔵、運搬に使われたもので、洪水のさいに海に押し流されたものと推定されている。



縁飾り（18世紀)。薄地の織物に亜麻の糸で刺しゅうしたもの。

ロシアの刺しゅう

イリーナ・ボグスラフスカヤ



耳飾り（19世紀)。川でとれた真珠を使った刺しゅう。

刺しゅうは恐らく、数あるロシア民族芸術のなかでも最も発達した技芸だろう。刺しゅうは全国いたるところで行われていた。刺しゅうには特別の設備はいらない。亜麻布、糸、針はどこの家庭にもあった。刺しゅうはその性質上、室内、家庭内でできる仕事、人間に最も身近かな仕事であり、人々の衣服や数々の日用品を飾っていた。

刺しゅうは一反の何でもない亜麻布を美しく、はなやかな織物に、真の芸術作品に変えた。刺しゅうは布の縁にも隅にも施された。衣服ではそれが複雑に組み合わされて、ちょうどいなか家にある彫刻装飾のように、均整のとれた様式に統一されていた。

刺しゅうをする婦人たちが、自分たちの技芸で利用しはじめた最初の模様は、さまざまな幾何学的図形だった。直線、波形、円、格子、四角など、どの形をとって見ても、簡単なものばかりだった。当時の人間にとってこれらの図形は、世界にかんする自分たちの概念を示すときの象徴的な記号だった。民族的伝統は、古代のこれらの記号の外形を数世紀にわたって伝えた。これらの記号は純粋に装飾的なモチーフに変わり、名人たちがこれを使って数多くの装飾図形を作った。その後、各地でそれぞれ得意の型の模様が作り上げられた。そしてこれらの図案にはその土地の自然の特質も反映された。

幾何学的な図案は、北部の沈んだコケモモ色から南部のオレンジ色までさまざまなニュアンスの赤色で施されるようになった。

時がたつにつれて、主題(テーマ)を持つ構図も生まれるようになった。そしてそれは、一つの刺しゅうから他の刺しゅうへと何回も繰り返して制作された。刺しゅうで日用品を飾るとき、それは明らかに何らかの伝説や民間信仰を映していた。たとえばよく繁った樹林、鳥、あるいは手をあげて、騎士たちが乗った馬の手綱をとっている人々を描いたものがあるが、これは自然の力を表現したものだった。

主題のある模様は、幾何学的、神話的模様にくらべて、より自由に施されている。織物が織られている糸はやはり一種のカンバスとして使われているが、それらはもはや刺しゅうの模様を拘束するものではなく、それらの模様は気ままな即興詩を思い起こさせることがますます多くなった。刺しゅうの模様は初め、亜麻布のうえに鉛筆で下絵を描く。一部の刺しゅうでは、目印の点や下絵の跡が見られることさえある

主題を持つ刺しゅうは、子供が描いた幼稚で原始的な絵を思わせることが多い。このような形象の借りものでない、真心のこもった大胆な表現は、ただ絵によってのみ達成されたものではなく、刺しゅうの手法や色彩によっても達成されたものである。主題刺しゅうでは、民族刺しゅうのありとあらゆる技法が利用されていた。

主題刺しゅうの色彩が豊かなのは、赤、白、緑、黄、青など基本的色調が無数に変化しているためである。赤と白を対比させる伝統的な手法がしばしば用いられた。しかし主題刺しゅうにおいては、色はただ純粋に装飾的役割を演じただけではない。青、黒、薄紫色の馬、赤の雄鶏、黄の

花などは、主題のおとぎ話的内容を深め、形象の情緒的ニュアンスに影響を与えたのである。

残念なことに、古い刺しゅうの見本はわずかしか残されていない。現在残されている刺しゅう作品の大部分は、芸術の風俗描写的ジャンルが開花した19世紀のものだけである。人々が毎日の仕事に精を出し、心配りをしている日常生活が、これらの刺しゅうのなかにいとも鮮やかに、多面的に描かれていた。主題構成の豊富さにおいてこれに匹敵し得るものといえば、日用品の木の部分に施された装飾画ぐらいのものだろう。

タオルや縁飾り(裾飾り、枕カバーやショールのレース縁)、エプロンやルバーシカ(シャツ)の縁にも、独得の風俗場面やはなやかな物語の場面が展開されている。



タオルの端に施された刺しゅうの一部分(19世紀)



タオルの端(20世紀)。赤い亜麻のタオルに白い木綿糸で刺しゅうされている。

刺しゅうを施したルバーシカはロシアの年ごろの娘にはなくてはならぬものだった。これはおめでたい日や祭りの日に着られたが、最もはなやかなものは、干し草刈りや取り入れの時のために、また婚礼衣装用に作られた。

とくに大きな意味を持っていたのは刺しゅうをしたタオルの役割である。農家の屋内の飾りに使われたほか、婚礼の儀式には刺しゅうを施された数十本のタオルが〝列席〟していた。そして生まれた赤子もこのタオルに取り上げられた。刺しゅうの模様はタオルの端の部分に幅一杯にひろがっていた。

このほかに刺しゅうの伝統的対象とされたのは下げ飾りであった。これは民族芸術のユニークな産物である。下げ飾りの美術的な独特さは、刺しゅう師たちが18世紀の美術様式を取り入れたために生まれたものである。人気があったのはバロック様式の表現手段と手法だった。このバロック様式が、刺しゅうに描かれた場面と図形のダイナミズム、刺しゅう自体のすぐれた描写技術と洗練された技法のなかに反映されたのである。



エプロン(19世紀)。亜麻地に赤とねずみ色の木綿糸で刺しゅうしたもの。

このような繊細で手の込んだ刺しゅうは、特別に織り上げられた白い亜麻布の薄地に施された。同じ白い糸を使い、絵を刺しゅうしたり、輪郭のなかで絵を小さい模様の縫い目で広げていったりした。

カーテンは様式的には下げ飾りに近い。その刺しゅうは、ヨーロッパの高価な織物の模様と、18世紀前半の特徴だった象徴的な図形を利用している。

金と真珠による刺しゅうは、ロシア刺しゅうの歴史のなかで特別の地位を占めている。18世紀以前には、この技芸は主として金持ちの貴族の屋敷や修道院の細工場で行われた。19世紀に入ってから、それは人民の手に届くものとなったが、それでも当時ほとんどすべての家にあった農民刺しゅうほどには広まらなかった。

タオルの端(19世紀前半)





カーテン(18世紀前半)。亜麻地に亜麻の糸で施された透かし刺しゅう。

真珠は川で採取され、頭飾り、首飾り、耳飾り等の飾りに使われた。真珠刺しゅうには特別の熟練と技能が必要だった。下絵のうえに太目の撚り紐が一面に張りつけられる。真珠は糸あるいは毛髪に通される。そして真珠を通した糸を下絵に合わせて縫い付け、さらに別の糸で真珠と真珠の間を横締めにして固定する。真珠のまわりを金糸でもう一度縁取りすることもある。もちろん、このほかの方法もあった。

金による刺しゅうも、真珠の刺しゅうと同じ地方で発展した。しかしロシアには、金糸刺しゅうを専門とする中心地がいくつかあった。金糸、銀糸で刺しゅうされた山羊皮の長靴、皮製手袋、財布、ベルト、クッション、冬帽子などはロシア国内で需要が大きかっただけでなく、国境をこえて東西へ輸出されもした。しかし19世紀の末までには、金糸刺しゅうも真珠刺しゅうも姿を消した。

× × ×

ここに写真を紹介した刺しゅうの見本は、レニングラードの国立ロシア美術館、国立ソ連邦諸民族民族学博物館およびモスクワの国立歴史博物館所蔵のものである。

МЕНЮ ДЛЯ ОЛИМПИЙЦЕВ

До откры́тия Олимпиа́ды-80 ещё бо́лее двух лет. Но уже́ сего́дня специа́льно со́зданный в Москве́ кулина́рный сове́т гото́вится встре́тить спортсме́нов и тури́стов со всего́ ми́ра.

— Мы на́чали разраба́тывать рацио́н для спортсме́нов уже́ сейча́с, — говори́т руководи́тель сове́та Антони́на Никашо́ва. — Для нау́чной организа́ции пра́вильного пита́ния мы сове́туемся с учёными, ме́диками, ви́дными тре́нерами и са́мими спортсме́нами. Учи́тываем и специ́фику ра́зных ви́дов спо́рта, и осо́бенности национа́льных ку́хонь наро́дов ра́зных стран и контине́нтов.

Осо́бенно мно́го сло́жностей возника́ет с составле́нием меню́ для спортсме́нов из А́зии, А́фрики и Ю́жной Аме́рики. Здесь на по́мощь моско́вским кулина́рам пришли́ студе́нты Университе́та дру́жбы наро́дов и́мени Патри́са Луму́мбы. По их рекоменда́циям повара́ столо́вой при университе́те пригото́вили и предста́вили на наш сове́т деся́тки фи́рменных блюд, мно́гие из кото́рых получи́ли хоро́ший о́тзыв специали́стов. Мы плани́руем так организова́ть обслу́живание спортсме́нов из да́льних стран, что́бы они́ могли́ и са́ми с по́мощью на́ших повaро́в пригото́вить для себя́ любо́е, да́же са́мое экзоти́ческое ку́шанье.

Фанта́зия кулина́ров, вдохновлённых таки́м я́рким собы́тием, как Олимпи́йские и́гры, коне́чно, родила́ и це́лый ряд но́вых блюд. Сала́ты, горя́чие ку́шанья, десе́рт — в ка́ждом разде́ле олимпи́йского меню́ бу́дут зна́читься блю́да, со́зданные специа́льно к всеми́рному фо́руму спортсме́нов. Широко́ бу́дут предста́влены и национа́льные блю́да наро́дов СССР.

Тре́нерам и спортсме́нам бу́дет предло́жено на вы́бор пятьсо́т разли́чных блюд.

本号のテキストの訳文は，次号（5号）に掲載される予定です。なお，前号のテキストの訳文はこの号の 76 ページをご覧下さい。

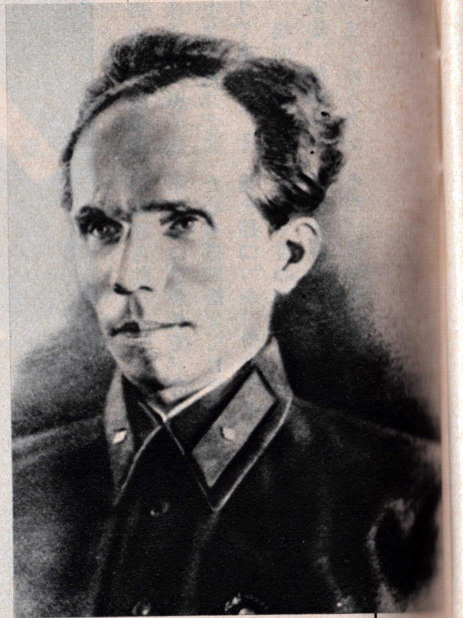
【注】

☆1行目：специально созданный в Москве кулинарный совет〈モスクワで特に設立された料理会議は…〉
☆4行目；рацион для спортсменов〈選手たちの給食(の量)〉
☆5行目：Для научной организации правильного питания〈正しい栄養（食事）を科学的に組織するために…〉
☆7行目：Учитываем и специфику разных видов спорта, и особенности национальных кухонь...〈各競技の特殊性も，さまざまな国や大陸の人々の民族料理の特徴も考慮する〉。кухонь は кухня〈料理〉の複数生格。
☆9行目：Особенно много сложностей возникает с составлением меню...〈アジア，アフリカ，南アメリカの選手たちのメニュー作成ではとくに多くの複雑な問題が生じる〉
☆10行目：Здесь на помощь московским кулинарам пришли студенты Университета дружбы народов имени Патриса Лумумбы.〈この点で，モスクワの料理人たちを援助してくれたのはパトリス・ルムンバ記念民族友好大学の学生たちである〉
☆12行目：десятки фирменных блюд〈数十の特別料理〉。фирменные блюда は〈そのレストランや食堂だけで出す特別料理〉
☆13行目：Мы планируем так организовать обслуживание спортсменов..., чтобы они могли....〈選手たちが…できるように，われわれはサービスを組織することを計画している〉。...так.... чтобы はよく出てくる形。
☆18行目：...будут значиться...〈記載されるだろう〉
☆19行目：Широко будут представлены и национальные блюда народов СССР.〈ソ連の民族料理の中からも多くの料理がメニューに載るだろう〉

文学

ニコライ・オストロフスキー

文芸批評家　エブゲニー・シードロフ



ロシア・ソビエト文学のアンソロジー

ソビエト文学史において、有名な長編『鋼鉄はいかに鍛えられたか』の中で語られているニコライ・オストロフスキー（一九〇四―一九三六）の運命ほどユニークな運命はないでしょう。これは、ソビエト政権の最初の時代のコムソモール（共産青年同盟）員パーベル・コルチャーギンについての物語です。作家自身と作品の主人公とは、完全に溶け合っています。コルチャーギンはオストロフスキーの人生とその生命をかけた偉業を再現します。

経緯を手みじかに紹介しましょう。

ニコライ・オストロフスキーはウクライナの労働者の家庭に生まれました。11歳のときから、彼の労働歴が始まります。はじめは、シェペトフカ駅のレストランの料理場で〝小僧〟として、つぎには、発電所の火夫の助手として働きました。一九一七年の10月革命のころ、シェペトフカの労働者や共産党員と近づいて、ソビエト政権を守るための闘争に参加しました。一九一九年には15歳でコムソモールに加盟して、志願して前線へ赴きました。第1騎兵隊で白衛軍と戦い、一九二〇年には重傷を負って復員します。その後の数年間は、コムソモールで指導的な活動をし、一九二四年に共産党に入党しました。オストロフスキーのまっしぐらな人生には、一九二七年に急ブレーキがかかりました。以前の傷がもとで発病し、永久にベッドから起きることができなくなってしまったのです。さらに一年後、彼は完全に失明します。このとき、オストロフスキーは、やっと24歳になったばかりでした。このような状況について、彼は『鋼鉄はいかに鍛えられたか』の中で次のように書いています。

「もっとも大切なもの――たたかう能力を失ってしまったら、何のために生きるのか？とパーベル・コルチャーギンは悲痛な気持ちで考えた。現在と、楽しみのない明日を、何をもって自分の生活を理由づければいいのだ？　何でそれを満たせばいいのだ？　ただ食べて、飲んで、息をするだけか？　闘いながら前進して行く同志の、無力な目撃者になることか？……胸に弾丸を撃ち込めば――すべて終わりだ！　まんざらでもなく生きてこれたんだから、時機よく死ぬことだってできる。臨終の苦しみを望まぬ戦士を、だれが批判できようか？

彼の手はポケットの中で拳銃の平らな銃身をまさぐり、指は慣れた動作で握りをつかんだ。彼はゆっくり拳銃を引き抜いた。

銃口が、さげすむように彼の目をのぞき込んだ。パーベルは拳銃を膝の上に置き、毒々しく罵った。

『こんなことはすべて、紙に書いたヒロイズムだ、兄弟たち！　自殺することなら、どんな馬鹿にだって、いつでも、どこでもできる。それは、状況からのもっとも臆病で安易な逃げ方だ。生きるのが困難なら、死ねばいい。だが、お前はその人生に打ち勝とうとしてみたのか？』」

こうして、人間的な精神が、徐々に、日いちにちと肉体に忍び寄る死に、不敵な戦いを挑ませたのです。オストロフスキーとその主人公の精神的闘争は、偉大な思想のまわりに結集した人間の力が無限であることへの確信と不可分でした。その思想とは、共産主義です。共産主義のためにオストロフスキーは、国内戦の戦場で戦い、平和建設に参加したのです。共産主義のためにオストロフスキーは、動く可能性を失ってからはペンをとり、人々に自分の世代について物語ったのです。

彼には、ほんのわずかしか時間が許されませんでした。しかし時間は、オストロフスキーにとってまったく別な長さを持っていました。目撃者たちは、まだ目の見えた2年間に、オストロフスキーが膨大な量の本を読んだ、と語っています。彼は創作する力を身につけるために、むさぼるように独習したのです。友人にあてた手紙の一節にはこう

書かれています——「ぼくは悪魔のように卑しい生活を少しでも内容のあるものにするために、全力で精神的な食べ物を探そうとしているのです。なぜなら、それ以外に、生活そのものを理由づけることができないからです」さらに2年後の一九三〇年にはこう書いています——「私には、生活そのものを理由づけるのに欠かすことのできない内容で生活を満たすべき計画があります……手短に言えば、私のこと、文学のこと、〝若き親衛隊〟出版所のことです……」

ベッドに寝たきりの彼は、特別につくられた下敷けい紙の上に置かれた紙に書きました。からだが完全に麻痺してしまい、指が鉛筆をにぎれなくなってしまうと、妻に口述しました。

一九三二年に、モスクワの〝若き親衛隊〟出版所は長編『鋼鉄はいかに鍛えられたか』の第1部を、一九三四年に第2部を出版しました。その成功は、あらゆる予測、もっとも大胆な予測さえ上回りました。オストロフスキーは生きた伝説となり、全国民にその名を知られる、数少ない一人になりました。

読者はこの作品を、たんに英雄的な時代の記録としてだけでなく、ソビエト的人間の普遍的なポートレートとしても受けとめたのです。

オストロフスキーは一九三六年12月22日に、32歳で亡くなりました。

パーベル・コルチャーギンの死後の運命は、まさに感動的な物語です。その形象はすでに40年以上も世界中を歩きまわって、人間による人間の搾取に反対する闘争に加わった新しい世代の人々を次々にひきつけています。この作品は世界の多くの民族の言葉に訳されており、その発行部数は数千万部に及びます。

ファシスト・ドイツとの戦争のとき、ソ連では戦車や飛行機や船に〝コルチャーギン〟という名がつけられました。コムソモール集会の日程表には「コムソモール員！ パーベル・コルチャーギンに見ならおう！」の句が入っていました。そして平時には、ニコライ・オストロフスキーやパーベル・コルチャーギンの名を冠した若者の部隊が、もっとも困難な仕事——処女地の開拓やカマ自動車工場の建設、サヤン・シューシェンスコエ水力発電所やバム鉄道の建設に向かっています。

日本では、ここにその抜粋を紹介するニコライ・オストロフスキーの未完の長編『嵐に生まれ出るもの』はあまり知られていません。オストロフスキーがこの作品に取り組んだのは一九三四年から一九三六年までです。物語は一九一八年の末から一九一九年の初めにかけて、当時ポーランド領だった西ウクライナの小都市で展開されます。オストロフスキーは、ボリシェビキの指導のもとにポーランドの地主や資本家、ドイツの干渉者にたいして蜂起を準備していた労働者の、革命的な自覚の成長を示そうとしています。

〔長編抜粋〕

嵐に生まれ出るもの

ニコライ・オストロフスキー作　稲田定雄訳

ジョーベクは、少尉の金色の肩章と一千マルクをものにしようと、堅く決心はしたものの、失敗した場合は、どこか遠くへ身を隠す積もりであった。それにもうだいぶ前から、場所を変わるべき時が来ていたのである。だが、今こんな一六勝負が始まって、カルタがひろげられたばかりなので、詐欺師はその方にひかれて、自分のおじけづいた心を打ち捨ててしまった。まず「胴元を打つ」か。やすやすと将軍になれたり、絞め殺されたりする、そんな気違いじみた時がやってくるまで待つことだ。しくじりだけはやらかさねえようにうに！ 大きな勝負があるのは一ぺんだけだからな……と彼は仕事に取りかかった。

ジョーベクは、自分といっしょに、憲兵隊の伍長ふたりと軍曹ひとりを伴って、労働者街へ一頭立ての馬車を走らせた。軍曹のコブィリスキーは、つい先ほどまでプシカーリスカヤ夫人の「建物」の番人をしていたのである。

馬車は、プシェニーチェクの住んでいる家のそばに止まった。

「ストップ！」と、ジョーベクが舗道へとび出した。「コブィリスキー、おれについて来い！ あのプシェニーチ

ェクの餓鬼がうまくつかまるかもしれねえぞ……」と剣を握って、彼は庭へ駆け込んだ。

「あいつだ、あいつだ！ 止まれ！ 撃つぞ！」と、ジョーベクは残忍な喜びにひたりながら、わめき立てた。彼の目と鼻の所で、背の高いパン焼き職人の姿が、向こうの廊下へ飛び去って行ったのである。

レオーン・プシェニーチェクは、爆弾のように部屋へとび込み、すぐドアに鍵をかけた。

「あれ、まあ！ どうしたんだえ？」と、母親が叫んだ。

だが、もうドアはこわされだした。

「コブィリスキー、ぶちこわしてとび込まねえと、逃げちまうぞ！」

軍曹は勢い込んで走って来て、からだ全体の重みで、ドアに音を立ててぶち当たった。彼は、打ち破られたドアといっしょに部屋へ突入し、平衡を失って、どっと床へぶっ倒れた。その瞬間、プシェニーチェクは窓へ駆けつけ、頭で窓わくをたたきこわして、庭へとび出た。

ガラスが打ち砕かれたり、人々がなだれ込んで来たり、息子が逃げ出したりしたので、プシェニーチェクの老父母はぼうぜんとなってしまった。

「あいつを捕えろ！」と、ジョーベクが狂気のようになった。打ち破られたドアと、起き上がるコブィリスキーとが、彼が窓の方へ駆けつけるのをさまたげたのであった。

「また逃げやがった……。やい、このでくの棒め！ 何を見てたんだい？ 目の前にいたじゃねぇか、悪党！」

これを聞いて、コブィリスキーはくじいたひざをこすりながら、ふきげんに言葉を吐いた。

「ジョーベクさん、あいつはあなたの目の前にもいたじゃねえか……」

ジョーベクは、今度は老父に食ってかかった。

「やい、こら、老いぼれ！ 用意するんだ！ お前をあっちで痛い目に会わせてやる。あいつがどこに隠れているか白状するんだぞ」

「軍人様、なんでわたくしめを？」と、チェコ語とポーランド語を混じえながら、老人が片言を言った。

「この横着者、またお前はなんでなぞと問いやがるのか！ あいつがやって来たらすぐ知らせろと、きのうもお前に言っといたじゃねえか！」

「だんな様、どうしてもそんなことはできねえだ、血を分けたせがれを……」

「よーし、それじゃ、おれたちがお前に少し仕込んでやる。お前、なんでもみんな答えるんだぞ……行け！」

「あなたがたは、この人をどこへお連れなさるんです？」と、老婆が恐怖におののきながら、叫んだ。

「黙れ、この鬼婆！ お前たちはみんな一つ穴のむじなだ……。黙らねえと、その場で引導を渡してくれるぞ……」

老人は帽子もかぶらず、力なく頭を下げて、ふたりの憲兵にはさまれて行った。そのまわりには、どうして正直な車輪製造人が捕えられたのかと疑いながら、近所の者たちが黙り込んで立っていた。老人はもう二十年間も悪いうわさ一つなく、いつも静かにこの家で暮らしてきたのである。

それから三十分の後、四人の憲兵はパトラーイの留守宅に押し入り、その妻と子供たちをひどく驚かした。彼らのやって来たことは、すぐに近所の者の目についた。ここには、砂糖工場の労働者たちが住んでいたのである。間もなく、家の近くに労働者の群れが集まって来た。

「牢屋から出て来た小僧がお前になんと伝えたか？ 白状するんだ！」と、ジョーベクは、まるでとびのように、パトラーイの妻に襲いかかった。

「あたし、何も存じません……」と、このびっくりした、やせて小柄な女がつぶやいた。子供たちはしだいしだいに、彼女の背後の片すみへ身を寄せて行った。

「よーし、お前に……」と、ジョーベクは破廉恥にののしった。「お前に白状さしてみせる！」

彼は急いだ。その猟犬のような嗅覚は、檄文を印刷した者の足跡が、なんとかしてここで見つかるかもしれん、ということをかぎつけたのである。

「じゃ、いいか……。きのうお前のとこにあのプシェニーチェクが来たろう……。あいつはもうおれたちにつかまって、何もかもしゃべったんだ……。むろん、そりゃ、あいつに、したたかむちをくれたあとのこっだがな……。だから、お前がいくら打ち消してもむだなこった。おれたちはただ比べて見るだけなんだ。お前があくまで黙りとおしたり、うやむやにしたりするなら、そのつらの皮を引んむいてやるぞ。白状するんだ！」

女は片すみへあとずさりした。彼女は無気味になってきたのである。

「あたし……何も存じません……」

ジョーベクは急いだ。

「コブィリスキー、見せしめのためにこいつに食らわしてやれ！」

牛のような首と退化した人間のような低い額をして、四角い顔のコブィリスキーは、片手を振り上げた。手には、長いむちを握っていたのである。

母親も子供たちも同時に叫び声を上げた——。母親は痛みのために。子供たちは恐怖のために。

「黙れ、雌犬……。お前になんと伝えたか白状するんだ！ 言えと言ったら！ コブィリスキー、こいつにもう一つ食らわせろ！」

外に立っている者たちは、女の悲痛な叫び声を聞いて、ナイフで切られるような思いがした。

「あいつらはおかみさんをどうしてる



んだ？」

「おお、みんな、何をお前たちは立ってるんだ？　家の中にはいれよ。」

「あそこじゃ、おかみさんが痛めつけられているのに、お前たちはぽかんと口をあけているのか……」

「亭主を牢屋で苦しめるだけじゃ足らねえで、女房までひどい目に会わせやがるんだ……」

「おい、おめえたち、はいって行こうぜ！」

「待て！　どこへ行くんだ！」と、ドアのそばに立っていた伍長が、労働者たちに向かって叫んだ。

「お前たちは、おかみさんや子供をどうしようっていうんだ？」

「なんであの人たちは悲鳴を上げてるんだ？」

「家ん中にはいらせろ！」

「なんでみんな訳がわからねえんだ？」

この怒りに燃えたわめき声を聞いて、ジョーベクがドアの方へ駆け寄った。

「こりゃ、いったいどうしたこっだ？　今すぐみんなあっちへ行くんだ！」

だれも立ち去ろうとはしなかった。かえって、この町はずれの住人たちが、四方八方から騒ぎの方へ押しかけて来た。

「マルーシャおばさんが長いむちで打たれてらあ！　おいら、自分で窓から見たんだ……」と、垣にはい上ったバシリョークが叫んだ。

「なんで、おかみさんを打ちなさるんだ？」と、ひとりの年配の労働者が、うつろな調子でジョーベクにたずねた。

群集が押し迫って来た。ジョーベクは恐怖が冷たい樺太まむしのように、自分の背中をはっているのを感じた。彼は知っていたのだ。自分がこんなに恐ろしがっていることがわかったら、群集は自分を押しつぶしてしまうだろうと。それで、彼は皮サックから、連発銃をつかみ出したのである。

「みんなあっちへ行かねえと、撃つぞ！」

前列の者たちがあとずさりしようとしたけれど、そんなに遠く離れることはできなかった。みんなが後ろから押しかけていたからである。ただひとり、ジョーベクの前に立っているひげ武者の労働者だけが、その場を動こうともしなかった。

「お前、そんな物を振り回すなよ！　みんなを撃ち殺せる訳でもあるめえ……。ここからおとなしく引き揚げるんだ……」

一発の銃声がみんなの心臓をどきっとさせた。

その労働者は胸をつかみ、よろめいて、わきへ倒れた。そのまわりの群集は一度に散らばって行った。憲兵たちはパトラーイの妻を家から引きずり出して、辻馬車の中に投げ込んだ。憲兵たちは連発銃を構えて、踏み台の上に立った。

ジョーベクとコプィリスキーは、二

番めの馬車にとび込んで、駆け出して行った。

それから、殺された者のそば近く、見る見るうちに多くの人々が集まって来た。

ポーランドの憲兵たちが仕上げ工のグルシコーを殺したといううわさは、この町はずれの袋小路にまでひろまった。うわさはどこのすみずみにも入り込んで、ついに一番どんづまりの土小屋の所までも伝わってきた。大多数の人々は自分の目で事実を確かめようとして、パトラーイの家に急いだ。残った者は自分の小屋で、出来事をあれこれと熱心に話し合った。

「なんで殺されたんだい？」と、これを知らせて来た者に向かって、みんな一度にたずねるのだった。

「パトラーイの女房をかばったからだ。そいで、あのコプィリスキーがな、ほれ、プシカーリスカヤの所で守衛をやってたろう？　あいつがな、ピストルで撃ったんだ。」

「コプィリスキーじゃねえよ、市場でルーレットばくちの玉ころがしをやっていた男だ。」

「どこに法律があるんだ？　なんの理由もねえのに、人が殺される。」

「法律は一つだ——機先を制した者が勝ちなんだ。もう新手の主人どもがやって来やがったんだよ！」

「そうだ、今はこんなふうだ。一日無事で暮らせて、つるし首にされなかったら、ありがとうを言わなくちゃならんのだ。なんて悪い世の中になったもんだ！」

また、どこかでは、話の調子がいっそう激しくなってきた。

「おい、お前たちは何のことを？」

「こうなんだ、舌がむずむずするんだ……。こん畜生どもは勝手放題のことをしやがる。だから、おれたちはなおさら舌を締めつけているんだ。うちに帰りつくまでは、本当のことをしゃべらねえこっだ！　そうしねえと、夜中にどてっぱらに風穴をあけられっちもうからな……」

「そねえに、向こう意気がいいのに、なんでお前、ここにつっ立ってるんだい？　ポーランドのだんな衆の所へ行って、連中と相談するがいいや。」

「何をお前はせせら笑っているんだ？　あすこじゃ人が撃ち殺されてるのに、お前にゃ冗談ごとだな！」

「おれは言っとったじゃねえか、なあ、みんな、ドイツ軍に銃を持って行くんじゃねえぞとな。今はほれ、ドイツ軍はずらかろうとしとるし、ポーランドのだんな衆とはそりが合うはずがねえんだ。だからさ、くらの用意をしてるんだってことよ。」

「仲よくすりゃいいのに、どっちも自分のことだけ心配してるんだからな。」

「そうだ、そのとおりだ！　腹ん中じゃ赤んべえをしとくんだ。そして、ずらからせるがいいや、つかまらんようにな……」

「あすこにゃ、おれたちと同じ戦友がおおかた三百人ばかりもいるし……おれにゃ信じられねえよ。小銃を全部手渡したなんて！」

だがその時、男の妻が、話の中に激しく口を入れた。

「グナート、お帰りよ！　お帰りと言ったら！」

バランケービチの工場では、第二交替の労働者が仕事を終わりかけていた。工場の大門の所には、交替にやって来た者がぎっしりと集まっていた。労働者のある者は監督見張り所を通り抜けて、各自受け持ちの職場へはいって行き、残りの者は人殺しのあったことを知って、門のそばでぐずぐずしていた。

「何を立っているんだ？　おい、みんなさっさと通るんだよ！」と、工場の守衛が叫んだ。

「間に合うさ……。まだ汽笛が鳴らねえや。」

ボイラー室では、アンドリーが最後の一すくいの石炭を炉の火口に投げ込んだところだった。時計の針は三時に近づいていた。火夫はほかの者よりも、十分間前に交替することになっていた。

「やつらがグルシコーを撃ち殺したんだとよ、アンドリューシャ、聞いたかい？」と、言いながら、友人の火夫ドミトルーシがそばへ寄って来た。

このボイラー室に、新しい交替の者たちがはいって来た。そして、アンドリーは、次のようなきれぎれの文句を耳にしたのである。

「門の所じゃ、大変なことがおっぱじまったぞ！」

「警備のやつらがあっちに駆けて行くのを、お前見たかい？」

その時、窓の向こうで銃声が一発鳴り響いた。火夫たちは互いに顔を見合わせた。

「今のはなんだ？」

数秒間というもの、引き続き銃声が起こりはしないかと、みんな思わずじっと耳をそばだてるのだった。アンドリーは、ボイラー外皮の足場伝いに、はい上がって行った。上の方には三つの狭い窓がある。そのうちの一つが開いていた。そこから工場の門が見えたのである。そこでは、なんだか変なことが持ち上がっていた。門の前の広場いっぱいに、群集がひしめき合っていた。だれかひとりの男が塀によじ登って、群集に向かって何か叫んでいた。そうするうちに、工場警備の軍団兵が次から次と門の方へ駆けつけて来た。

一番若い機関士のスツルミールが、隣の機関室からボイラー室へ駆け込んで来た。

「なんでお前たちは交替の汽笛を鳴らさないんだ？」と、彼は力いっぱいに叫んだ。

「アンドリーはどこにいるんだ？　汽笛を鳴らせったら！」スツルミールは

ろうばいした。自分の言うことをだれひとり聞いていないのを見て、この機関士は、自分から汽笛の弁を開くロープに固着した環をつかみ、それを下へ引っ張った。

力強くほえたてる音が、アンドリーをぼうぜんとさせた。それまで彼は何もかも忘れて、門のところに始ったばかりの雑踏を見ていた。そこへ突然、このほえたてる音である。

どの戸口からも、人々が工場の庭へなだれ出た。

この労働者たちの半ばは女である。アンドリーは急いで床へ降りた。スツルミールは環を手放した。それで、環は上へすべり、汽笛のほえたてる音がやんだ。今やっと、機関士はアンドリーに気がついた。

「お前はどこをぶらついていたんだ？」

「おれは窓から見ていたんだ……」

「ええっ、窓から！　いい加減にしろ。なまけたら首だぞ！　お前を雇ったのは、仕事をさせるためだ……。さあ、みんな仕事を始めるんだ！」と、スツルミールは、火夫たちに怒鳴り散らし、機関室へ走って行った。

アンドリーは、数秒間じっと動かずに立っていた。一つの考えが彼をとらえ始めたのだ。

彼はためらい、その考えを遠ざけようとした。だが、それはもう彼の心をつかんでしまった。高い所から跳躍する直前のように、彼の心臓は麻痺した。

そして、もう次の瞬間、彼はドアの方へ突進し、それをばたりと締めて、かけた鍵をポケットに入れた。それから、ボイラーの方へ引き返し、汽笛の環をつかんでぶら下がった。汽笛は、またほえたて始めたのである。

「お前どうしたんだ、気でも狂ったのか？　アンドリー！」と、火夫たちは彼に食ってかかった。「おれたちをみんな首切らせる積もりか？」

だが、アンドリーは彼らに耳をかさない。彼は環を下に引っ張り続けた。

「やめろ、アンドリューシカ！　みんなが追っぽり出されることになるんだぞ」と、ドミトルーシがしきりに頼み込んだ。

アンドリーは、あいている方の手で石炭粉砕用の重いかなてこをつかみ、ドミトルーシに面と向かって叫んだ。

「連中にここからずらかるように言うんだ！　非常口を抜け出してな……。おれがかなてこでぶんなぐるぞと言ったと言え……」

だが、彼の言うことは聞こえなかった。それで、アンドリーは環を手放した。ほえたてる音は、たちまちにしてしずまった。彼は両手でかなてこをつかみ、炭塵でまっ黒な顎に目だけぎょろぎょろと光らせながら、仲間たちへ叫ぶのだった。

「非常口からとび出してくれ！　なあ、みんな、仲間として頼むから——今すぐとび出してくれ！　おれは汽笛を鳴らして、人々を立ち上がらせたいんだ……おれひとりが苦を見りゃいいんだ……おい、みんな、駆け出してくれ。でねえと、かなてこでどやしつけるぞ！　さあ、急ぐんだ！」と彼は手を振り上げた。火夫たちは群らがって、非常口から表へ飛び出した。

アンドリーは、鉄の掛け金を非常口のドアに引っ掛け、自分のかなてこをドアの握りと握りの間に突っ込んでおいて、再び環をつかんだ。またも大気を打ち震わせつつ、とぎれとぎれに凶事の恐ろしい報知者——汽笛がほえ出したのである。それは町の人々をみんな戸外にとび出させた。……監獄でも、みんなこの断続的にほえたてる音に聞き入った。停車場では、ドイツの軍用列車から兵隊がとび出し、あたりを見回した。そして、なおも汽笛はほえ続けたのである……。

警備の者たちは、ボイラー室のドアをぶちこわそうとした。だが鉄張りの部厚いドアは、彼らがいくら銃の床尾で打ちつけても、びくともしなかった。

「はしごを持って来い！　窓に登るんだ！　畜生、あいつを撃ち殺せ！」と、警備隊の伍長ががなりたてた。

一発の銃声が窓にとどろき、弾丸が彼の頭のそばをうなり過ぎた時、アンドリーはやっと身の危険に感づくことができた。彼は、思わず環を手放してしまった。ほえたてる音はやんだ。アンドリーはまた弾丸が飛んでくるのを避けるため、石炭庫の中に飛び込んだ。

騎銃を持った二本の腕を前方へ差し伸ばし、ひとりの軍団兵が窓から割り込んで来ようとした。アンドリーは、石炭庫の中で、袋のねずみのようにもがいた。彼はもはや自分に最後がやってきたのを知って、絶望のどん底に押しやられた。

窓は狭かった。それで、軍団兵はやっとのことで一方の肩を窓から前へ押し出すことができた。後ろからみんなが彼を押し上げていたのである。アンドリーは、とっさに一塊の無煙炭をつかんだ。そして、殺される覚悟で石炭庫からとび出した。手を振り上げ、窓をめがけて力いっぱい石炭を投げつけた。石炭は、軍団兵の顔にまっこうからぶち当たった。相手はうめき声を上げた。彼の顔は見る見るうちに血まみれとなった。彼は、騎銃を取り落とし、下から自分をささえている警備の者たちの腕の中に倒れ込んだ。騎銃はボイラー室のセメントの床にぶっつかって、がちゃんと音を立てた。また銃声が一発鳴り響いた。アンドリーは喜んで、気も狂わんばかりだった。彼は続けざまに石炭を窓に投げつけた。

窓の向こうでは、がみがみとののしり合う声が聞こえた。兵士たちは、はしごから、大急ぎで地面へはい降りた。

アンドリーはますます狂暴になった。

彼は、自分のバンドをはずして、それで汽笛の環を圧力調整器に縛りつけた。

汽笛はまたもほえ始めた。それはもはや、きれぎれではなかった。というのは、アンドリーがバンドをきつく締めつけたからである。

今はもう、彼の両手は自由になっていた。彼はすきを与えまいとして、絶えず窓に石炭を投げつけるのだった。

アンドリーは、ほこりまみれになってたたかっていたので、ボイラー室にまだ二つの窓があることを忘れていた。二つの締った窓のガラスが打ち砕かれ、壁のしっくいが飛び散った時、やっとアンドリーは、窓が三つもあったのでは、もはや自分の手におえないということを知って、がっかりした。飛びくる弾丸は、再び彼を石炭庫へ追い込んだ。窓の一つに騎銃の銃口が現われた。

アンドリーは怒り狂って、それに石炭を投げつけた。だが、もう一つの窓からも撃ってくるので、彼はやむなく後ろにとびのいた。

「もうこうなりゃおしまいだ！」アンドリーはこう言って、今にも泣き出しそうになった。彼は、急に力抜けがし、ひどく弱ってしまった。

彼はどっと重苦しい疲労を感じてきた。そしてもう抵抗するのをやめ、石炭庫のすみにうずくまった。その時、なんだか彼の額にひどく突き当たるものがあった。アンドリーは、思わず自分に突き当たったものをつかんだ。それは人夫たちが石炭を湿らすために使う消火管の金環であった。

疲れた意識の中で、何かひらめくものがあった。

「は、はあ、てめえたちゃ、もうおれをつかまえた積もりでいやがるんだな、ポーランドの悪党め！　今にどうするか見ておれ！」サイレンのほえたてる気違いじみた音に、彼の言うことはだれにも聞こえなかったけれど、彼は大声にこう叫んだのだった。

アンドリーは、ホースに水を引き入れる車輪を、狂気のように回転させた。蒸気がぴゅっぴゅっと鋭い響きをたてて、消火ポンプから吹き出した。それに続いて、熱湯がほとばしり出た。石炭庫は蒸気でいっぱいになった。アンドリーはもう息がつまりそうだった。彼はぶるぶる震える両手で消火ポンプをつかみ、たぎる湯の飛沫に指をやけどして苦しみながらも、熱湯の流れをボイラー室の方へ向けた。

そして、もう自分が殺されるということなどは考えもしないで、三つの窓を目がけて奔流をぶっつけた。窓の向こうでみんながわめき立てているのを聞きながら、彼はボイラーの間に腰掛けたまま、自分の頭を突き出さずに消火ポンプを動かして、窓に熱湯を注いでいた。

彼の心臓は張り裂けそうであった。ボイラー室いっぱいに蒸気が充満した。床の上を熱湯が流れた。アンドリーはそれを避けるため、ボイラーの粘土カバーの上に上がった。彼は息苦しかった。手がひりひりした。だが、逃げ道がないのだという意識が、彼に抵抗を続けさせた。

咆哮は町中に響きわたっていた。

☆

☆

☆

トピックス

オリンピック映画製作の独占権

ソ連閣僚会議国家映画製作委員会（ゴスキノ）は、1980年オリンピック公式映画を製作する独占権を獲得した。80年オリンピック組織委員会とゴスキノとの間で、このほどこれにかんする協定が調印された。

オリンピック映画は、オリンピック競技を諸国民間の相互理解の達成を促進する国際スポーツの最大の出来事として、その精神とふん囲気を再現するものとなろう。ゴスキノはまた、モスクワ・オリンピックで撮影される個々の競技種目の映画を製作、配給する独占権も与えられた。

巨大タンカー試運転

ソ連のマンモスタンカー〝クズバス〟号（18万2000排水ｔ）が昨年末、黒海で試験航海に入った。このタンカーは17ノットの速力で15万ｔの石油を運ぶことができる。このタンカーには爆発を防止する独創的な方法が初めて採用された。



カフカズに獲物を追って（上）

文と写真　宮城哲生

▶カフカズ山脈の峰の一つ。ここに山岳山羊が生息する。

世界の猟場を駆け巡り、数々の大物ゲームを射止めてきた小宮荘次郎・全日本狩猟倶楽部副会長、尼ヶ崎興三・同東京支部監事、岸本重根氏（会社社長）ら三名の日本人ビッグ・ハンターたちと筆者は、一九七六年十一月二〇日、ソ連政府観光総局の招きをうけて、日本人として初めて晩秋の大カフカズ山脈で狩猟をすることになった。

ヨーロッパとアジア両大陸に位置し、多様な気候条件と豊富な動物相と植物相をもつソ連国内に、世界でも有数の好猟場が存在することはあまり知られていない。こういうわけで、狩猟動物の種類がきわめて多いロシア連邦共和国内の北オセチア自治共和国のベルフニャヤ・サニワ猟場へ出かけることになった。

カフカズ狩猟旅程は、まず東京羽田空港からアエロフロートの長距離大型旅客機イリューシン62M機でモスクワのシェレメチエボ国際空港まで十時間三十分飛び、翌る日都心から南西三十五キロにあるドモジェドボ空港からミネラーリヌイエ・ボーディ空港へ向かった。飛行時間は約二時間である。ミネラーリヌイエ・ボーディ空港のすぐ隣には詩人レールモントフ（一八一四―一八四一）が住み、決闘しそして倒れた場所としても有名な風光明媚な保養地ピャチゴルスクがある。

日本人ビッグ・ハンターの一行は、カフカズ航空路の中心地ミネラーリヌイエ・ボーディからさらに南へ二百四十キロ、乗用車で北オセチア自治共和国の首都オルジョニキーゼ市へと向かった。オルジョニキーゼ市は北カフカズの中央部を流れる渓流テレク川の両岸に広がった人口二十五万人の美しい歴史的な町だ。十八世紀に中部ロシアとカフカズを結ぶ重要な戦略道路に構築されたウラジカフカズ要塞から町が出来あがったのだという。オルジョニキーゼ市は北方からの鉄道の終点となっていて、カフカズ山脈を横切ってグルジア共和国の首都トビリシ市まで続く、その景観が驚くほど美しいグルジア軍用道路の基点にもなっている。

しっとりと落ち着いた街のたたずまいのオルジョニキーゼから狩猟ベースキャンプまでは目と鼻の先だ。市から十二キロの所にあるこのベースキャンプは正式には北オセチア自治共和国国営林業狩猟場といい、サニワとカルマドンの二つの基地をもつ。

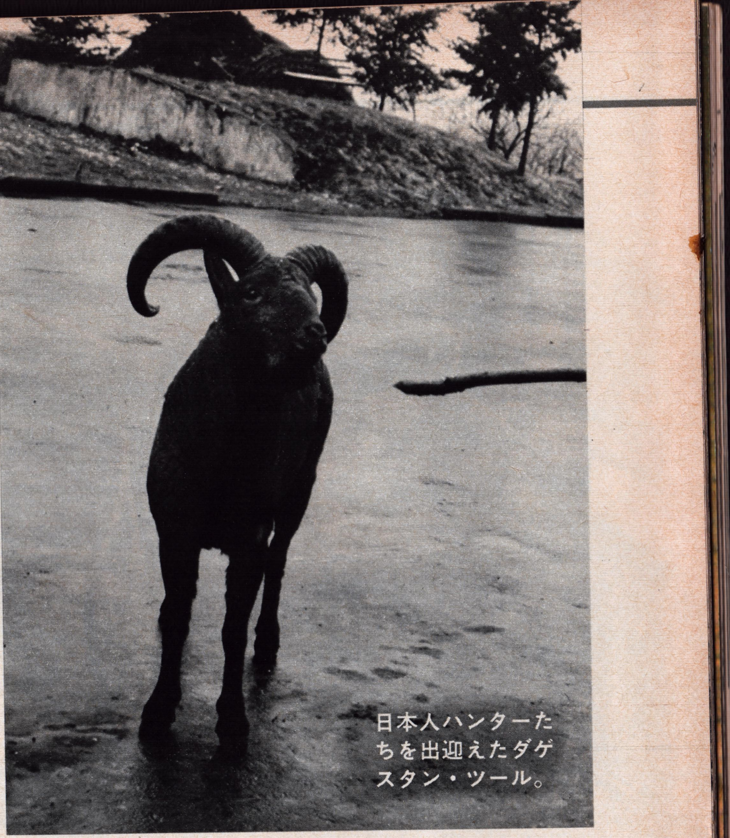
市から車で二十分、山の麓のベースキャンプのサニワのホテルからは夕陽をあびて金色に照り返すテレク川が眺望できる。ここで、思いがけないものが、日本人ハンターたちを待ち受けていた。国営狩猟場でゲームとして保護されているカフカズの野性の山岳山羊、ダゲスタン・ツール（マ



マシュク山上から見たピャチゴルスクの市街。



18世紀の要塞の跡がカルマドンの山麓に残っている。



日本人ハンターたちを出迎えたダゲスタン・ツール。

ウンテン・シープ）の牡が実験的に飼い馴らされていたのだ。

　ダゲスタン・ツールはカフカズにだけしか生息していない珍しい有蹄動物だ。牝は七十キログラム、牡は百五十キログラムの生体重量に達し、ツノは背に向かって弓なりで、つけ根は荒々しく太い。この動物は八百メートルから四千二百メートルの高所に生息し、きわめて敏捷、敏感だ。時には三百頭までの群れを作り、リーダーが引率する。昼は高い山の上で岩蔭や、樹の蔭に隠れ、夜、山麓まで草や、低木の芽や枝を食いに下ってくる。カフカズには約二万―二万五千頭のダゲスタン・ツールが生息しているという。

　サニワで飼っていたダゲスタン・ツールは囲いから出されて、低い背丈、反り曲がった螺旋状のツノ、密生したアゴひげ、赤みがかった灰色の体毛――日本人ハンターたちの前に、その姿を現わした。

　こうして、大カフカズ山脈でのダゲスタン・ツールの狩猟がサニワの狩猟基地からいよいよ開始されることになるのである。北オセチアのサニワとカルマドンの国営狩猟場では山岳山羊の他に、大物ゲームとしてはカフカズ産ヒグマ、イノシシ、欧州産ノロ、カモシカ、カフカズ産アカシカなど、多数の狩猟動物がいる。

　北オセチアでのダゲスタン・ツール狩猟では、ソ連政府観光総局エブゲニー・コロリコフ・アジアアフリカ局長が随行し、アレクサンドル・クペーエフ北オセチア国営狩猟場長が日本人ハンターたちに、狩猟場の状況や、ゲームの生態、地形や気候について説明してくれた。また、カフカズ山脈での狩猟には経験豊かな地元民、北オセチア人猟師たちが数名、案内人兼ハンターとして協力することになった。

　地中海と黒海の間に連なる荘厳な大カフカズ山脈の懐の中に包まれながら、日本人ハンターたちは、来るべき大物狩猟の準備に余念がない。

（つづく）



カフカズ山脈のただ一つの交通機関ロバに荷物を載せて、出発準備が終わる。

本だな

ソ連の学者が分析する日本の対外経済関係



『世界経済関係システムにおける日本』の表紙

　ソ連科学アカデミー世界経済・国際関係研究所の日本経済部が、日本の対外経済関係にかんするモノグラフを発表した（『世界経済関係システムにおける日本』――一九七七年、モスクワ、ナウカ出版所、定価2ルーブル10コペイカ）。

　世界経済関係システムにおける日本の活動の強化と、日本が資本主義世界の大輸出入国の一つになったことは、つねに外国の経済学者の関心を集めている。ソ連でも、一九五〇―一九六〇年代の日本経済の高い成長テンポの原因を探り、日本の経済における構造的変動と社会・経済問題を分析した著書は少なくない。今回出版されたこのモノグラフの使命は、ソ連の学者による日本の対外経済問題研究の空白を埋めることだと著者たちは考えている。

　Y・ストリャロフ経済学博士候補の指導の下で10人の研究者によって準備されたこのモノグラフは、二部に分かれている。第一部（「世界経済関係システムへの日本の関与の規模と形態」）は、世界資本主義経済全体における日本の立場の分析を内容としている。第二部（「世界各国および各地域との日本の経済関係」）は、日本とアメリカ、西欧諸国、ソ連および発展途上諸国との関係の特質を扱っている。また日本とオーストラリアおよび中華人民共和国との貿易経済関係にも触れられている。

　この本では、日本の対外経済上の立場を最終的に規定している競争力の高い経済力は、それだけではその立場を強化する十分な条件ではないことが指摘されている。対外経済上の立場を強化するには、世界経済関係システムへの日本の広範な関与が必要である。

　しかしながら日本経済の発展は、一九七〇年代初頭に、国外からの原料資源調達の可能性の具体的な枠を越えてしまった。従ってつねに潜在していた日本経済の古くからの弱点――原材料の欠如が露見しはじめた。このような状態から脱却するために日本の経済界は、今後の対外経済の発展の多様な方向を探り、経済と対外貿易の構造を再建しようとしている。しかし、付加価値が非常に高く、原材料および燃料の比重が低い製品（いわゆる〝知識集約型製品〟）の輸出に移行する場合に日本は、この製品の流れをだれが消費するのかという問題に突き当たらざるをえないだろう、と著者たちは強調している。

　日本の対外貿易量の約半分を担っている発展途上諸国は、このような製品のかなりの部分を吸収するというような状況には恐らくならないだろう。先進資本主義諸国はどうかといえば、これらの国々もまた同様の製品の生産と輸出を拡大しており、世界市場における日本の競争相手となるだろう。

　この著書の指摘によれば、日本は、世界経済関係システムへのこれまでの関与における好ましくない現象を克服するために、資本主義諸国との関係を生産の協業化と分業化の線で深化拡充する路線を歩みはじめ、自己の対外経済関係の多様化をはかっている。日本が必要とする多くの商品を持つソ連を始めとする社会主義諸国との貿易経済関係の全面的な発展は、日本が世界市場における自己の立場を根本的に強化することのできる方法の一つである、と著者たちは考えている。

　ソ連としては、日本の工業製品の買い付けを拡大しており、今後もこの傾向を持続する用意がある。そのほかにも、日本と、シベリアや極東で原料大量消費型およびエネルギー大量消費型製品の生産を展開しているソ連との経済関係の発展は、日本で生産が削減されるであろう――と著者たちは考えている――この種の製品のソ連からの輸入に日本が客観的に関心を持っている結果、新しい強力な刺激を得ることができる。

　これらのファクターを考慮すれば、長期にわたるソ日間の有益な経済協力の客観的な可能性と前提について、確信をもって語ることができる、とこの本は強調している。

olympics-80

準備すすむ 五輪衛星都市

80年オリンピックの期間中、ベロルシアの首都ミンスク（モスクワの西方七〇〇km）は、オリンピック都市になる。ここでオリンピックのサッカーの予選、同じく準々決勝試合のひとつが行われるからだ。競技開催中、ミンスクには選手以外に、世界各国から多数のツーリストもやってくる。

80年オリンピックの開会時までに準備されなければならない諸施設はきちんと決められている。そのうちの中心施設である〝ディナモ〟スタジアムではすでに改修工事が進行中。競技場の観客席は現在四万二〇〇〇人収容できるが、改修後にはさらに七〇〇〇人増える。計画によるとスタジアムの既設入口の拡張が予定されている。広くて便利な階段と、スタジアムと未来の地下鉄の駅を結ぶ歩道が出現し、照明設備が改善される。ソ連や外国の記者たちのためのプレスセンターには快適なテレビ・ラジオ放送用ボックス、テレタイプ室や長距離電話室が設置される。スタジアムの近くには収容力の大きな駐車場、地下通路が出現する。

オリンピック出場チームの練習用に〝トラクトル〟スタジアムが準備される。その観客席も同じく二万五〇〇〇席に拡張される。

出場チームは、市から6kmの緑地帯にあるスポーツ・キャンプ〝スタイカ〟に宿泊する。ここのホテルには八五〇人が同時に宿泊できるようになる。ここにはレストラン、医療センター、人工池、8面の練習用サッカー・コートが建設される。

一九八〇年までに市内の一流ホテル、キャンピング場および駐車場付きホテルはすべてお客の受け入れ準備が完了する。新しい24階建てのホテル〝ベラルーシ〟がオープンする。

オリンピックの選手やツーリストのためにレストランや喫茶店の優秀なコックと菓子職人たちがベロルシアの伝統的な料理や他の料理に腕をふるう。商店やキオスクには民芸品、五輪マーク付きのみやげ品が売りに出される。

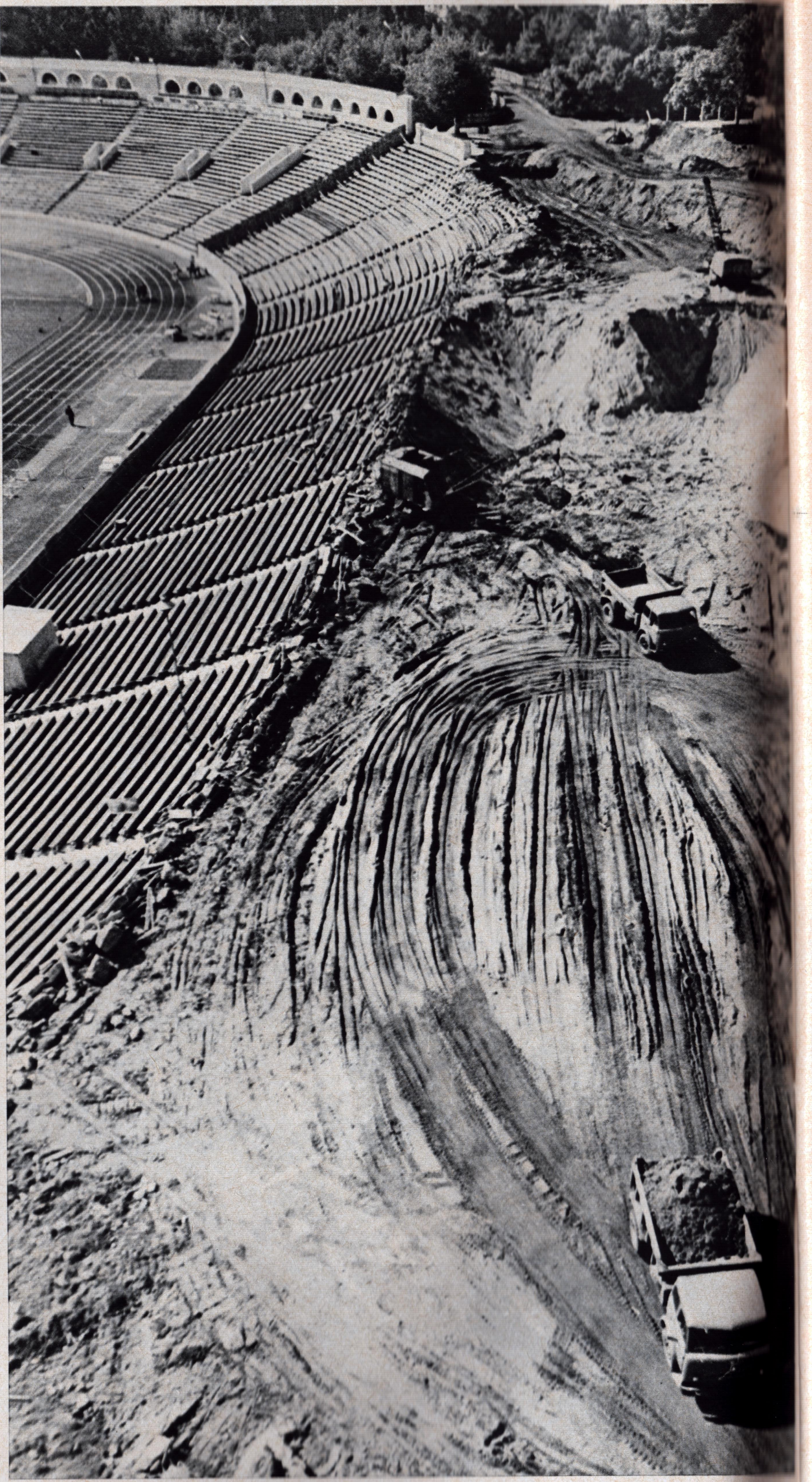
ミンスク市民たちは、選手やツーリストの市滞在が、面白く、思い出深いものになるように全力を尽くすだろう。



◀ベロルシア民族料理展に顔を見せたS・ルカシェービチ・ミンスク市長（左）とベロルシア・オリンピック委員会副議長、ベロルシア共産党ミンスク市委員会第一書記のG・バルトシェービチ（本誌2号10ページに登場）



オリンピック施設の設計を検討する関係者。中央手前はG・バルトシェービチ。



◀ディナモ・スタジアムの改修工事



1980年までにディナモ・スタジアムの近くにホテル〝ベラルーシ〟がオープンする（写真は模型）

スポーツ

女子体操界のホープ

ニーナ・マクサコワ
カメラ　D・ドンスコイ

昨年、これまでソ連の女子体操界をリードしてきたリュドミーラ・ツリシチェワ、オリガ・コルブト、エリビラ・サージの三人が現役を退いた。この三人に代わる逸材として期待されているのが、マリヤ・フィラトワ、エレーナ・ムーヒナ、ナタリア・シャポシニコワ。

昨シーズン、この三人は各種大会で大活躍、フィラトワはワールドカップ、ムーヒナはヨーロッパ選手権、シャポシニコワはソ連カップに優勝した。彼女らはソ連女子体操界のエース、ネリー・キムと共にソ連チームの不動のメンバーとなったが、今一番注目をあつめているのはシャポシニコワ（ロシア南部のロストフ・ナ・ドヌー市に在住）。

オリンピックの金メダリスト、ツリシチェワはシャポシニコワについて、「モントリオール・オリンピックに出場した体操選手一人一人のもっともすばらしいところをピックアップして、一人の体操選手をつくると、シャポシニコワになる。彼女の演技は音楽性、芸術性、優美性のどれをとってもすばらしく、モスクワ・オリンピックで世界女子体操界の頂点に立つ可能性を秘めた選手である」――と語っている。

シャポシニコワの名が体操界に知られたのは、一九七六年のモスコー・ニューズ紙杯で三位に入賞してから。この三位入賞で彼女はモントリオール行きの切符を半分手に入れたが、ミンスクで開かれた最終選考会で七位以内に入ることができず、オリンピックチームのメンバーにはなれなかった。コーチのウラジスラフ・ラストロッキー（ツリシチェワのコーチでもあった）は、最終選考会が終わった後、次のように語った。「シャポシニコワが選ばれなかったことについては、私のミスだった。それは、私がオリンピック三回連続出場をめざしていたツリシチェワにつきっきりだったため、シャポシニコワはほとんど一人で練習しなければならなかったからだ。しかし、来年、世界の体操界はシャポシニコワの名を知るだろう」

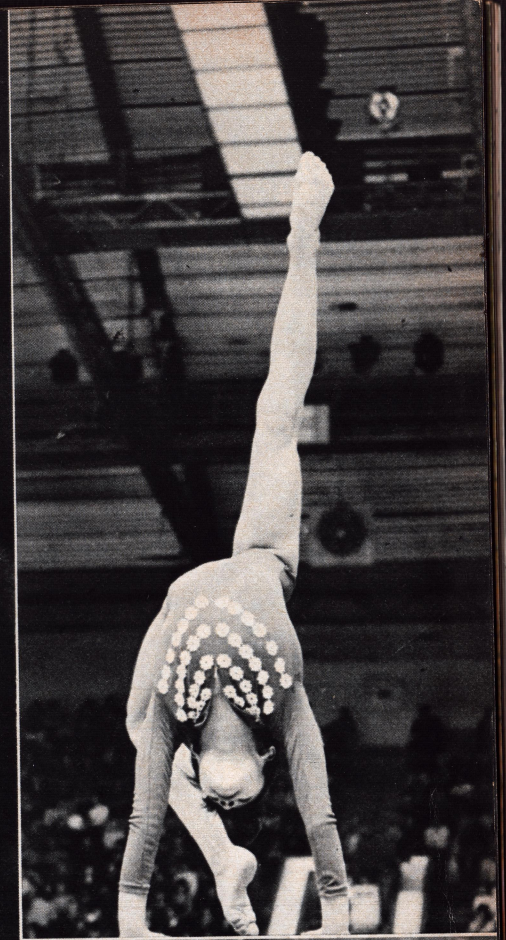
一九七七年度モスコー・ニューズ紙杯ではシャポシニコワはフィラトワについで二位に入った。彼女の演技は一年前とは全く違っていた。とく



競技会で苦境に立ったときは、ラストロッキー・コーチの励ましが何よりの薬。



ナタリア・シャポシニコワの目標は同門の先輩ツリシチェワのようになること。







右上　平均台のユニークな演技
右中　さっそうとした床運動の演技
右下　平均台ではコルブト・スタイルの下りを見せる。

に、床運動と平均台の演技は、会場をうめた満員の観客を完全に魅了した。両種目の演技はドラマチックで、随所にウルトラCをおりこんだものであった。しかし、平均台では台から落ちてしまった。ラストロツキー・コーチは彼女が台から落ちた時、「演技の安定ということを忘れたのか」とどなっていた。大会終了後、私はラストロツキーのところに行き、「シャポシニコワの平均台の演技は全くすばらしい、まるで〃飛行機〃だ。よくあれだけのむずかしい技を考えましたね、おめでとう!」と言ったところ、彼はニッコリして、「そうです、まさに〃飛行機〃です、われわれが開発した〃飛行機〃ですよ」と語った。

床運動ではシャポシニコワはチャイコフスキーの『くるみ割り人形』の音楽をバックに見事な演技を披露した。随所にアクロバットの要素を取り入れた演技は、まさに『くるみ割り人形』にピッタリで、男子にとってもむずかしい二回宙返りを楽にこなしている。この宙返りの後一転して古典バレエの柔らかさと優美さを見せる演技のコンビネーションは、すばらしいの一言につきる。段違い平行棒の演技は非常にスピーディーだった。

ラストロツキーの教え子であるツリシチェワとシャポシニコワの性格は全く異なっている。ツリシチェワは我慢強く、コーチの言うことをよくきいたが、シャポシニコワは口答えが多い子だ。ツリシチェワはバレエ学校をやめて体操に、シャポシニコワは新体操から体操に転向した。学校での成績はツリシチェワがオール5、シャポシニコワも先輩に劣らない成績をあげている。ソ連代表チーム入りしたのは共に15歳の時。ツリシチェワは練習熱心な選手として有名だったが、シャポシニコワも先輩に負けず練習熱心。

ツリシチェワがシャポシニコワのことを妹のように心配しているのは、有名だ。昨年10月スペインのオビエドで開かれたワールドカップは、シャポシニコワにとって国際舞台へのデビューを飾る大会であった。段違い平行棒では宙返りを多く入れ、フィニッシュでは二回宙返りという演技をみせた。観客を魅了したのはバレエ組曲『カルメン』の音楽をバックにした床運動で、伴奏を担当したエフセイ・ベブリクはこの演技を〃小さな闘牛士〃と呼んでいる。

平均台で足を踏みはずしたシャポシニコワは演技終了後ラストロツキー・コーチにきびしく何か言われていたようだった。その時、ツリシチェワはシャポシニコワを抱きしめ、なぐさめた。ツリシチェワのはげましで落ち着きをとり戻した彼女は跳馬で〃燕とび〃を見事にきめ、種目別の優勝を飾った。

ワールドカップで三位という成績は、シャポシニコワにとって立派な成績である。

ツリシチェワはシャポシニコワについて次のように語っている。「シャポシニコワの性格の中で一番いいのは、失敗を全く恐れないことです。彼女の演技は静と動が非常にうまくマッチしており、その才能もまだまだ伸びる」

80年のモスクワ・オリンピックでシャポシニコワがキム、フィラトワ、ムーヒナらと共に祖国に団体優勝の金メダルをもたらし、コマネチをふくむ外国のライバルや同僚と個人総合優勝をめぐって争うことを期待している



シャポシニコワ得意のジャンプ

今日のソ連邦
一九七八年2月15日号
編集・発行 ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3—9—13、郵便番号141、電話03・447・3536）
印刷 大日本印刷株式会社

ハンターと釣り人の皆さん！



“インツーリスト”はソ連での楽しい狩猟と釣りをお勧めします！

よい目としっかりした腕、よい銃とよい釣り具をお持ちの方には、すばらしい獲物が待っています。

“インツーリスト”はソ連国内でのクマ、イノシシ、シカ、ヘラジカ、ノロ、野生ヤギ、シャモア、山鳥、水鳥などの狩猟ツアーと魚釣りツアーを提供しています。

ハンターの方たちには、ソ連の最も風光明びな土地——イルクーツク、クラスノダル、ソーチ、ロストフ・ナ・ドヌー、カリーニン、バクー、オルジョニキーゼ、ヘルソンその他の周辺にあるホテルが提供されます。

“インツーリスト”は、狩猟の場所までのご旅行、ホテル、狩人小屋、テントでの宿泊のお世話をいたします。また、狩猟のときの交通のお世話、狩猟と釣りのさいの装備のお世話もいたします。

詳細についてのお問合わせは、東京都港区六本木4—1—16 六本木ハイツ内 ソ連政府観光局（電話03・584・6617）、あるいはソ連旅行を扱っている日本の旅行代理店へどうぞ。